

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	山田 洋平
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 290 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ダグール語の述部の諸相

Name	Yamada Yohei
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 290
Date	March 12, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	On the features of Dagur predicates

東京外国語大学博士学位論文
「ダグール語の述部の諸相」

2019 年 12 月

東京外国語大学
山田洋平

目次

序論

0.1. 本論文の目的	1
0.2. 本論文の意義	2
0.3. 本論文の構成	3
0.4. データ	4
0.5. 謝辞	6

本論

第一部 ダグール語の概要	7
--------------------	---

第一章 ダグール語とは	8
-------------------	---

1.1. 類型論的特徴	8
1.2. 言語の社会的背景	9
1.2.1. 言語の分布	9
1.2.2. ダグール語研究史	11
1.2.3. 「ダグール語」という言語名について	13
1.3. 表記	14
1.3.1. 母音	14
1.3.2. 子音	18
1.3.3. 語の成り立ち	22
1.4. 形態的特徴	34
1.4.1. 語類	34
1.4.2. 名詞類	35

第二章 動詞の形態的特徴	45
--------------------	----

2.1. 動詞の形態の概要	46
2.2. 動詞接辞	48
2.2.1. 後続要素による分類	48
2.2.2. 「形動詞」	52
2.3. 派生接辞	53
2.3.1. 文法的な派生接辞	53
2.3.2. その他の派生接辞	54

2.4. 動詞前辞	56
2.4.1. 概要	56
2.4.2. 音韻・形態的特徴	57
2.4.3. 共起する動詞	58
2.4.4. 意味的特徴	60
 第二部 述部のさまざまな形式	61
 第三章 述部の基本構造	62
3.1. 述部とは	63
3.2. 動詞述語の概要	65
3.2.1. 動詞述語とは	65
3.2.2. 補助動詞構造	66
3.3. 名詞類述語の概要	76
3.3.1. 名詞類述語とは	76
3.3.2. 名詞類述語のタイプ	77
3.4. 述語複合体	80
3.4.1. 述語複合体とは	80
3.4.2. 人魚構文	82
3.5. 否定	85
3.5.1. 否定の種類	85
3.5.2. 二種類の否定の使い分け	89
3.6. 存在と所有	97
3.6.1. 概要	97
3.6.2. 動詞 aa_	97
3.6.3. 存在を表す語 bei	99
3.6.4. 接辞-tii	100
3.6.5. その他の存在	101
3.6.6. 存在表現の否定	102
3.6.7. 存在表現の使い分け	102
3.7. まとめ	107
 第四章 節のタイプと述部	109
4.1. 主節の述部	109
4.1.1. 主節の特徴	109
4.1.2. 述語人称	116

4.1.3. 終助詞	123
4.2. 非主節の述部	138
4.2.1. 非主節とは	138
4.2.2. 等位接続	142
4.2.3. 従位接続	144
4.2.4. 連位接続	146
 結論	
終章 ダグール語の述部形式	149
 参考文献	
記号・略号一覧	155
図表一覧	156

図表一覧

表 0-1: 調査の概要	4
表 0-2: 使用したテキスト	5
表 1-1: ダグール語の母音体系 (第一位)	14
表 1-2: ダグール語の母音体系 (第二位以降)	16
表 1-3: ダグール語の基本子音体系	18
表 1-4: ダグール語の口蓋化子音の体系	21
表 1-5: ダグール語の円唇化子音の体系	21
表 1-6: ダグール語の母音調和	23
表 1-7: ダグール語の「音節末」の子音連続	29
表 1-8: ブトハ・ダグール語の人称代名詞と指示代名詞	37
表 1-9: 基本格	38
表 1-10: 非基本格	41
表 1-11: 所属人称	42
表 1-12: 再帰	43
表 2-1: 終助詞を付することができる動詞接辞	48, 110, 139
表 2-2: 所属人称接辞を付することができる動詞接辞	50, 110, 139
表 2-3: 何も付することができない動詞接辞	51, 140
表 3-1: 名詞類述語文の表し得る意味	77
表 3-2: ダグール語の述語複合体の基本的な組み合わせ (動詞と名詞類による)	80
表 3-3: 動詞述語の否定表現	85
表 3-4: 動詞 aa_ が伴う動詞の形式	97
表 3-5: 存在表現 3 種類の使い分け	105
表 4-1: 終助詞と述語人称を付することが可能な動詞接辞	111
表 4-2: 終助詞を付することができるが、述語人称を付することができない動詞接辞	113
表 4-3: ダグール語の述語人称	117
表 4-4: 非過去と述語人称	118
表 4-5: ダグール語の節連結	142
表 4-6: ダグール語における conjunct	146
表 4-7: ダグール語における disjunct	147

図 1-1: ダグール族の主な居住地	10
図 1-2: AA 型の異形態の取り方	27
図 1-3: ダグール語の 2 種類のアクセント	31
図 2-1: 動詞の基本構造	46, 53
図 4-1: 「終助詞」の機能段階	125
図 4-2: ジンガン (2010) の終助詞を三つに再分割	126
図 4-3: ダグール語の終助詞の承接関係	137

序論

0.1. 本論文の目的

本論文は、モンゴル語族ダグール語のとくに述部の諸相に注目して文法現象の記述を行うものである。筆者の主な関心ごととして、言語一般における「文」あるいは節といった単位がどのようなものであるかという疑問がある。言語一般における「文」とは何か解明することは筆者の手に余ることであるが、本論文では節の主たる構成要素である述部に焦点を当てることで、「文」あるいは節の成す構造を研究する土台を築いてゆく。モンゴル語族に属するダグール語は、類型論的に見て日本語などとも類似した構造を持つ部分もあり、本論文における文法記述が周辺諸言語の文法との対照研究にも寄与するところがあるだろう。

本論文では、ダグール語の述部の形式を実例から広く観察することで具体的には主に次のようなことを明らかにする。

- ① 典型的に節の述語を成す動詞という語類の、形態とその機能 (第二章)
- ② 動詞とその他の要素によって織りなされる、述部の構造 (第三章)
- ③ 文あるいは節という統語的な単位を考える土台となる、述部の機能 (第四章)

ダグール語の研究としては恩和巴图 (編著) (1988) をはじめとした総合的な記述がすでにあるが、その記述や分析はなおも十分であるとは言い難い。本論文では述部に焦点を絞り、従来の研究で十分に議論されてこなかった文法的要素の意味や機能などについて検討を行う。従来のダグール語の文法記述はその大筋において動詞などの形態論に重きが置かれる傾向があった。目的の①は、まず形態論で扱うべき内容とその機能に関する議論を別に扱い、整理し直すために必要なことである。そして本論文が対象とする統語論的な単位である述部について、内部構造を考察するのが目的②、節の働きを考察するのが目的③である。

0.2. 本論文の意義

本論文におけるダグール語の述部についての文法記述は、直接的にはダグール語研究の礎になるという意義があり、間接的にはアルタイ型の言語類型に関する研究にも資するものである。

ダグール語は Понне (1930) 以来、調査研究の蓄積があるが、その大分はモンゴル語との異同に関するものである。調査地域にも偏りがあり、まだ明らかにされていない地域差などもある。モンゴル語族内の比較研究や周辺のツングース語族の諸言語との対照は試みられつつも、ダグール語特有の特徴についての研究は十分なされていない。例えば補助動詞構造や否定、存在・所有の表現、節のタイプによる述部の様相は、モンゴル語や周辺諸言語との比較対照のみならぬ幅広い視野からの再検討が必要である。また動詞前辞のようにモンゴル語でも十分に検討されていない要素や、終助詞や述語人称などのようにモンゴル語とは単純に比較のできない要素などもある。こうした点で、本論文はダグール語研究のきっかけを提供するものである。

本論文における議論の先に、精緻な記述によってダグール語という言語の史的変遷を辿ることを可能とし、またダグール語をモンゴル語族の諸言語の中でどのように位置づけるのか考えるための手続きともなるという展望がある。さらにモンゴル語族の言語を包含し世界に広く分布するアルタイ型と呼ばれる言語類型を研究するに寄与するものである。とくに本論文で扱う述部の構造の検討は、「アルタイ型言語」が持つ「主要部後置型の語順ならびにそれと連動する諸特徴」(風間 2014: 168) を考える上で意義のあるものである。これはひいては日本語研究や大きな言語類型を考える上でも有意義である。

0.3. 本論文の構成

本論文は序論・本論・結論から成り、本論は第一部と第二部に分かれる。

本章序論は、本節において本論文の概略を述べた後、0.4. において扱うデータの情報を示す。0.5. では謝辞を述べる。

次章から始まる本論は「第一部 ダグール語の概要」と「第二部 述部のさまざまな形式」から成る。

第一部では本研究の前提となるダグール語という言葉について概略的に紹介する。第一章「ダグール語とは」では類型の特徴、話者の分布や方言、研究史、「ダグール語」という言語名など言語の背景について概略を述べた後、音声と音韻、形態の特徴について整理する。形態の特徴ではダグール語の語の語類について言及するが、うち動詞と呼ぶべき語類については第二章「動詞の形態的特徴」において記述する。動詞の形態こそが、本論文で扱うダグール語の述部の記述の中心になるためである。第二章では、動詞を動詞たらしめる動詞接辞について再整理をし、動詞にまつわる派生接辞や動詞前辞について別にまとめた。

第二部では本論文の主たるテーマであるダグール語の述部の構造について検討する。第三章「述部の基本構造」では述部を構成する要素をまず動詞述語と名詞類述語に分けて概観し、ついでそれらが成す述語複合体について述べる。補足的に、述語複合体や動詞述語・名詞類述語にまたがる否定と存在・所有についても別に節を立てて述べる。第四章「節のタイプと述部」では、これらの述部がいかに関文の主たる節、主節たりうるのか、また他の節に依存し非主節となるのかについて概観する。

結論では終章として本論文での議論をまとめ、今後の研究課題を示す。

参考文献、記号・略号一覧、図表一覧は巻末に付した。

0.4. データ

本論文は先行研究のデータや筆者調査によるデータから得られた用例を分析し、ダグール語の記述研究を行うものである。ダグール語の言語データは語りのテキストから成るテキストデータか、インタビュー調査によって産出された単文データかのいずれかに大別される。2名以上のダグール語話者による自然な談話資料は、今のところ残念ながら十分には得られていない。また書き言葉としてのダグール語が試みられた経緯はあるが (Yamada in printing. a)、公的な文書やその他出版で用いられるケースはほとんど無く、基本的に本論文の調査対象とはしない。

なお、各言語データに見られる文法現象には採録地域による異なりも見られるが、こうした地域差は基本的に本節でまとめて示すのみに留める。とくに地域差が問題になる場合には、本文中でその点について言及する。

調査は2009年から2017年にかけて、中華人民共和国内の各地点で行った。

表 0-1: 調査の概要

調査協力者	調査日時	調査地点	内容	方言
DS	2009/01-2010/10	フフホト、D氏の自宅	質問	ハイラル
N	2009/03-2009/07	フフホト、N氏の自宅	質問	ハイラル
O	2010/01-2015/08	フフホト、O氏の自宅	質問、物語	ハイラル
S	2010/08	ハイラル、S氏の自宅	質問、会話	ハイラル
B	2015/08	モリダワ、飲食店	質問	ブトハ
DX	2014/03-2015/08	チチハル、DX氏の自宅	物語	チチハル
Q	2014/03-2015/08	チチハル、DX氏の自宅	物語	チチハル
H	2014/03-2016/08	チチハル、H氏の自宅	質問	チチハル
E	2014/03-2017/03	チチハル、E氏の自宅	質問、歌謡、物語	チチハル

質問とはこちらが挙げた短い例文をダグール語に訳してもらった形のものであり、その一部は『語研論集』の特集の形で公開している (風間・山田 2014、山田 2015b, 2016, 2017c)。

いずれも予め録音機の使用を申し出た上で録音を行っている。

未整理・未公開の調査データを使用する場合は、上記の調査協力者名略号を例文和訳の後ろに添えて示す。

次ページに、本論文で使用した言語データ、例文等の出典を示す。

表 0-2: 使用したテキスト

資料	備考
朝克(1990)	例文
塩谷 (1990)	例文
恩和巴图 (編著) (1988)	例文
恩和巴图、敖拉额尔很	物語、詩、例文等。教科書前半部全 30 課テキスト
巴雅尔 (編) (1988)	物語、詩等。教科書の後半部、資料読解編
山田 (2011)	物語
風間・山田 (2014)	例文
山田 (2015b)	例文
山田 (2016)	例文
山田 (2017c)	例文
山田 (2018)	物語

本論文における例文は、先行研究からの引用であっても表記の仕方 (1.3. 参照) を統一し、変更した。例文に付した例文番号やグロス、下線、和訳等はとくに断りの無い限り筆者によるものである。

0.5. 謝辞

本論文の執筆にあたり、ダグール語の調査に応じてくださった現地の協力者の皆様をはじめ、学会発表での貴重なご意見をくださった先生方、論文を指導してくださった先生方、筆者の研究を支えてくれた方々、その他多くの方々のお力添えがあった。また本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（特別研究員 DC2、研究課題/領域番号 15J06864、研究課題:「モンゴル諸語東部グループの記述、比較研究」）の助成を受けて行ったものである。ここで心より感謝の意を表明する。

ただし、本論文におけるあらゆる誤謬は、すべて筆者の責に帰すものである。

本論

本論は第一部と第二部に分かれる。

「ダグール語の述部」というテーマについて論じるにあたり、「第一部 ダグール語の概要」において議論の前提となるダグール語という言語の概況を述べ、「第二部 述部のさまざまな形式」において本論文の主たるテーマである述部に注目し、それぞれ記述を行う。

第一部 ダグール語の概要

本論第一部では、研究対象とするモンゴル語族の言語であるダグール語がどのような言語であるか述べる。

具体的には第一章においてダグール語の類型論的特徴、取り巻く背景、表記、形態的特徴という 4 つの観点から概略的な記述を行う。ダグール語の語の形態的な特徴は、以降の議論においてダグール語の用例を参照する際に参考となる情報となる。ただし、動詞の形態的な特徴については第二章でとくに取り上げて子細に説明する。動詞は、本論文の主たるテーマである述部の主要部として典型的な語類であり、第二部以降の議論においても主要な位置を占めるからである。ここでは、従来の分類に従わずあくまで形態論的な特徴で整理する。

第一章 ダグール語とは

本章では以下ダグール語の類型論的特徴 (1.1.)、取り巻く社会的背景 (1.2.)、本論文における表記 (1.3.)、形態的特徴 (1.4.) という 4 節に分けてダグール語という言語の概略を示す。

1.1. 類型論的特徴

ダグール語はモンゴル語族の言語の一つで、その多くの特徴はハルハ・モンゴル語をはじめとするモンゴル諸語に類似する。

形態的には膠着的であり、接辞が基本的に語幹に後続する接尾辞型の言語である。接頭辞のような要素もあるが（形容詞の重複 cf. 1.4.2.2.、動詞前辞 cf. 2.4.）、例外的なものであると考えたい。いわゆる形容詞や副詞といった語類は形態的に名詞との境界が明確でない (cf. 1.4.2.)。一方、動詞は態や相を表す派生接辞や叙述・希求、節連結を担う様々な動詞接辞を従え (cf. 2.2.)、補助動詞構造などによる迂言的で複合的な表現など (cf. 3.2.2., 3.4.) 意味拡張の手段が豊富である。

基本語順は主語・目的語・述語であり、主語や目的語などの項は述語に先行する。修飾語句は被修飾語たる主要部に先行する。それぞれの項は主語が目的語に先行するという傾向はあるものの、比較的自由である。また、いわゆる必須項であっても、文脈において理解に支障がない限り文中に現れないこともある。

名詞は格接辞を付すことで述語に対する項になるが、このとき主格対格型の格配列を見せる。目的語となる名詞項は主語となる名詞項よりアニマシーが低かったり、特定性が高かったりする場合に対格接辞が付され、そうでなければ主語項と同様に格接辞が付されない DOM を有するという特徴を見せる。

1.2. 言語の社会的背景

本節ではダグール語という言語を取り巻く社会的背景として、地理的・社会的な環境などについて述べる。具体的には 1.2.1. において言語の分布、1.2.2. で研究史、1.2.3. で言語名についてまとめる。

1.2.1. 言語の分布

以下、1.2.1.1. においてダグール語の話者人口について、1.2.1.2. でその地域差などについて、1.2.1.3. においてダグール語を取り巻く周辺言語について述べる。

1.2.1.1. 話者人口

ダグール語の主な使用者は、中華人民共和国 (以下、中国) の民族識別工作でダグール族 (达斡尔族) と呼ばれる人々である。ダグール族の人々は次ページ図 1-1 で示された中国東北部内モンゴル自治区から黒竜江省を中心とする地域が主たる居住地域であり、その人口は 2010 年に行われた国勢調査によると 13 万 1992 人である (国务院人口普查办公室, 国家统计局人口和就业统计局 (编)『中国 2010 年人口普查资料』)。

ダグール族の人々のすべてがダグール語話者というわけではなく、とくに都市部の若い世代はダグール語を全く解さない者も多い。ダグール語を解す者でも、その多くが漢語との二重言語併用の生活を送っている。ダグール語が話せる人数の全体像について正確なところは分かっていないが、筆者が現地調査時に感じた感覚からすると、都市部ではあまりダグール語が保持されておらず、都会から離れた村落ほど話者を保持している。なお、多民族が共住するハイラルや新疆では、周辺他民族もダグール語を解するケースがあるが、ここでの話者人口に影響を与えるものではないと考える。

1.2.1.2. 地域差

地域ごとの言語差から、ハイラル、ブトハ、チチハル、新疆という 4 つの地域方言に分類できる。図 1-1 中の①～④はそれぞれハイラル、ブトハ、チチハル、新疆それぞれのダグール語の使用される地域を示したものである。①のハイラルは内モンゴル自治区フルンボイル市に属する区である。②のブトハは内モンゴル自治区モリダワ・ダグール族自治旗を中心とする地域の旧称で、ダグール族人口の最も多い地域である。ダグール語文工作会議によって 1956 年 12 月「ダグール語基礎方言」として認められ、標準音として制定された経緯があり、書き言葉としての「ダグール語」はこれに基づく (满都尔图 (主编) 2007: 417)。中国における先行研究もブトハ・ダグール語に関するものが多い。黒竜江省黒河において使われているダグール語も、ブトハに属するとされる。③は黒竜江省チチハル市を指す。④の新疆とは新疆ウイグル自治区を指すものであるが、より正確には塔城地区にダグール語話者が集住する。



図 1-1: ダグール族の主な居住地 (満都尔图 (主编) 2007 : 59 をもとに作成)

これらの言語は一般に同一の言語として扱われるが、従来の研究では地域差は小さいと記されているのみであることが多い。具体的な差異についての記述は恩和巴图 (编著) (1988: 22-26) などに限られる。

本論文では言語の地域差が問題になる個所についてのみどの地域であるかを明記し、地域差が問題にならない場合については記載を省略している。

1.2.1.3. ダグール語を取り巻く言語

恩和巴图 (编著) (1988: 485-486, 26) によれば、ダグール語は全般的に漢語およびツングース語族の言語から入ってきたと考えられる語彙が多く見られ、新疆・ダグール語には更に

カザフ語から入ってきた語彙も多く見られる。ハイラル・ダグール語についてはモンゴル語との類似点が多く見いだされるが、これはモンゴル語族であるゆえの共通特徴というよりは、ハイラル・ダグール語が他のダグール語から分化した後に言語接触によって被った特徴であると考えられるものである。

いずれの地域においても、漢語による学校教育が基本的に行われている。若干の例外としてハイラル・ダグール語の地域ではモンゴル語教育も見られるが、ダグール語による学校教育は行われていない。

歴史的にはダグールの人々の書き言葉としてマンジュ語（満洲語）が使用されていた経緯があり、話し言葉としてのマンジュ語も使用されていたものと考えられる。現在はハイラル・ダグール語の話者が集住するエウエンキ族自治旗において、ツングース語族のソロン語やモンゴル語族のブリヤート語、ホルチン・モンゴル語やバルガ・モンゴル語などとの接触がある。

1.2.2. ダグール語研究史

ダグール語を言語学的に研究する試みについて、時系列順に概観する。ここでは各研究の性質について触れる程度に留め、本論文の議論に関係のある研究については次章以降の具体的な議論の中で取り上げることとする。以下では 1.2.2.1. で 20 世紀のもの、1.2.2.2 で今世紀以降のものと大別して概観し、補足的に 1.2.2.3. でダグール語の書き言葉について触れる。

1.2.2.1. 20 世紀のもの

栗林 (1989) によるとダグール語の研究は Poppe (1930) によって当該言語がモンゴル諸語に帰属することが立証されたところに始まる。その後半世紀ほどの間に成された研究としては Poppe (1934-5)、Тодаева (1960 [1986]), Martin (1961)、Poppe (1964)、Kałużński, St. (1969, 1970 ‘Dagurisches Wörterverzeichnis’ . *Rocznik Orientalistyczny* 33(1) 33(2): 筆者未入手) がある。この他、第二次少数民族语文科学讨论会秘书处 (1958) によるロシア文字式の正書法制定に関する記述もある。

1980 年代から内モンゴル大学の研究チームによるモンゴル諸語の組織的調査が行われ、またダグール学会の発足に伴いダグール語の研究も相次いだ。特に正書法制定に関連して言語の詳細な研究が行われた。

仲 (編) (1982)、namcarai ba haserdeni (1983) に見られる文法概説や恩和巴图 (1983)、恩和巴图等 (編) (1984) のような語彙集に始まり、論集『達斡尔族研究』において蒙和 (1987) 「ダグール歴史言語文学研究概況 (序に代えて)」を著したところから言語学を含む様々な方面からの研究が盛んにおこなわれるようになった。この動きの中で、ダグール語の言語学的研究の中心的な人物は恩和巴图 (エンフバト) である。恩和巴图 (編著) (1988) によるモンゴル諸語諸方言研究叢書『ダグール語とモンゴル語』は、管見の限り記述が最も網羅

的な文法書である。本論文において使用する資料としては、同叢書より恩和巴图等 (編) (1985) の他、正書法の教科書としてまとめられた恩和巴图・敖拉额尔很巴雅尔 (編) (1988) がある。

恩和巴图による一連の研究に限らず、研究の対象としてはブトハ・ダグール語が中心として扱われる傾向が強い。この背景には最も大きなダグール族コミュニティがモリダワ・ダグール族自治旗にあり、そこのブトハ・ダグール語が標準語として制定されたためであろう。これ以外には、チチハル・ダグール語の研究として胡和 (編) (1988) による語彙集や烏珠尔 (1999, 2003) による総合的な文法記述がある。ハイラル・ダグール語の研究としては津曲 (1985, 1986)、角道 (1987)、塩谷 (1990) などがある。津曲 (1986) は語彙集であり、津曲 (1985)、角道 (1987) は音韻論的な研究である。塩谷 (1990) は恩和巴图等 (編) (1985: 3-46) の「日常会話翻訳」に付された漢語例文を利用し、ハイラル・ダグール語の資料を収集したものである。开英 (編) (1985) は新疆・ダグール語の語彙集である。

1.2.2.2. 今世紀の研究

ardajab ba sečenkguu-a (2004) は中古モンゴル語文献である『元朝秘史』に見られるダグール語語彙に関する研究である。

孟 (編) (2007a, b) はダグール語で書かれた韻文のテキスト集である。次項で見るダグール語の正書法を反映したまとまったテキストとしては唯一のものであろう。

Yu et al. (2008) は新疆・ダグール語に関する初のまとまった文法記述である。

ダグール語の使用実態等に関する社会言語学的調査としては、モリダワ・ダグール族自治旗の言語使用実態について調査した丁 (主编) (2009) や、都市部におけるダグール族の民族意識等について調査した娜仁其木格等 (2013) がある。

この他、Khabtagaeva (2012)、大竹 (2013a, b, c)、Тумурдэй & Цыбеннов (2014) などがあり、筆者による研究 (山田 2011, 2015ab, 2016, 2017abc, 2018 など) がある。

1.2.2.3. ダグール語の書き言葉について

ダグール語の書き言葉正書法は、1982 年にダグール歴史言語文学学会理事会で検討、公布されたものがある。ラテン文字による漢語ピンイン方案を基礎とし、ブトハ・ダグール語を標準として制定したものである (恩和巴图 1987a, b)。恩和巴图 (1983) や恩和巴图等 (編) (1988) はこうした正書法法案を体現化しようという試みであると言えるが、その後広く普及するには至らなかった。学校教科書や若干のテキストの記録にこれに近い表記が用いられることがあるが、統一的なものとは言いがたい。

ダグール語を文字で記録しようという試みとして古くはマンジュ文字 (満洲文字) による記録があり、ダグール語の書記言語 (达呼尔文: ダフル文) と見做しうる。その後、書記言語としてのダグール語を考案する動きとして古くは 1916 年ロシア文字式、1920 年ラテン文字式などがあり、いずれも普及には至らなかったがその後の活動に影響を与えた (満都

尔图（主编）2007: 415-420）。第二次少数民族语文科学讨论会秘书处（1958）に見られるようなロシア文字式のダグール語正書法は、教科書なども作成され黒竜江省で教育が試みられるにいたった。（山田 2011: 17-20）

1.2.3. 「ダグール語」という言語名について

本論文で「ダグール」と呼ぶ言語名または民族名については、日本語の表現として「ダウール」「ダゴール」「ダグル」なども使われている。これらはいずれもダグールの人々の自称に基づくものであり、基本的には表記上の揺れと呼びうるものである。表記上の揺れが生じる要因は、ダグール語で実現する音声をどのように記載するかという方針の異なりに由来する。これを日本語でどのように写すべきかについて、本論文では無用な議論は避けたい。本論文においてはこれを「ダグール」と呼ぶが、これは日本語による言語学関連の論文における慣用に従ったものである。

「ダウール」という呼称は、1.3.2.1. で見るような子音の実際の現れに揺れがあり、例 1-10 にて示す音声実現に基づく *dawur*, *daor* などの表記（恩和巴图 1983）があるためである。

本論文においては言語名と民族名を同一視し、前者をダグール語、後者をダグール人と呼ぶ。ダグール族という用語は、とくに中国における民族識別工作による民族区分を指す。

言語の名称に付随する問題として「言語か方言か」という点も考慮する必要もある。小沢（1986: 8）などのようにこれを「ダグール方言」と見做す考え方もある。現在多くの研究においてこれが一つの言語「ダグール語」と見做されるのは、中国で「ダグール族」という民族が認められていることによる。ここではこうした現在の慣例に倣う。ただし、以下の議論では方言か言語かという問題を避けるため、「ダグール語ブトハ方言」という表現を用いず、「ブトハ・ダグール語」のような表現を用いる。言語の地域差が問題にならない場合には、単に「ダグール語」とする。

1.3. 表記

本節では本論文におけるダグール語の表記の仕組みについて整理する。本論文で用いる表記は「正書法」(恩和巴图 (1983) や恩和巴图等 (編) (1988) による表記) を参考にしているが、その表記の方針については詳細に述べられていない。そこで表記の前提となる音声的な側面について触れながら、1.3.1. 母音、1.3.2. 子音、1.3.3. 語の成り立ち、という順でダグール語の音韻と表記について概観していく。

本論文における表記は「正書法」の方針に寄せることで、ダグール語話者自身による従来のダグール語研究や記述と相互に参照しやすくし、危機言語の保護や維持に益するよう設計している。結果として個々の文字素を単独で見た場合には「一文字一音素」とならない部分も生じたが、こうした問題については以下で個別に述べる。またモンゴル語学の習慣に倣って「正書法」とは異なる文字を宛てたところもあるが、「正書法」との対応は大筋において一対一としている。

なお、本項では個々の音素について音素表記であることを表わす // (スラッシュ) で囲って示したが、語について及び本項以外では煩雑を避けこれを付していない。

1.3.1. 母音

ダグール語の母音は、語の最初の位置 (第一位) に現れる場合に音韻論的に有意義な短長の対立を成す。一方、それ以外の位置 (第二位以降) ではこうした短長の対立を失い、また母音調和によって出現しうる母音に制限が生じる。以下、1.3.1.1. 第一位と 1.3.1.2. 第二位以降に分けて母音の様相と表記について述べる。

1.3.1.1. 第一位の母音

ダグール語の母音は語の最初の位置、すなわち母音始まりの語であれば語頭の母音、子音始まりの語であれば語頭子音に後続する母音において、音韻論的に有意義ないくつかの対立を見せる。この位置を本論文では「語頭音節」などの表現を避けて第一位と呼び、以下では第一位にある母音を基本母音と長母音・二重母音とに分けて整理する (表 1-1)。なお、第一位の母音の直前には子音が最大 1 つ現れ、語頭に子音クラスタが生じることはない。

表 1-1: ダグール語の母音体系 (第一位)

基本母音	/a/	/e/ [ə]	/i/	/o/	/u/	
長母音	/aa/	/ee/ [e:]	/ii/	/oo/	/uu/	/ie/ [e:]
二重母音	/ai/	/ei/		/oi/	/ui/	
	/au/	/eu/				

基本母音としては /a, e, i, o, u/ という短母音 5 つを立てる。このそれぞれに対応する長母音 /aa, ee, ii, oo, uu/ があり、この他に長母音しか現れない /ie/ [e:] がある。二重母音として

は i で終わる /ai, ei, oi, ui/ の 4 つが、u で終わる /au, eu/ の 2 つがある。これらの体系を整理したものが表 1-1 である。次の例 1-1 においてそれぞれの基本母音の実現音とともに、語例を示す。

(1-1) 基本母音の例

/a/ [a]	am [am] 口	hamer [xamər] 鼻
/e/ [ə]	em [əm] 薬	degii [dəgi:] 鳥
/i/ [i]	is [is] 九	nid [nid] 目
/o/ [o]	oler [olər] 人々	nog [noɣ] 犬
/u/ [u]	utem [utəm] 焼き菓子	sus [sus] 竹

/a, o/ は次の例 1-2 に見るように後続する口蓋化子音 (各例の i は直前の子音が口蓋化子音であることを表している。1.3.2.2. にて後述) によって前寄りの [a~æ, o~œ] と発音されうる (前舌化、ウムラウト)。母音の前舌化と後続子音の口蓋化の程度は話者によっても差異があり、[amⁱ]~[æm] などの揺れが認められる。この [æ, œ] を独立した音素とせず /a, o/ とするのは、後続の子音を口蓋化子音であると見做せば [a, o] と対立しないと言えるからである。口蓋化子音を認める根拠については 1.3.2.2. で述べる。

(1-2) 母音の前舌化の例

/a/ [æ]	ami [am ⁱ]~[æm] 命	badi [bad ⁱ]~[bæd] 私たち
/o/ [œ]	mori [mor ⁱ]~[mœr] 馬	

次の例 1-3 は、5 つの基本母音に対応する長母音の現れる語の例である。/aa, oo/ については短母音 /a, o/ と同様に口蓋化子音の直前で実現する音声に揺れがある。

(1-3) 長母音の例

/aa/ [a:]	aan [a:ŋ] 彼ら	taaw [ta:w] 五
[aæ]	gaadigi [gaædg ⁱ]~[ga:dg ⁱ] 外の	
/ee/ [e:]	eemeg [ə:məg] 耳飾り	meemee [mə:mə:] 母
/ii/ [i:]	iis [i:s] 石鹼	jiiren [dʒi:rəŋ] 広大な
/oo/ [o:]	ooš [o:ʃ] 飲みもの	hoon [xo:ŋ] 年
[oœ]	kooli [koœl]~[ko:l] 法律	
/uu/ [u:]	uul [u:l] 冬	huu [xu:] 人

表 1-1 の母音体系を観察すると /ie/ [e:] は対応する短母音を有さない点で他の長母音と異なり、また i や u で終わらない点で他の二重母音とも異なるため、体系から外れているよ

うに見える。ここでは、[e:] という音声的現れ及び接尾辞における母音調和による現れ (1.3.3.2. にて詳述) などから、長母音の一つであると見る。

/ie/ には /s, w/ 以外の子音が必ず先行するという性質が観察されるが、これも他の母音音素と異なる特徴である。/s, w/ は口蓋化子音との対立がない子音であることから、/s, w/ 以外の子音の口蓋化子音との対立が母音 [ə:] [e:] の対立に反映している可能性もある。しかし次の例 1-4 にみるように口蓋化子音との対立の無い /č, j, š, y/ の後ろでも [ə:] と [e:] の対立が観察されることから、ここでは独立した音素とみる。

(1-4) /ie/ の例

/ie/ [e:]	dierwen [de:rwǎŋ] とても多い	cf. deer [dɛ:r] 上
	čie [tʃe:] 茶	cf. čeel [tʃɛ:l] 禁忌
	yierii [je:ri:] 饒舌である	cf. yee [jɛ:] ～か (疑問を表す)

二重母音としては下降の /ai, ei, oi, ui; au, eu/ が立てられる。例 1-5 に語例を示す。

(1-5) 二重母音の例

/ai/ [ai]	aiš [aiɕ] 利益	bait [bait] 事
/oi/ [oi]	oiroon [oiro:ŋ] 近い	noiten [noitǎŋ] 濡れた
/ei/ [əi~ei]	eimer [əimǎr] こうして	weil [wɛil] 仕事
/ui/ [ui~yi]		kuiten [kuitǎŋ] 寒い
/au/ [ao~ɔ:]	aul [aol] 山	dau [dɔo] 歌
/eu/ [əu]	eud [əu] 門、ドア	deu [dəu] 弟、妹

1.3.1.2. 第二位以降の母音

語の第一位以外、第二位以降という環境では現れうる母音の対立が減り、かつ第一位の母音によって現れうる母音が制限される母音調和という現象 (1.3.3.1. で詳述) が観察される。第二位以降に現れうる母音を表 1-2 に示す。

表 1-2: ダグール語の母音体系 (第二位以降)

系列	a 系列	e 系列	i 系列	o 系列	u 系列	ie 系列
長母音	aa	ee	ii	oo	uu	ie
二重母音		ei				

語の第二位以降では母音の長短が失われ、長母音のみ現れる。これを短母音でなく長母音であると見るのは、[ə:] と [e:] の対立があることや、ピッチアクセントの位置の同定に

際してこれらの対立する 6 母音が第一位の長母音と同じ振る舞いをするためである。例 1-6 は第二位以降に現れる長母音の例である。

(1-6) 第二位以降の長母音

/aa/ [a:]	jigaa [dʒiga:]	お金
/ee/ [e:]	gurees [gura:s]	獣
/ii/ [i:]	dalii [dali:]	海
/oo/ [o:]	niroo [niro:]	背骨
/uu/ [u:]	deluu [dɛlu:]	脾臓
/ie/ [e:]	orie [ore:]	夜

第二位以降ではこの他に二重母音的な響きの /ei/ が現れる (1-7)。直前の母音により [ai~oi~əi~ui] のような音声で現れるが、これらは語の対立には関与しないため、音素としては /ei/ でまとめる。

(1-7) 第二位以降の二重母音

/ei/ [əi]	uwei [uwəi~u.əi]	無い
-----------	------------------	----

このように第二位以降では対立する母音音素が限られるが、表記上は次の点に注意されたい。本論文における表記上は、第二位以降にも短母音のように見える e, i, u および二重母音 ui を用いる。しかし e, u, i は互いに対立する短母音音素を表すものではなく、ui も ei と対立するものではない。これらは発音上聞き取れるが語の弁別に関与しない曖昧母音を反映したり、子音の口蓋化・円唇化を弁別したりするために使用するものである。

語末子音の直前などの環境に、短い母音のような音が聞きとれることが頻繁にある。その音色は他の母音や直前の子音に従い、話者や発話の環境によっては 5 つの基本母音に近い音色が同様に現れ得る。ここではこれを音価が安定しないことから曖昧母音と呼ぶ。これは出現位置もある程度予測が可能であることから、長母音との対立を示す音素とは見做らない。この詳細は 1.3.3.3. で述べる。先行研究では、こうした曖昧母音を一切表記しない立場 (胡和 (編) (1988) や烏珠尔 (2003)) もあれば、全ての子音が音節を成し母音を有するとする立場 (Martin (1961)) などがある。恩和巴图 (1983) は実際の音声的実現を重視していると見られる。

本論文ではこうした短母音的な音声的実現が出現しうる箇所を母音記号で示す点で恩和巴图 (1983) に倣うが、ここに音韻的対立は無いものとして、基本的に /e/ を記号として用いて示す (1-8)。

- (1-8) hareb [xarəb] 十
tenger [təŋgər] 天
tiimer [ti:mər] そのように
bolsen [bolsŭŋ] なりました (bol-sen {to.become-PERF})
uder [udŭr] 日
jiesŋen [dʒe:egəŋ] 手紙

上述の音声表記に見えるように、/e/ で示した部分の実際の音声的実現としては先行する母音の音色の影響を蒙りやすい。

1.3.2. 子音

子音は、基本子音とそれぞれに対応する口蓋化子音の系列と円唇化子音の系列を有する。以下では 1.3.2.1. 基本子音と 1.3.2.2. 口蓋化子音と円唇化子音に分けて概略を述べる。

1.3.2.1. 基本子音

ダグール語の基本子音は次の表 1-3 の通りである。

表 1-3: ダグール語の基本子音体系

	唇音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
破裂音	p b [b~β]	t d	č [tʃ] j [dʒ]		k g [g~ɣ]
摩擦音	f [ɸ]	s	š [ɕ]		h [x]
鼻音	m	n, n'			n [ŋ]
側面音		l			
はじき音		r			
接近音	w			y [j]	

破裂音 (破擦音を含む)、摩擦音としては /p, t, č, k; b, d, j, g; f, s, š, h/ がある。/p, t, č, k/ と /b, d, j, g/ は無声有気と有声無気の対立であるが、ここでは単に無声・有声と呼び、有気音であることを示す [ʰ] は省略する。まず無声破裂音の語例を示す (1-9)。

(1-9) 無声破裂音の例

/p/ [p]	poolie [po:le:]	ホッケー	sarp [sarp]	箸
/t/ [t]	temee [təmə:]	駱駝	ant [ant]	味
/č/ [tʃ]	čaaĭ [tʃa:dʒ]	明後日	kaič [kaiʃ]	鋏
/k/ [k]	kuli [kulɪ]	足	nek [nek]	一

/p/ という音素はおそらくダグール語とモンゴル語の共通祖語に立てられないものである。恩和巴图等 (編) (1984) の語彙集には /p/ で始まる語例が多数収録されているが、そのうちおよそ 3 分の 2 ほどが借用語のようである。しかし上の例 poolie (ホッケー、ダグールの伝統的な競技) のようなダグール語固有と見られる語の例も見られる。

次に有声破裂音の語例を示す。

(1-10) 有声破裂音の例

/b/ [b~β]	beri [bərɪ]	妻	dureb [durɯβ]	四
/d/ [d]	deer [dɛ:r]	上	mood [mo:d]	木
/j/ [dʒ]	ĭak [dʒak]	もの	sukenĭ [sukɯndʒ]	手斧
/g/ [g~ɣ]	geri [gərɪ]	家	gag [gɑɣ]	豚
			daguur [daɣu:r~dawu:r~da.u:r]	ダグール

/b/ と /g/ は語末において摩擦音化しそれぞれ [β] [ɣ] となる。/g/ はさらに語中で /uu/ が後続する場合に、[w] となるあるいは脱落し母音連続のようになることもある (cf. 1.2.3.)。

摩擦音は次の例 1-11 の通り。/f/ は借用語にのみ現れ、また語としても /p/ との交替がよく生じるものである。なお語中で /h/ が現れるのはハイラルのみで、他の地域では /k/ がこれに対応する。

(1-11) 摩擦音の例

/f/ [ɸ~p]	fond [fond]	時間	deuf [dɛuɸ]	豆腐
/s/ [s]	sasgen [sasgɛŋ]	煮物	ĭaus [dʒaus]	魚
/š/ [ɕ]	šowoo [ɕowo:]	鷹	udeš [udɪɕ]	昨日
/h/ [x]	hoo [xo:]	全て	hahraa [xaxra:]	鶏 (ハイラル)
			cf. hakraa [xakra:]	鶏 (チチハル)

鼻音としては /m, n, n'/ を立てる。語例は次の例 1-12 の通り。/m/ [m] 以外の鼻音は、[ŋ] が現れる。語中では /k, g/ の直前で [ŋ]、それ以外で [n] になるという相補分布を成し、語頭では一律 [n] が現れる。語末では [n] [ŋ] が対立を成す。ここでは語頭の [n]、語中の

[n] [ŋ], 語末の [ŋ] を一つの音素 /n/ と見なす。語末の [n] はとくに /n'/ と表記する。「'」という記号は、正書法において短母音文字があてられることを示すものである。

(1-12) 鼻音の例

/m/ [m]	meis [məis]	氷	kimč [kimtʃ]	爪	
/n/ [n~ŋ]	naʃer [nadʒɪr]	夏	saten [satəŋ]	砂糖	
			/n' / [n]	en' [ən]	これ

語末の /n/ と /n'/ は、普通は直後に母音始まりの接尾辞が付いた場合に /n/ に合流する。しかし漢語の韻尾 ng に由来する [ŋ] が語末に現れる借用語は、母音始まりの形態素が後続した場合に子音 /g/ が挿入される (例 1-13 二重下線部)。

(1-13) -ii への / ~ を (属対格接辞、下線部) を付した場合

[n]	haan' [xɑ:nə]	どこ	haan <u>ii</u> [xɑ:ni:]	どこの
[ŋ]	haan [xɑ:ŋ]	王	haan <u>ii</u> [xɑ:ni:]	王の
[ŋ]<ng	beejen [bæ:dʒiŋ]	北京	beeje <u>ngii</u> [bæ:dʒiŋgi:]	北京の
	cf. 北京 běijīng (漢語)			

流音としては /r, l/、接近音としては /w, y/ を立てる。語例は次の 1-14 の通り。/r/ は語頭に立たないが、/l/ は語頭に立つ例も多い。

(1-14)

/r/ [r]		širee [ɕirə:]	机	
/l/ [l]	larč [larʃ]	葉	bulk [bulk]	鏡
/w/ [w]	warkel [warkəl]	衣服	nuwaa [nuwa:]	野菜
/y/ [j]	yadgen [jadgəŋ]	シャマン	bey [bəj]	体

1.3.2.2. 口蓋化子音と円唇化子音

基本子音にはそれぞれ対応する口蓋化子音と円唇化子音があり、口蓋化子音は i、円唇化子音は u を基本子音の後ろに記すことで表記する。口蓋化子音、円唇化子音の一覧を次の表 1-4, 1-5 に示す。

表 1-4: ダグール語の口蓋化子音の体系

口蓋化子音				
破裂音	pi	ti	-	ki
	bi	di	-	gi
摩擦音		-	-	hi
鼻音	mi	ni		
側面音		li		
はじき音		ri		

表 1-5: ダグール語の円唇化子音の体系

円唇化子音				
破裂音	pu	tu	ču	ku
	bu	du	ǰu	gu
摩擦音		su	šu	hu
鼻音	mu	nu		
側面音		lu		
はじき音		ru		

i, u は母音音素を表すものとしても、子音の口蓋化・円唇化を表す記号としても用いられるということになるが、現れ方に相補分布が見られるため表記上の混乱は生じない。第一位において i, u が単独で現れる場合、または ui が現れる場合は母音を表記したものと解釈する。ii, ie, uu という表記は第一位においても第二位においても長母音を表記するものである。他方、ia, io, iu, ua, ue, uo のような表記は母音連続や二重母音であると解釈されず、口蓋化子音・円唇化子音に母音が続いたものであると解釈できる。口蓋化子音・円唇化子音に長母音や二重母音が続く uaa, uai など少数ながら存在する。第二位以降で円唇化子音の後ろに二重母音 ei が現れる場合は ui と表記される。

ni, nu は語末にあっても [nʲ, nʷ] とならず、[nʲ, nʷ] である。従って基本子音にある n' と対立する口蓋化子音・円唇化子音は無い。円唇化子音の gu は、[wu~w] と聞こえ得る。

口蓋化子音と円唇化子音は、母音の前と語末においてのみ基本子音と弁別される。本論文での表記では母音の前と形態素末においてのみ口蓋化子音と円唇化子音が現れる。

口蓋化子音の例を 1-15 に示す。口蓋化子音に下線を付す。

(1-15) 口蓋化子音の例

kiand [kʲand] 安い
heki [xəkʲ] 頭
bialden [bʲaldɔ̃ŋ] 禿げた
giaa [gʲɑ:] 街
hiatloobei [xʲatlo:bɔ̃i] 壊す
miag [mʲɑɣ] 肉
niaken [nʲakɔ̃ŋ] 漢民族
suni [sunʲ] 夜
gali [gɑlʲ] 火
gari [gɑrʲ] 手

円唇化子音の例は用例が少ない (例 1-16)。

(1-16) tuald [tʷald] ために

duar [dʷɑr] 下
ɟuebei [dʒʷəbɔ̃i] 二月
guareb [gʷɑrɔ̃b] 三
sual [sʷɑl] 筏
huar [xʷɑr] 雨
luaač [lʷɑ:ʧ] ロシア

1.3.3. 語の成り立ち

本節ではダグール語の形態音韻論的な特徴について取り扱い、音韻論的に語をいかに規定しうるか簡単な考察を行う。表記の上で語は分かち書きによって示されるが、その根拠となる情報や実際の音声については従来述べられていない。語を規定しうる単位として 1.3.3.1. で母音調和について概観した上で、1.3.3.2. で母音調和と関連した接辞の異形態について、1.3.3.3. では曖昧母音、1.3.3.4. ではモーラという単位について、1.3.3.5. ではアクセントについて概略的に述べる。

1.3.3.1. 母音調和

モンゴル語族の言語に共通する特徴として、語の内部の母音の共起制限である母音調和という現象が存在する。接辞が付される場合には、この母音調和の規則に従って語幹の母音と共起しうる母音を持つ異形態が現れるものもある。ダグール語の母音は一般に男性母音 /a, ɔ/ と女性母音 /e/ というグループに分類され、またそのどちらとも共起可能な中性

母音 /i, u/, /ie/ と併せて 3 グループを成す。中性母音は、男性母音にも女性母音にも先行される可能性があり、中性母音の後には基本的に中性母音または女性母音が後続する。

ダグール語で観察される母音調和の例を次に示す (1-17)。

(1-17) 男性母音のみ	kataa	塩 (ブトハ)
	gočoor	靴
	adoo	家畜の群れ (ブトハ)
女性母音のみ	emee	母
中性母音のみ	guuruul	知恵
	hilieb	パン (ハイラル)
	muklien	口琴
男性+中性	haluun	熱い
女性+中性	seruun	涼しい
中性+男性	tuwaa	鍋
中性+女性	guskee	狼

なお、植田 (2019: 182) はモンゴル語の母音調和を「咽頭性の調和」と見なしている。ダグール語の母音調和についてはさらなる調査・分析を要するが、モンゴル語における母音調和に近いものとして同様の解釈が可能かもしれない。

第一位の母音と、その他の位置に現れうる母音の関係は次の表 1-6 の通りである。表左 1 列目は母音のグループを、2 列目は系列を表している。例えば a 系列では第一位に現れるのが短母音 a でも aa, ai, au でもありうる。黒い部分が組み合わせ不可能であることを示す。

表 1-6: ダグール語の母音調和

後続母音 第一位			男性		中性				女性
			aa	oo	uu	ii	ie	ei	ee
男性	a	aa, ai, au							
	o	oo, oi							
中性	u	uu, ui							
	i	ii							
		ie							
女性	e	ee, ei, eu							

(筆者作成。仲 (2007)、津曲 (1985) も参照)

中性母音が多く、可能な組み合わせの幅が広いため、母音調和による出現母音の制限が弱く見える。これは中性の後続母音がおそらく本来 /ii, ei/ のみであったところ、男性母音

由来の形式と女性母音由来の形式が合流することによって成立した /uu, ie/ が加わって現在の中性母音のグループを成したためであると考えられる。

ハルハ・モンゴル語などにおいては、円唇母音 o, ö の後には円唇母音しか続かないという前進的円唇化の現象がある (o, ö の後に u, ü は出現可能であり、その後にはその他の母音も出現しうる)。ダグール語には、接辞の取る異形態に o 系列をも有することから (1.3.3.2. 参照)、こうした前進的円唇化を部分的に有する可能性もあると見られる。しかし、厳格な制限ではないようである。例えば最初の母音に o が現れ、そのすぐ次に子音 1 つを介して aa が後続する例も津曲 (1986) から 2 例見られた (1-18)。

(1-18)	gotaa 「三番目」	(恩和巴图 (1983)では	gutaar
	togaa 「鍋」	津曲 (1986)	tuwaa)

恩和巴图 (1983) と分析が違ふことから、単に解釈の方針の異なりからくるものである可能性も否めない。祖語において最初の母音が o である場合、ダグール語ではこれが wa, ua として現れることが多いため、第一位に o が現れる語例は少ない。また第一位に o が現れ、その後 2 つ以上の子音を介した後に aa が現れる例は津曲 (1986) の語彙集で 5 例見られるが、第一位からの距離が遠くなると前進的円唇化が及ばなくなるのかもしれない。

1.3.3.2. 接辞の異形態

ダグール語の接辞には音韻的環境、特に前項で見た母音調和により、いくつかの異形態をとるものがある。恩和巴图 (編著) (1988) における記述をまとめると、aa, ee, oo, ie といった異形態が現れる AA 型が主要なもので、この他に ii, ei といった異形態が現れる II 型などがある。以下では AA 型の異形態について説明をし、その後その他のタイプについてまとめて説明する。

◆AA 型

AA 型の異形態を有する接辞について、本論文で代表形を示す場合は AA という表記を用いて表す。例えば -aas, -ees, -oos, -ies といった異形態が現れる接辞は、代表形が -AAs となる。

異形態の現れは語幹に現れる母音との母音調和の他、語幹末尾と語類によって決定付けられる。代表形が同形の -AAs であっても、語幹の語類により実現形が異なる要素の存在が特徴的であると言える。

接辞に含まれる AA は、まず -AAs のように AA で始まる接辞であるか、-gAAnie のように AA の前に子音があるかによって異形態の現れ方が異なる。接辞が AA で始まるものは、語幹末尾によって異形態の現れが決まることがあるもので、以下では母音始まりと呼ぶ。

AAの前に子音があるものを以下では子音始まりと呼び、これは語幹末尾によって影響を受けない。以下、①～⑤の番号は図 1-2 の分岐点を示す。

①母音始まりで、語幹末尾が口蓋化子音であれば現れる形態は *ie* になる。この場合、語末子音の口蓋化を表す *i* と重ねて *iie* のように表記することはせず、口蓋化を表す *i* を落として *ie* を加えるという形をとる。分析上は、口蓋化子音の後ろに *ee* が現れると *ie* として実現するものと見る。

(1-19) -AAs {-ABL}

語幹末尾が口蓋化子音 *ami* {life} > *amies*

上記以外 *am* {mouth} > *amaas*

※子音始まりの接辞であれば語末の口蓋化子音の有無による対立はない。

-dAA {-DIR}

語幹末尾が口蓋化子音 *ami* {life} > *amidaa*

上記以外 *am* {mouth} > *amdaa*

②母音始まりで、語幹末尾が円唇化子音であるとき、現れる形態は語幹の母音が *o* 系列のみから成るならば *oo*、その他の母音を含むならば *ee* となる。

(1-20) -AAs {-ABL}

o 系列+円唇化子音 *nogu* {dog} > *noguoos*

その他+円唇化子音 *čaaǰku* {bowl} > *čaaǰkueer*

keku {child} > *kekuees*

※子音始まりの接辞であれば語末の口蓋化子音の有無による対立はない。

-dAA {-DIR}

o 系列+円唇化子音 *nogu* {dog} > *nogudaa*

その他+円唇化子音 *čaaǰku* {bowl} > *čaaǰkudaa*

keku {child} > *kekudee*

③母音始まりで、語幹末尾が母音であるとき、母音の連続を避けるために子音が挿入される。このとき、語幹が動詞語幹であれば *g* が、名詞類であれば *y* が現れる。語幹が男性母音のみから成るならば *gaa*, *yaa*、女性母音や中性母音からなるならば *gee*, *yee* となる(動詞語幹の末尾には *_* を付す。以下同様。これについて詳しくは 2.1. にて述べる)。

(1-21) -AAs {-ABL} 名詞の後ろの母音始まり形態素

edee {now} > edeeyees

ačaa {uncle} > ačaayaas

-AAs {-COND} 動詞の後ろの母音始まり形態素

ee_ {to.stop} > eegees

aa_ {to.be} > aagaas

※子音始まりならば挿入子音は現れない。

④語幹の最後の母音が oo である場合、AA の異形態としては oo が現れる。しかしこれは子音始まりの場合には阻害されやすく、oo になったり、ならなかったり (aa, ee になる) 揺れがある。また上述の挿入子音 g, y が挿入される場合に oo が現れることはない。

(1-22) -AAs {-COND}

最後の母音が o bol_ {to.become} > bol~~oo~~s

上記以外 gar_ {to.go.out} > gara~~oo~~s

uk_ {to.give} > uke~~oo~~s

※子音始まりの接辞では oo になることはない。

-gAAAnie {-FUT.IMP.2SG}

最後の母音が o bol_ {to.become} > bolga~~oo~~anie

上記以外 gar_ {to.go.out} > garga~~oo~~anie

uk_ {to.give} > ukge~~oo~~enie

⑤その他の条件下で AA は母音調和の原則に従い、語幹の母音が男性母音のみから成っていれば aa に、女性母音または中性母音から成っていれば ee が選択される。

これらの条件を図式化すると次ページの図 1-2 のようになる。

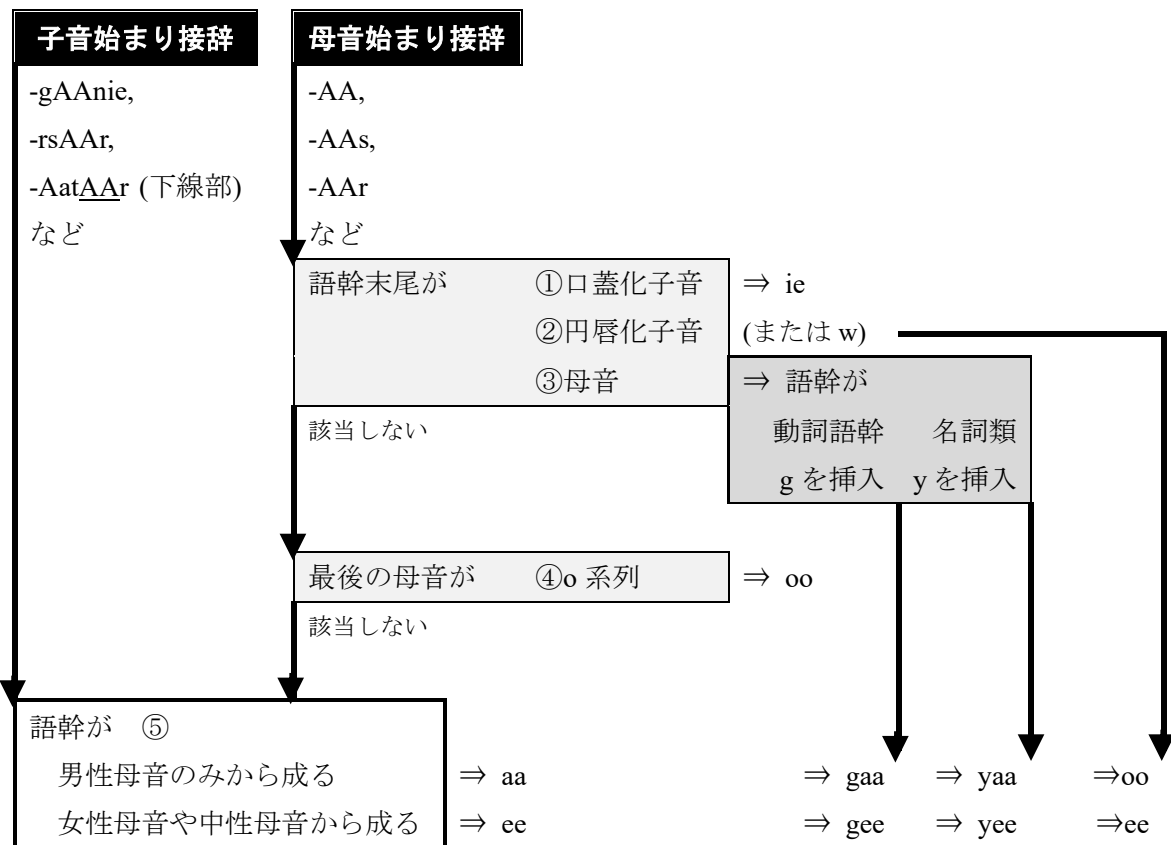


図 1-2: AA 型の異形態の取り方

③に関して、先行する語幹が母音で終わるとき、先行する語幹が動詞語幹ならば gaa, gee、名詞類ならば yaa, yee という具合に、母音の連続を避ける挿入子音が現れる。挿入子音が現れると、子音始まりの接辞と同様に oo が現れることはなくなる (1-21)。品詞により異なる形態的特徴を見せるというのは興味深く、モンゴル語などにもみられない現象である。

④に関して、筆者が bolgaa_「ならせる(<bol_ {to.become} + -gAA {使役})」という形で採集した形式が、塩谷 (1990) の中では bolgoo_「ならせる」と記述されている。上記のルールにしたがえば bolgaa_ が期待されるが、子音始まりの AA についてはこうした揺れも見られる。

この他に、AA 型に似た異形態の現れ方として、母音が oo, ee で交替する動詞接辞 -guOOtOOr や動詞派生接辞 -lOO_ がある。これは OO 型と言うべき型であるが、子音始まりであることから語幹末尾の影響を受けず、語幹が男性母音ならば -guootoor, -loo_、女性母音ならば -guceteer, -lee という 2 種類の異形態を持つのみである。代表形は上記の通り OO を用いて記す。

◆その他

恩和巴图 (編著) (1988) は II 型とも言うべき異形態のパターンとして、代表形 II を含む接辞である対格属格の -II、3 人称所属人称の -IIni、派生接辞 -IIr「～しに来る」、-IIč「～

しに行く」を挙げている。この異形態のパターンは音声上円唇化子音の後ろでは [ui], その他の環境で [i:] となることを反映し、表記上の問題として II は母音の後ろで yii、口蓋化子音・円唇化子音の後ろで i、その他の環境で ii となるというものである。口蓋化子音・円唇化子音の後ろに II が現れると表記上は記号 i, u + II の異形態 i で ii, ui という文字列が現れるが、ここで現れる ii, ui はいずれも母音であると解釈し直す。口蓋化子音の後ろに II が現れると、基本子音の後ろに II が現れた場合と表記が合流することになるが、これは実際の音声も合流することを反映する（正書法では基本子音と口蓋化子音とで後ろに II が来た場合とで表記を区別するが、音声実態には必ずしも区別されない）。円唇化子音の後ろでは [ui] という音声実現を反映した ui という表記になるが、二重母音 ei の異音であると見て独立した音素は立てない。なお、uii (円唇化子音+長母音 ii) という音素の配列は現れない。

母音の変化を伴うものの他に子音変化を伴うものもありうる。先行する動詞語幹末尾の子音と調音法に関して順行同化が起こる例として、-sen「～した」があり、-len, -ren, -ten, -den といった異形態が現れることがある。本論文では、こうした実現形に対し形態素分析では元の形を示している。また子音が連続する場合に「母音調和に従って短母音が挿入される」とされるものがある。これらは次項で扱う音韻的条件によって生じるものであるため形態の変化とは見做すことはせず、グロスも特に付さない。

1.3.3.3. 曖昧母音

第一位以外の短母音は「「母音があるかないか」さえ判断がむずかしい」（津曲 1985）と言われ、話者や発話の状況によって母音的な音が実現するかどうかにはかなりの揺れがある。そうした音声の実現を反映して、先行研究により第一位以外の短母音の表記の仕方は様々である。胡和 (編) (1988) のように、こうした短母音を一切表記しない立場や、逆に Martin (1961) のように全ての子音の後に母音があることを想定した表記もある (1-23)。

(1-23) 胡和 (編) (1988)	Martin (1961)	津曲 (1986)	意味
udr	udurə	uduru	日
harbn	harəbə	arəbə(ŋ)	十

少なくとも第一位以外の短母音は語を弁別する機能がないことから、本論文では基底において短母音は無いものとする。こうした実情を踏まえると、母音を核に据えた音節のような単位を立てるのも困難である。

ところで恩和巴图 (編著) (1988) は「音節末」に立ちうる子音連続は表 1-7 のような組み合わせのみであるとしている。

表 1-7: ダグール語の「音節末」の子音連続

前部 \ 後部	p	t	d	s	č	ǰ	š	k
b		bt	bd	bs	bč		bš	bk
m	mp	mt	md	ms	mč	mǰ	mš	mk
n		nt	nd	ns	nč	nǰ	nš	nk
l	lp	lt	ld	ls	lč	lǰ	lš	lk
r	rp	rt	rd	rs	rč	rǰ	rš	rk
g		gt	gd	gs	gč	gǰ	gš	

(恩和巴图 (編著) 1988: 141 より、一部改定。接辞-d を伴う子音連続のうち nd, ld, rd などでは子音の調音法に関して順行同化が起こり、nn', ll, rr のように実現することもある。)

これは即ち、曖昧母音の出現位置に関する規則であると読み替えることができる。つまり「音節末」に現れうる子音連続のうち、前部 (表の b, m, n, l, r, g) は常に直前に母音を伴う子音であり、後部 (表の p, t, d, s, č, ǰ, š, k) は母音を伴わなくてもよい子音である。この表にある子音連続の間には、曖昧母音が聞かれることはない。

基底において第一位以外には短母音が無いとすれば、alt「金」, udš「夜」, uwld「冬」, tačk「学校」, tačkd「学校に」のような形が基底にあると考えられる。これらが実現する際には、聞こえにくい子音連続に母音が挿入されるのである (1-24)。alt という語を後ろから見た際に、t は先行する子音が表 1-7 で前に来る子音であるので、直前に母音は挿入されない。他方、udš は語末の dš が表 1-7 に無い組み合わせであるので、š の前に曖昧母音を挿入する。uwld は、ld が表 1-7 で認められる組み合わせであるので曖昧母音の挿入は不要だが、wl という子音連続は認められず、母音が挿入され uweld となる、と考えられる。

- (1-24) alt 金
 egč 姉
 sebd 先生に (seb-d {teacher-DAT})
 udeš 昨日
 uweld 冬に (uwel-d {winter-DAT})
 taček 学校
 tačked 学校に (taček-d {school-DAT})

表 1-7 には不足も見られ、例えば sd の連続には母音が入らないようである (1-25)。

- (1-25) susd 竹に (sus-d {bamboo-DAT})

1.3.3.4. モーラ

1.3.3.3. で音節という単位が立てにくいことを述べたが、他方でモーラという単位を立てておくといくつかの文法現象の説明に役立つことを示す。例えばアクセントに関する記述の中で津曲 (1985) は、次のように述べている。

強さよりもむしろ高さがアクセントの主体をなしており、しかも特に高さに関しては音節よりモーラ単位でとらえるほうが正確で簡潔な記述ができる。

(津曲 1985)

ここではこれに倣い、モーラという単位に着目したい。モーラとは音の長さに基づく分節単位である。子音を C、短母音を V、重母音を VV として次の 1-26 のようなものを 1 モーラとする。

(1-26) 第一位の CV または #V (語頭の V)

第一位の V の後の V (長母音・二重母音の 2 拍目)

第二位以降の長母音・二重母音

語頭以外の C

モーラという単位の分け方が実際に有効である例として、最小語制約、エコーワードについて述べる。

津曲 (1985) は語を成しうる最短の形式は 2 モーラであると指摘している。次の例 1-27 では先の 1-26 の基準に従ってモーラの切れ目に . (コンマ) を入れて示す。

(1-27) a. hal 氏姓 CV.C

ut 蛆 V.C

b. bii 私 CV.V

oi 林 V.V

これらはいずれも「音節」を単位とするといずれも 1 音節であると言える。しかし 1-27a. 短母音「閉音節」、1-27b. 重母音「開音節」であり、短母音かつ「開音節」であるという語は認められない。津曲 (1985) の指摘通り、モーラ単位で音素配列や語形成の仕組みを捉えるのが妥当であろうと考える。

ダグール語には一種の重複法と言えるエコーワードが見られる。これはモンゴル諸語やチュルク諸語他広く見られる現象で、語を重複し「～や何か」といった不定の意味を付与するものである。ダグール語のエコーワードは次の例 1-28 のように現れる。

(1-28) gag mag	豚とか何か	< gag {pig}
aul maul	山とか何か	< aul {mountain}
os mas	水とか何か	< os {water}
širee maraa	机とか何か	< širee {desk}
gurees maraas	獣とか何か	< gurees {animal}

(恩和巴图 (编著) 1988: 179、和訳は筆者による)

gag 豚、aul 山 の例を見る限り、重複部分は語頭子音が m に代わる、あるいは語頭に m を加えるだけのように見えるが、第一位の母音が a の系列でない例では母音にも変化が起きていることがわかる。そこでダグール語のエコーワードの形成は次のように一般化できる。「ダグール語のエコーワードは、重複要素の第一モーラを ma に置き換える。」

CVC などの音素配列を含む音節を基準にこれを説明しようとすると、「閉音節では音節末子音を除き ma に置き換える」という説明を加える必要が生じ、一手間多くなってしまう。

1.3.3.5. アクセント

モーラという単位が説明に有効なものとして、津曲 (1985) の指摘どおりアクセントを挙げることができよう。位置によって語を弁別する類のアクセントはダグール語に無いと言えるが、語にはそれぞれ強めと高めがあり、音韻論的な語を規定するのに役立っているようである。

栗林 (1989) はダグール語の語の強勢は第一音節に常に置かれるとしている。第一位以外の短母音は弱化するため、これが常に語の最初に来る「強さアクセント」として記述されているものと考えられる。仲 (編) (1982) はこれに加え、第二音節以降に長母音が現れた場合そこが高めに発音されると述べている。

これについては津曲 (1985) による「強めは原則として第一モーラにあり、高さの山はうしろから二番目のモーラ (ただしそこが副モーラにあたる時はその直前の主モーラ) にあるとすれば済む」というまとめが正確であろう。図式化すると次の図 1-3 のようになる。

5 モーラの語の場合 (●は強めを、一は高めを表す)



図 1-3: ダグール語の 2 種類のアクセント

例えば hinedel 「笑い」という語をモーラに分けると hi.n.ee.d.l. の 5 モーラになるが、図 1-3 に当てはめれば語頭の hi. に強めが置かれ、後ろから 2 番目の d. が高めになることがわかる。例を 1-29 に示す。以下の例では高さアクセント位置に下線を付す。

(1-29)	oi	林	<u>o</u> .i	<u>V</u> V
	ami	命	<u>a</u> .mi	<u>V</u> C
	ilgaa	花	i.l. <u>g</u> .aa	V <u>C</u> <u>C</u> VV
	uder	日	u. <u>d</u> .r	V <u>C</u> V <u>C</u>
	aadel	生活	a.a. <u>d</u> .l	VV <u>C</u> V <u>C</u>

津曲 (1985) はモーラを主モーラと副モーラに分け、副モーラには高さの山が来ないとしている。主モーラとは #CV と #V (語頭の V)、副モーラとは V の後の V または C であるという。これを例 1-26 に当てはめると次の 1-30 のようになるであろう。

(1-30) 主モーラと副モーラ (1-26 を再編)

第一位の #CV または #V	…主モーラ
第一位の V の後の V (長母音・二重母音の 2 拍目)	} 副モーラ
第二位以降の長母音・二重母音	
語頭以外の C (子音連続 (表 1-17) の前部、語末)	
(上記以外)	…主モーラ

例えば $C_1V_1V_2C_2$ という語を想定すると、 C_1V_1 から成るのが主モーラで V_2 と C_2 が副モーラとなる。確かに副モーラが長母音の一部を成す場合には高さの山が一つ前のモーラに移動するようである (1-31)。

(1-31)	mood	木	<u>mo</u> .o.d	<u>C</u> VVC
	taaw	五	<u>ta</u> .a.w	<u>C</u> VVC
	daguur	ダグール	da. <u>g</u> .uu.r	V <u>C</u> <u>C</u> VVC
	ilaan	光	i. <u>l</u> .aa.n	V <u>C</u> VVC

しかし筆者としては、図 1-3 で示したアクセントモデルを基本とし、「後から 2 番目のモーラが副モーラである場合は、その前のモーラに高さアクセントが前に移動しやすい」と見たい。次の例 1-32 のように、高さの山が後ろから 2 番目の位置から前に移動する例もあれば、2 番目に残る例もある (例では高さアクセントが残る副モーラを囲い文字とした)。

(1-32)	ant	味	<u>a</u> .n.t	<u>V</u> CC
	aul	山	a. <u>u</u> .l	V <u>V</u> C
	ort	長い	<u>o</u> .r.t	<u>V</u> CC
	huls	汗	hu. <u>u</u> .s	CV <u>C</u> C
	aarč	チーズ	a.a. <u>u</u> .č	VV <u>C</u> C
	bait	事	<u>ba</u> .i.t	<u>C</u> VVC
	weil	仕事	we. <u>u</u> .l	CV <u>V</u> C

ミニマルペアを成すような類似例は見出せないが、比較的似た環境にあって高めの位置に違いが出ていることが見受けられる。aarč のような副モーラが 3 つ並ぶ例では、高さの山の移動が阻害される可能性もある。

1.4. 形態的特徴

本項では、ダグール語を統べる文法規則のうち基礎的な形態的側面を概観する。具体的には、まず 1.4.1. においてダグール語の語彙を形態的特徴から動詞、名詞類、不変化詞類という 3 つの語類に分類し、次いで 1.4.2. でそのうち名詞類の形態的特徴をまとめる。動詞については、本論文が主たるテーマとする述部において主要な役割をするものであるので、次章で詳細に扱う。

1.4.1. 語類

ダグール語における語は、その形態的特徴により動詞と名詞類と不変化詞類に分類できる。時制や希求などの意味を有する接辞を含む語を動詞と呼ぶ。時制や希求などの意味を有し動詞に含まれる接辞を動詞接辞と呼ぶ。動詞接辞の詳細は 2.2. にて述べる。名詞類とは、動詞接辞が付されず、格接辞や所属人称を付すことが可能な語である。格接辞と所属人称を名詞接辞と呼ぶ。動詞接辞が付されず、かつ名詞接辞を付すことのできない語を不変化詞類に分類する。

動詞とは、動詞語幹と動詞接辞という少なくとも2つ以上の形態素からなる語類である(1-33)。典型的には動作などの意味を表すもので、動詞接辞は時制やモダリティなどのいわゆる動詞カテゴリー的な意味や他の節との関係を表示する機能を有するものである。以下、動詞語幹を示す場合には語幹末尾に を付して示す。

(1-33) 動詞

動詞語幹 <u> </u>	-動詞接辞	>	動詞
yab <u> </u> 行く	-sen {-PERF}		yabsen 行った
oo <u> </u> 飲む	-ø {-IMP}		oo 飲め
saw <u> </u> 座る	-yieš {-CONC}		sawyieš 座っても

動詞接辞が表出する意味は、文を言い切ったり、他の節との関係を表すものであったりする。このことから動詞は節の主要部たる述語となることが多い。ダグール語の動詞の使われ方を見ることは、本論文の主たる目的であるダグール語の述部の文法現象の記述において重要である(第二章にて詳述)。

動詞接辞が付されない語のうち、文中で名詞接辞を付して現れうる語を名詞類と呼ぶ。ここで「類」という名称を付けたのは、いわゆる「名詞」の他「形容詞」と呼びうる語など意味的に幅があり、かつもっぱら名詞接辞が付されて文中に現れるものから名詞接辞を伴わずに現れることが多いものなど様々で、比較的雑多な語類となることを反映したものである。これについては次項で詳細に扱う。

これら動詞と名詞類のいずれにも属さないもの、すなわち動詞接辞が付されず、かつ名詞接辞を付すこともできない語を不変化詞類と呼ぶ。ここでも「類」が用いられるのは、

やはり意味や機能の面から雑多な語類であるためである。不変化詞類の典型は、名詞的にも形容詞的にも用いられず、「形容詞」を修飾する程度副詞 (e.g. *aidug* 「とても」) や、動詞を修飾する頻度の時間副詞 (e.g. *kalten* 「いつも」) などである。2.4. で扱う動詞前辞や 4.1.3. で扱う終助詞などを不変化詞類に含めることも可能だが、これらは語としての独立性が疑わしい。本論文では不変化詞類に属する語やその分類についての議論は保留し、今後の課題としておきたい。

ところで動詞語幹に一部の動詞接辞が付されると、その後ろに名詞接辞を付すことが可能になることもあるが、これは動詞接辞を付していることを優先し動詞であると見なす。他方、動詞を名詞類化する派生接辞は動詞接辞とパラディグマティックな関係にあり、これにより名詞化した語はもはや動詞ではないと見る。しかしこの両者の間には明確な線引きができない例もある。次の例 1-34 は、意味の特殊化が起こっており、動詞接辞と同形の派生接辞を付して名詞化した語であると見なすことも可能である。

(1-34)

<i>tur-sen</i>	vs.	<i>tursen</i>
to.be.born-PERF		(<i>tur_-sen</i>)
「生まれた」		「親戚」

※語彙形成に関わる派生接辞は本論文の主たる関心には含まれないため、以下では派生接辞を形態素分析してグロスで示すということをしない。

なお、本論文では動詞は接辞の付されない動詞語幹の裸の形で用いられることはなく、名詞類は接辞が付されない裸の形で用いられることもあると見ている。動詞語幹は命令 *-ø* を付すことで裸の形のように実現することがある (cf. *oo* < *oo-ø* {to.drink-IMP} 「飲め」) が、これは *-ø* が他の接辞とパラダイムを成し、「命令」の意味をとくに付与する接辞であると考えられる。したがって「動詞語幹が接辞無しで用いられると命令の意味を成す」とは見做さない。他方、名詞類の語も裸の形で実現することがあるが、動詞語幹が裸の形で現れるより頻度が高く、裸の形で用いられた場合の機能も多岐に渡り、例えば「主語となる機能を持った主格接辞 *-ø*」があることを積極的には支持しない。

1.4.2. 名詞類

以下では 1.4.2.1. で名詞類とは何か概略を述べ、1.4.2.2. においてその下位分類を簡略に紹介する。名詞類に付される名詞接辞のうち、1.4.2.3. では格接辞を、1.4.2.4. では所属人称を概観する。

1.4.2.1. 名詞類とは

前節で示した通り、名詞類とは動詞接辞が付されない語のうち文中で格接辞、所属人称接辞を付して現れうる語のことである。ここでこれを名詞類と呼ぶのは、典型的に「名詞」的な語のみならず同じ形態的性質を持つ語をやや広く包含するからで、具体的には形容詞的な語や副詞的な語が名詞類の下位分類に含まれる。典型的な名詞類の語で他の名詞類の語を修飾する場合、所有や所属の関係などを表すのに属対格接辞 (1.4.2.3. にて詳述) を先行する語に付すが、格接辞を付さずに他の名詞類を修飾できる語もある。またそうした語の中には、格接辞を付さずに動詞を修飾したり、文の付加成分になることができるものもある。これらの他、いわゆる代名詞や数詞など閉じたグループを成す語も名詞類に含まれる。その詳細は、次項で扱う。

名詞は単独で主語や述語といった文の成分となりうる他、格接辞を付して動詞等に支配される項となりうる。また所属接辞は、格接辞の後ろのスロットを占め、何らかの所属や所有の関係を示す接辞である。1.4.2.3. では格接辞について、その次の項では 1.4.2.4. 所属接辞について整理する。これらを総称して本論文では名詞接辞と呼ぶ。

その他、典型的な名詞カテゴリとしては数の範疇もある。ダグール語で複数を表す要素としては *-sel {-PL}* があり、生産性も高い。しかしこうした数の範疇は必須のカテゴリとは言えないため、ここではとくに深くは言及しない。

1.4.2.2. 名詞類の下位分類

名詞類は意味的・形態的な特徴から下位分類を設けることが可能である。これらは必ずしも明確な線引きができるものでなかったり、代名詞や数詞などやや閉じたグループを成すものが含まれていたりする。こうした下位分類はやはり本論文での考察には影響を与えないものであるので、以下に簡単にまとめるのみに留める。以下、代名詞、形容詞、数詞と呼びうる分類を簡単に紹介するが、網羅的な指摘とはなっていない。これらの他に典型的な「名詞」があると考えられる。

◆代名詞

いわゆる人称代名詞と指示代名詞は、格接辞が付される場合に語幹が異形態を取る点で他の名詞類と区別される。以下に恩和巴图 (編著) (1988: 273-285) を参考として、ブトハ・ダグール語の人称代名詞と指示代名詞の語幹の異形態を挙げる。なお、本論文における形態素分析では、これら代名詞斜格語幹と格接辞は不可分のものと見て、分析しない。

表 1-8: ブトハ・ダグール語の人称代名詞と指示代名詞の語幹

	一人称			二人称		三人称				指示代名詞		
	単数	複数		単数	複数	単数	複数	複数		近称	遠称	
		除外	包括					近称	遠称			
主格	bii	baa	badi	šii	taa	in	aan	ed	ted	en'	ter	
属格	min	maan	badin	šin	taan	yam	aan	edn	tedn			
対格	naa~			šam	taan							yam
与位格	nam											
具格	nam											
奪格										enn	tern	
										en~	ter~	
										eneew	tereew	
非基本格										en'	ter	

(恩和巴图 (編著) 1988: 273-285 より、一部改編)

◆形容詞

ものごとの状態や性質などを形容する意味を有する語が名詞類に含まれる。これらの語は名詞接辞を付すことが可能な点で名詞類であるが、名詞接辞が付されるのは「～という性質を有する特定のもの」などの意味が拡張している場合であることや、接辞などを用いることなく他の語の修飾語としてよく用いられること、*aidug* 「とても」などの程度副詞で修飾されたりすることなど、典型的な「名詞」からは区別すべき特徴もある。

こうした語の中には、語の第一モーラ (cf. 1.3.3.4.) を重複させ間に *-b*などを付すことで、いわゆる強調形を構成することが出来るものもある。こうした重複形式は、独立して現れることができないことから、数少ない接頭辞的な要素であると見ることも出来る。

(1-35) *čigaan* 「白い」 → *čib čigaan* 「真っ白い」 塩谷 (1991: 53, 67) より

čigaan *čib* を元の語の前に付す

↓ ↑

či 第一モーラを取りだす → *b* を付す

(恩和巴图 (編著) (1988: 233) はこの語について例外的に *čim čigaan* と記述している)

◆数詞

数詞は「数」を指示するという点で閉じた体系を成し、また意味の面からも一つのグループを成すものである。モンゴル語などに見られ、ダグール語では失われた「隠れた *n*」と呼ばれる語幹の交替形に類するものを有しているなど、他の名詞類の語とは一線を画す。

1.4.2.3. 格接辞

格とは、名詞類が文中でどのような働きをするか、あるいは述語の取るどのような項を占めるのかなどを示す範疇である。ダグール語において格は名詞に付された格接辞によって標示される。格接辞が付された名詞類の形式を格形式と呼ぶ。

格接辞は頻度の高い基本格接辞と、それに准ずる非基本格接辞に分けられる。まず以下の表 1-9 に基本格接辞を示す。表中に示した意味は概略的なものである。

表 1-9: 基本格

形式	意味	グロス上の表記	備考
-II	属格「～の」	-GEN / -GA	
-II	対格「～を」	-ACC / -GA	いわゆる定対格
-d	与位格「～に、で」	-DAT	
-AAr	具格「～で」	-INS / -AI	ブトハ・ダグール語では両形式が融合、 -AAr が頻繁に用いられる
-AAs	奪格「～から」	-ABL / -AI	
-tii	共同格「～と」	-COM	

(恩和巴图 (编著) 1988: 180-206 より)

以下、各格形式の機能について概略的に述べる。

◆格接辞の付されない形式

いわゆる主語や不定目的語は、格接辞が付されない裸の形で表示される。

(1-36) *oler mais sus am tarij bas ades tejeejaawei*

oler mais sus am tari-j bas ades tejee-j+aa-wei
people wheat bamboo grain to.plow-SIM also livestock to.feed-SIM+to.be-NPST
「人々は小麦やトウモロコシ (sus am) を栽培し、また家畜を飼っています」

(塩谷 1990: 71)

この例 1-36 では名詞類の語に接辞が一切ついていないが、述語動詞 *tari_* 「栽培する」、*tejee_* 「飼う」からヒト名詞 *oler* 「人々」が両動詞に共通する主語であり、*mais sus am* 「小麦やトウモロコシ」が *tari_* 「栽培する」の、*ades* 「家畜」が *tejee_* 「飼う」のそれぞれ目的語を担っていることが文意からわかる。とくにこの格接辞が付されず目的語を担う形式を、以下では不定対格と呼ぶ。これは対格接辞の付く目的語が修飾語を伴う、文脈上既出であるなど特定性が高いことから定体格と呼ぶのに対するものである。しかしこの使い分けは必ずしも定不定や特定不特定などで説明できるものではない。本論文において、主格も不定対格も分析上は特にグロスは付さない。

また *sus am* 「トウモロコシ」 (< *sus* 「竹の」 *am* 「穀物」) は *am* 「穀物」を *sus* 「竹」が修飾するような関係にある一種の複合語的な関係にあるものと解釈されるが、このような修飾語になる場合にも格接辞が付されない形式が用いられることがある。

さらに、*mais sus am* 「小麦やトウモロコシ」では二つの名詞句「小麦」「トウモロコシ」がいずれも目的語項であると解釈される。このように同一の項を占める名詞項が複数ある場合、これらの名詞句は並列の関係にあると見做され、格接辞を付すとすれば並列の最後部の名詞句のみに付される。並列の最後部以外の名詞句は、やはり格接辞が付されない形で現れる。

◆属格と対格

二つの名詞句の所有・所属の関係を表す -II 「～の」属格と、目的語項を表す -II 「～を」対格は、接辞の形式上区別が無いため、基本的に区別せず属対格と呼び、GA (= Genitive Accusative) というグロスを付す。しかし、一部の人称代名詞においてはその語幹が異形態を取ることによって区別され得る。このため区別しうる場合には GEN, ACC のグロスを使い分ける。次の例では、2 つ現れる -II に下線を引いた。

(1-37) *šii en' guarben jūil-ii dangaas nek jūil-ii yalgē awgaanie.*

šii en' guarben jūil-ii dang-aas nek jūil-ii yalg-j
 2SG this three kind-GA cigarette-ABL one kind-GA to.select-SIM
 aw-gaanie
 to.take-FUT.IMP.2SG

「この三種類の煙草から一種類選んで取ってください」(塩谷 1990: 64)

例 1-37 では 2 箇所 -II (-GA) が用いられているが、文意から「～の」であるか「～を」であるか日常の言語使用において区別できなくなることはない。典型的には「～の」属格の名詞句は直後の他の名詞句を修飾するものであるため、文中 2 つめの *jūil-ii* は動詞述語 *yalg* 「選ぶ」があることで属格ではなく対格であると解釈できる。一方、1 つめの *jūil-ii* は文中にすでに対格形の目的語項があることから、*dang* 「煙草」を修飾する属格であると解釈できる。

なお、恩和巴图 (編著) (1988: 191-194) によれば対格には -II_{yu} という接辞もあると記されている。長母音で終わる語幹に接続するときは -yu という形態をとる。使用頻度は低く韻文などで用いられ、また機能的には、一種の不確定の意味を表すこともあるという。形態的には -II の重複形式から生じたもので、対格を属格と区別し明示するための接辞として発達したものであろうと恩和巴图 (編著) (1988) は見ている。

◆与位格

-d は「～に (与える)」という受益者を表す与格と、「～に (いる)／～で (する)」という存在する場所や動作を行う場所を表す位格の両方の機能を持つことから与位格 (Dative Locative, 本論文では単に Dative の略号 DAT を用いる) と呼ばれる格である。

与位格 -d は先行する語幹末尾の子音と順行同化し、-n, -l, -r といった音形で現れることもある。

◆奪格と具格

ブトハ・ダグール語では出発点や時間の起点、比較の対象を表す「～から／～より」の奪格も、手段や経由地を表す「(道具) で／(経由地) を (通る)」などの具格と同形式 -AAr となる。しかしチチハル・ダグール語でもハイラル・ダグール語でも奪格には別形式 -AAs が使用されていることから、両者は別の格として認めるのが妥当である (恩和巴图 (编著) 1988: 202)。通時的にも、ブトハ・ダグール語においてのみ両形式が合流したと考えるべきものである。両形式の区別がつかないブトハ・ダグール語の例を示す場合にはこの合流形式を奪具格と呼び、AI (Ablative Instrumental) というグロスを振る。

◆共同格

-tii は「～と (いっしょに)」という意味を持つ格形式であり、共同格と呼ぶ。なお、派生接辞にも同形で「～を持った」という意味の接辞があるが、区別して考える。形式上は区別しがたいことが多く、基本的には意味的に判別することになる。この派生接辞については、3.6. 存在と所有において扱うこととなる。

◆非基本格

次の表 1-10 は、恩和巴图 (编著) (1988: 180-217) を参考に、その他出現頻度が低い格的な接辞を一覧にしたものである。これらの中には、取る名詞句が限られるものなど、文法的な要素として認めにくいものも含まれる。出現頻度が低く十分な用例が得られていないため、ここでは以下に列挙するに留める (本論文中の例文に現れるもののみグロスを付した)。

表 1-10: 非基本格

形式	意味	グロス上の表記	備考
-čAAr	程度格「～まで」		チチハル・ダグール語では-čAA
-kAAkel	確定方位格		-kAAkii という形態もある
-AAten	不定方位格		チチハル・ダグール語では-AAAtAA
-AAkel			
-AAAtAAr	由来格		ブトハ・ダグール語では-AAAtAAs
-dAA	方向格	-DIR	稀に-dAAyAA も
-mAAyi	目標格		
-n	定格		

(恩和巴图 (編著) 1988: 180-217 より)

1.4.2.4. 所属人称

所属人称とは名詞類に付されうる接辞で、それぞれの人称と再帰がある。名詞類に格接辞が付されている場合、格接辞の後ろに所属人称が付される。基本的な機能としては次の例 1-38 のように所属や所有を示すものである。該当の接辞に下線を付す。

(1-38) *baawaameni gertee bei, meemeemeni bas gertee bei.*

baawaa-meni geri-d-ee bei meeme-meni bas geri-d-ee bei
 father-1SG house-DAT-REFL EXIS mother-1SG also house-DAT-REFL EXIS
 「私の父は家にいて、私の母も家にいます」(塩谷 1990: 53)

baawaa「父」、meeme「母」に付された 1 人称単数の所属人称接辞 -meni「私の」は、その所属や所有の関係を示し、ちょうど 1 人称単数の人称代名詞属格形 *minii*「私の」と似た所有の意味を表す。この例のように、ここでは人称代名詞属格形が使用されていない一方で、所属人称接辞はより頻繁に付される。さらに *gert*「家に」に付された再帰接辞 -AA は「自分の」といった意味を成し、主語に対して所属や所有の関係を示すものであるとされる。主語に対する所属や所有の関係を示すため、主語に付されることは無い。また、所属人称接辞と再帰接辞はいずれも必須の要素であると言えるが、前者は (明確な所属関係があることが明らかであっても稀に) 省略されることもある一方で、後者が (主語との所属関係がある場合に) 省略されることはない。

次の表 1-11 に所属人称接辞の一覧を示す。

表 1-11: 所属人称

形式	意味	グロス上の表記	備考
-meni	1 人称単数	-1SG	
-maani	1 人称複数除外	-1PL.EXCL	-meni もあるという
-naani ~ -mnaani	1 人称複数包括	-1PL.INCL	
-šeni	2 人称単数	-2SG	
-taani	2 人称複数	-2PL	-teni もあるという
-Ilni~-ni	3 人称単数	-3SG	3 人称複数にも使用可能
-Ilnaani	3 人称複数	-3PL	-Ilneni もあるという

(恩和巴图 (編著) 1988: 220 より)

ハルハ・モンゴル語ではこれらの所属人称の形式が、元来の所属や所有の関係を示すという機能ではあまり用いられず、一部の形式が文中において旧情報を示す場合に使用される (水野 1992)。ダグール語でも、この所属人称の接辞は元来の所属や所有の関係を示す機能を持つ一方でこうした旧情報の明示あるいは主題を示す機能を担うこともある。

(1-39) *en' biteg yee? - bišen, terini bens ee. terini minii bens ee.*

en' biteg=yee

this book=Q

bišen, ter-ini bens ter-ini minii bens

NEG that-3SG notebook that-3SG 1SG.GEN notebook

「これは本ですか」「いいえ、それはノートですよ。それは私のノートです」

(塩谷 1990: 49 ※文末の ee は分析に現れない要素。4.1.3.7. 参照)

例 1-39 では下線部の三人称単数の所属人称接辞が、日本語の「～は」に似た主題マーカ的な機能を担っているものと考えられる。述語名詞が minii「私の」で修飾されていることから、所有や所属の意味で「彼の、そのの」と言った機能はここでは現れていないと見ていいだろう。

恩和巴图 (編著) (1988: 224-227) によれば再帰の形式は属格を除けばどの格接辞のあとにも現れうる。格接辞が付されずに再帰接辞が付された場合、属対格+再帰 であるとみなされる。再帰接辞としては基本として-AA が使用されるが、さらに-mel ~ -men' といった形式が挙げられている (表 1-12)。これらは-AA と重複して使用されるもので、再帰の意味を強調すると記述されている。こうした強調形式の具体的な用法などについては今後の研究が俟たれる。

意味としては「自分の」と訳され得るが、再帰の意味を有する文法的要素であり、主語との所属や所有関係を示すものである。

表 1-12: 再帰

形式	意味	グロス上の表記	備考
-AA	再帰「自分の」	-REFL	-mel ~ -men'は-AA の後にのみ現れる。 -mel ~ -men'の後にさらに-AA が付されることもある。
-mel ~ -men'		-REFLII	

(恩和巴图 (编著) 1988: 224-227 より)

第二章 動詞の形態的特徴

本章ではダグール語の動詞に注目し、主にその形態的特徴について概観する。本論文の主たるテーマである述部には、典型的には動詞という語類が現れやすい。したがって動詞という語類について形態的特徴を整理しておくことは、ダグール語文法の記述の基礎的知識として必要なだけでなく、本論文の主たる考察対象である述部の構造 (第三章) や節のタイプ (第四章) を考える上でも欠かせないものである。

本章ではまず動詞の形態論的特徴について 2.1. でまとめる。続く 2.2. では動詞語幹に付されうる動詞接辞について記述し、2.3. では動詞語根や動詞語幹に付されうるその他の接辞についてそれぞれ記す。2.4. では動詞の形態に関連し、動詞前辞という要素について概観する。なお、ダグール語の形態論的特徴一般については前章 1.3. に詳述したので参照されたい。

2.1. 動詞の形態の概要

動詞とは、1つの動詞語幹と1つの動詞接辞から成る語である。典型的に動詞語幹は動作の意味を表す他、言語活動や思考、知覚、物事存在や所有などの状態を表すものなども含まれる。形態的には、動詞語幹は動詞接辞無しに文中の成分になれないという特徴がある。

次の例 2-1 は、典型的な動詞語幹の例である。動詞語幹を語幹のみで提示する場合、本論文では当該動詞語幹の後ろに記号 `_` を付して示す。

(2-1) 典型的な動詞の例

`čoki_` 叩く `id_` 食べる `ič_` 行く `bod_` 考える `aa_` ある

動詞語幹は、接辞を付さずに語幹のみで用いられることはない。このことから本論文では動詞語幹に動詞接辞が付された形を動詞と呼んでいる。ただし全ての動詞は動詞語幹のみで最小語制約 (cf. 1.3.3.4.) を満たすことや、語彙的意味は動詞語幹が担うため語彙項目としては動詞語幹のみで立てるべきであることなどの問題もある (ie. `id-bei {to.eat-NPST}` 「食べる」と `id-sen {to.eat-PERF}` 「食べた」を別の語彙項目であるとは考えない)。

動詞は、次のような基本的に次のような構造を成す。

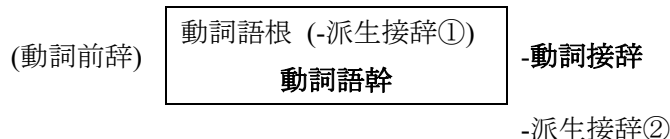


図 2-1: 動詞の基本構造

図 2-1 で動詞語幹と動詞接辞は必須のものである。動詞語幹は動詞語根と派生接辞から成ることもあるが、派生接辞を付さずとも動詞語幹になりうるものを動詞語根と呼ぶ。

丸括弧 () を付した動詞に先行する動詞前辞と、動詞語根と動詞接辞の間に現れる派生接辞①は必須の要素でなく、また複数の要素が連続して現れうる。動詞語幹は単独の動詞語根からも成るし、動詞語根に派生接辞が 1 つ以上付されて成ることもある。動詞接辞に並列で示した派生接辞②は動詞接辞とパラダイムを成すもので、動詞接辞が付されない場合にのみ派生接辞②が付されうることを示している。派生接辞②が付されたものは語類が転換し、動詞ではなくなる。

動詞の語彙的な意味は動詞語幹が担うのに対し、動詞接辞は主として時制や希求などのようないわゆる動詞的範疇の意味を表したり、節の性質を決定したりするものがある。動詞接辞は、基本的にいかなる動詞語幹にも付すことが可能で、語彙により付すことができたりできなかったりという揺らぎが少ないという点で文法的な接辞であると言える。また、動詞接辞には複数の形式が存在するが、それらがパラダイムを成し、同時に複数の動詞接

辞が一つの動詞語幹に付されるということは基本的にない。次節 2.2. では動詞接辞にどのような種類があるのか、形態的な特徴から整理する。形態的に分類した上で、次章以降その機能を検討していく。

2.3. 以降では関連するその他の要素についても概観していく。2.3. で扱う派生接辞は、次の 2 つに分類する。すなわち、相や態などの意味を表し、多くの動詞語幹に付すことが可能な点で文法的であると思ないうる派生接辞①と、語類を転換し、また接辞により付しうる動詞語幹が語彙的に決定される派生接辞②である。前者を文法的な派生接辞として 2.3.1. で、後者をその他の派生接辞として 2.3.2. で整理する。2.4. では動詞と切り離して扱いにくい要素として、動詞の前に現れる動詞前辞について用法等を整理する。

2.2. 動詞接辞

動詞接辞は、一般にはその機能面から「定動詞 (恩和巴图 (编著) (1988: 302, 333)では陈述式动词, 祈使式动词)」「形動詞」「副動詞 (連用修飾節の述部を成す動詞接辞)」などと分類されることが多いが、本節では 2.2.1. においてその形態的特徴から整理を試みる。その上で、次項で述べる分類とは別に従来の分類の一つ「形動詞」をやはり立てる必要性があることを 2.2.2. で述べる。

2.2.1. 後続する要素による分類

ここでは動詞接辞について後続する要素に注目し、接語的な性質を有する終助詞 (4.1.3. にて後述) や述語人称 (4.1.2. にて後述) が付されうるか否か、所属人称接辞 (cf. 1.4.2.4.) が付されうるか否か、格接辞 (cf. 1.4.2.3.) が付されうるか否か、という点で分類を試みる。

以下の表 2-1～2-3 では、それぞれの要素が「付されうる」ならば○を付した。表はそれぞれ表 2-1 終助詞を付することができる動詞接辞、表 2-2 所属人称接辞を付することができる動詞接辞、表 2-3 (上記の要素を) 何も付すことのできない動詞接辞に分けて示した。

表中の意味やグロスは参考として便宜上付したもので、その内実については次章以降で取り扱う。とくに各接辞が付された動詞形式の機能は、4 章にて詳述する。

◆終助詞を付することができる動詞接辞

次の表 2-1 に示す動詞接辞は、これを含む動詞形式が終助詞を後続させることができるものである。ここでは接辞のような結合を示すものも、接辞ほどの結合を見せないものも、独立性の低い要素がすぐ後ろに現れうることを総じて「付することができる」と呼ぶ。

表 2-1: 終助詞を付することができる動詞接辞

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-yaa(,-yaat)	意志	-VOL	○			
-ø	命令	-IMP	○			
-tu	複数命令	-IMP.PL	○			
-tgei	許可	-PERM	○	△		
-bei	非過去	-NPST	○	○		
-n	非過去 II	-NPSTII	○	○		
-IAA, -lii	過去	-PST	○	○		
-sen	完了	-PERF	○	○	○	○

※△は一部可能であることを示す。詳細は下記参照。

表 2-1 には終助詞を後続させることの可能なものを挙げた。終助詞とは話者の態度を表し叙述内容に影響を与えない、独立性の低い要素である。これらの要素は文の切れ目をマ

ークするものと考えられ、これらを後続させうる動詞形式はおおよそ主節の述語として使用されるものであり、従来は定動詞接辞と呼ばれるものがここに含まれる。

命令は単数の **-ø** と複数の **-tu** とで区別されるため、**-tu** については「複数命令」と分析した。しかし **-tu** は単に複数であるとし、複数命令は **-ø-tu {-IMP-PL}** のように分析すべき可能性もある。新疆方言では意志 **-yaa** に主語の複数性を表す **-yaat** があり、末尾の **t** の有無によって複数・単数が区別されている (Yu et al. 2008)。また次の表 2-2 に見る未来命令も、**-gAAAni** と **-gAAAnti** のようにやはり末尾 **t(i)** の有無によって複数単数が区別されている。この末尾の **t(i)** については用例が少ないため十分な分析ができていないが、述語人称における複数 (**-sel**) との異なりや、**-gAAAnti** においては **ti** と口蓋化した形で現れることなど問題がある。述語人称については 4.1.2. でも触れるが、**t~ti~tu** が問題となる形式については述語人称は付されない点、**t~ti~tu** は二人称複数 **-taa** に由来するとする説 (cf. namcarai ba haserdeni (1983: 240)) など合わせて考察する余地がある。

許可 **-tgei** は「三人称命令」とされることもあり、どちらかと言えば意志 **-yaa**、命令 **-ø**、複数命令 **-t** に似た意味機能を有する。しかし、述語人称のうち三人称複数の **=sel** を付することができる点、また **=č** 「も」という要素を付することができる点で特殊である。なお、**-tgei** に後続する **=sel** は、同形の複数接辞 **-sel** と見なすべき可能性もある。もし **-tgei** に他の述語人称を付することが可能であればこの要素も述語人称の **=sel** であると判断でき、**-tgei** に名詞接辞を付することができるなど名詞類的な特徴が見られるならば複数接辞 **-sel** と判断できるが、いずれもできない。ここでは **-tgei** の付された動詞述語が主節に用いられる場合のみ **=sel** が付されるものと判断し、述語人称の一部を成すと分析した。

非過去 **-bei** (ブトハ・ダグール語における代表形) は述語人称が後続することなどにより、**-b**、**-w** などの縮約形が現れることもある。とくにチチハルでは **-b**、ハイラル **-wei** などの音形で現れる。

過去 **-IAA~ -lii** は、述語人称が後続する場合に後者の形が現れやすい。この点、4.1.2. 述語人称において再度触れる。

完了 **-sen** は先行する動詞語幹末の子音と順行同化し、**-len**、**-ren**、**-ten**、**-den** などの音形になることがある。

◆所属人称接辞を付することができる動詞接辞

次に所属人称接辞を付することができる動詞接辞を表 2-2 で示す。

表 2-2: 所属人称接辞を付することができる動詞接辞

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-gu	未来	-FUT	△		○	○
-gAAn -gAAAnie -gAAntie	未来命令	-FUT.IMP -FUT.IMP.2SG -FUT.IMP.2PL	△		○	
-AAs	仮定	-COND			○	
-tel	限界	-TERM			○	
-guOOtOOr	随伴	-SUC			○	
-m, -mkii -mklii, -mlii	立刻	-IMD			○	

表 2-2 は終助詞を付することが基本的にできず、所属人称を付することができる動詞接辞を一覧にしたものである。表中の△は付しうる終助詞が限定的であることを示す。

未来 -gu は終助詞 =dec を後続させることで主節の述語たりうるもので、表 2-1 の完了 -sen と合わせて連体修飾が可能な形動詞接辞と見なされる形式である (cf. 2.2.2.)。

未来命令 -gAAn, -gAAAnie, -gAAntie は「命令」の名称からも分かる通り、表 2-1 の命令 -ø 同様に主節の述部にも用いられる要素であるが、所属人称を付することができる点で特殊である。むしろ文中にあって非主節の述部を成し、かつ所属人称を付することができる点で表 2-2 中の以下の接辞 -AAs, -tel, -guOOtOOr とともに同じカテゴリに含めた。未来命令の形式は -gAAAnie, -gAAntie という形式で現れるが、これらは動詞形式に再帰が付された -gAAAni-AA, {-FUT.IMP-REFL} のようなものであるとの見方もある (Tsumagari 2003: 144. namcarai ba haserdeni (1983: 243-244) は間投詞 ie が付されたものと分析する)。他の所属接辞とパラダイムを成しているように見える点でこうした分析がされるものと思われるが、意味上は再帰が用いられる根拠が不明であり、口蓋化した ie という母音が出る理由も判然としない。ここでは、-gAAAnie をグロス上では未来命令の二人称単数であると分析し、再帰が付されたものとは考えない。

立刻 -m~-mkii~-mklii~mlii の接辞と同形の形態素が、接語として他の接辞に後続する例がある。恩和巴图 (編著) (1988: 368) によれば、この接辞は -gu-d-AA {-FUT-DAT-REFL} 「～するとき／～したとき」の後ろに付され、一方の動作と同時に起こる動作を表すという。他の動詞接辞が付された後である点、再帰接辞よりも後ろに付されている点で接語らしいと言える。他方、「同時に」との説明もあるが、次の例 2-3 を見る限り必ずしも動詞接辞としての -mkii と全く同じ意味を有するとも言い難い。ここでは節語らしい現れのものについて =mkii と分析するのみに留める。例 2-2 は動詞接辞として用いられる例、例 2-3 は同形

の形式が動詞接辞よりも後ろで接語的に用いられ、動詞語幹に直接付されていない例である (いずれも該当の要素に下線を引いた)。

(2-2) *ter huu haĵremkiiyini badi endeer yawyaa!*

ter huu haĵre-mkii-yini badi end-eer yaw-yaa
that person to.get.home-IMD-3SG 1PL.INCL here-AI to.go-VOL

「その人が帰って来たら我々はすぐに行こう」(恩和巴图 (编著) 1988: 373)

(2-3) *en' ĵakselii ed irgudeemkii hoo aĉersensel.*

en' ĵak-sel-ii ed ir-gu-d-ee-mkii hoo aĉer-sen=sel
this thing-PL-GA these to.come-FUT-DAT-REFL=IMD all to.bring-PERF=PL

「これは彼らが来た時にみんな持ってきた」(恩和巴图 (编著) 1988: 368)

◆何も付すことができない動詞接辞

最後に、表 2-1, 2-2 で見た接辞がいずれも基本的に付されない動詞接辞を表 2-3 で示す。

表 2-3: 何も付すことができない動詞接辞

	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-ĵ	並列	-SIM				
-ĵii	完成	-SIMII				
-ĵie	並行	-SIMIII				
-AAr, -AA	先行	-ANT, -ANTII				
-n	随伴	-ASS				
-rsAAr	継続	-PROG	△	△		
-yieš	譲歩	-CONC				

随伴 -n を表 2-1 における同形の形態素非過去 II と形態的特徴から区別する積極的な理由はない。モンゴル語における対応形式がそれぞれ別であることや、非過去 II が基本的に否定文で現れるなど用法面の違いから、ここでは同音異義形態素であると見る。

継続 -rsAAr は稀に終助詞と述語人称が付される例がある (2-5)。おそらく本来は同表の他の接辞と同様に、非主節の述部たる要素であった (2-4) ものが、独立性を高めた言いさし文であると考えられる。

(2-4) *ed durbeeleen yawrsaar nek hig ailii kuĉersen.*

ed durbeeleen yaw-rsaar nek hig ail-ii kuĉer-sen
these by.four to.go-PROG one big village-GA to.reach-PERF

「彼らが四人で進んでいくと、大きな村に辿り着いた」(恩和巴图 (编著) 1988: 196)

(2-5) *bas ter usgue hasoorsaartaa yee?*

bas ter usgu-ee hasoo-rsaar=taa=yee

also that word-REFL to.ask-PROG=2PL=Q

「まだそのことを聞いているのか」(恩和巴图 (编著) 1988: 372)

このような用例がある以上、当該接辞は表 2-1 に含めるべきとの判断もありうるが、基本的に他の節に依存するという *-rsAAr* の性質 (4.2.4. にて後述) を考慮すると、表 2-1 で示した接辞とは同列に扱いにくい。本論文では動詞接辞 *-rsAAr* の例 2-5 に見られるような述語人称や終助詞を従える用法を例外的なものと考え、主節の述部としての用法を考慮しないこととした。しかし節の性質を考える上でこの問題は避けて通れないものであり、また他の要素についても類似の言いさし文としての用法がないか調査する必要がある。これらは今後の課題としたい。

2.2.2. 「形動詞」

表 2-1 の *-sen* と表 2-2 の *-gu* は所属人称接辞と格接辞の付与が可能である点で両形式は名詞類的な性質が共通している。両者は一般に形動詞接辞と呼ばれるものであり、*-sen* または *-gu* を付した動詞述語は連体修飾節や名詞節の述語になりうる点でも共通している。終助詞や述語人称の付与の可否が異なることから 2.2.1. では *-sen* と *-gu* を別分類としたことは、第四章で見る主節の述語としての出現の可否と連関するものであるので意味のあることである。しかしこの両者は連体修飾節の述語として機能する点において、一つのグループにまとめることは以下の議論において有益である。そこで 2.2.1. で行った分類とは別に、*-sen*, *-gu* を付した動詞を従来の研究に倣い形動詞形と呼ぶこととする。本論文では形動詞形に関する問題を 3.4.2. 人魚構文、3.5. 否定、そして 4.2. 非主節の述部において再度議論する。

なお、モンゴル語の形動詞接辞に対応するダグール語の動詞接辞として、恩和巴图 (编著) (1988) は *-sen*, *-gu* の他にも *-deg*, *-AAč*, *-maayaar* などの形式を挙げている。しかし上述のような条件を満たすと見られる点では共通の接辞であるが、生産性が低いため動詞接辞として扱わず、派生接辞 (派生接辞②, cf. 図 2-1) であると見る。

2.3. 派生接辞

本節では動詞語幹に後続する接辞のうち、文法的な派生接辞を 2.3.1. で扱い、その他の派生接辞を 2.3.2. で扱う。これらは動詞の意味や語彙的な性質などの点で重要な要素である。しかし本論文の主たる関心ごととはあまり関係しないため、簡略に扱うこととする。なお本論文では本節での記述を除き、こうした派生接辞についてはとくに例文上で形態分析を施さない。

2.3.1. 文法的な派生接辞

派生接辞のうち、相や態などの意味を動詞に付与するものは、動詞語根と動詞接辞の間に現れ、動詞語根と合わせて動詞語幹を成す。図 2-1 (再掲) では派生接辞①がこれに該当する。

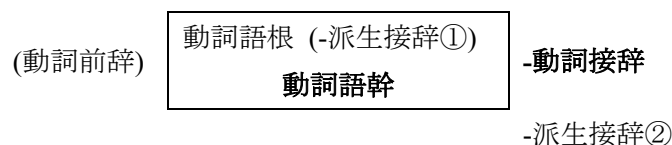


図 2-1 (再掲): 動詞の基本構造

この図のように文法的な派生接辞（派生接辞①）は動詞接辞とパラダイムを成さず、語の最後尾にはやはり動詞接辞を付すことが必須である。こうした文法的な派生接辞は 2 つ以上の接辞を連続的に付すことも可能である。

異形態の選択が語彙的であったり、接続の可否が語の意味によって制限を受けたりする点において派生接辞らしさがあるが、とくに態の意味を表すもの(例 2-6)はどんな動詞語幹にも比較的幅広く付しうる点で文法接辞よりな要素である。

ここでは以下に恩和巴图 (編著) (1988: 375-384) より当該要素を列挙するに留める (2-6)。これらの要素が付されてもなお動詞語幹であるため、これらの派生接辞にも動詞語幹であることを示す を 付す。

(2-6) 態を表すもの

使役	-lgAA_	id_「食べる」	> idelgee_「食べさせる」
	-lkAA_	sau_「座る」	> saulkaa_「座らせる」
	-gAA_	bol_「成る」	> bolgaa_「成らせる、する」
	-kAA_	bos_「起き上がる」	> boskaa_「起こす」
	-AA_	panč_「怒る」	> pančaa_「怒らせる」
受動	-rd_	uǵ_「見る」	> uǵerd_「見られる」
衆動・相互	-lč_	bari_「つかむ」	> barilč_「つかみあう、相撲を取る」

(恩和巴图 (编著) 1988: 375-382)

(2-7) 相を表すもの

反復	-joo_, -čoo_	yaw_ 「行く」	> yawjoo_ 「行ったり来たりする」
瞬間	-IAA_	šag_ 「拭く」	> šaglaa_ 「さっと拭く」

(恩和巴图 (编著) 1988: 382-384)

この他、移動動詞 ir_ 「来る」と ič_ 「行く」は -Iir_, -Iič_ ~-(i)č_ のような接辞として「～しに来る」「～しに行く」というような目的を果たすために移動する意味を表す用法があり (2-8)、恩和巴图 (编著) (1988) はこれを一種のアスペクト接辞であるとして扱っている。

(2-8) udeš šamii eriičsen aasenbi.

udeš	šamii	eri- <u>ič</u> -sen	aa-sen=bi
yesterday	2SG.ACC	to.search-to.go-PERF	to.be-PERF=1SG

「昨日君に会いに行ったんだよ」(恩和巴图 (编著) 1988: 386)

2.3.2. その他の派生接辞

これは文法的な動詞接辞と異なり、付される語幹が語彙的に限られ、どんな語幹に付されるか、また付された結果どのような意味機能が付与されるか共時的に予測しがたいものである。これは動詞接辞とパラディグマティックな関係のもので、1つの語の内部で動詞接辞と同時に現れることはない。動詞接辞が付されない以上動詞ではないので、その主たる機能は動詞語幹を動詞以外の語類へと転換するものであると見ることができる。中には動詞接辞と同形のものもあるが、この場合その当該接辞が派生接辞であるか否かは意味的に判断するしかない。

以下に恩和巴图 (编著) (1988: 534-543) より代表的な派生接辞を列举する (2-9)。

(2-9)	-s	nemb_ 「覆う」	> nembes 「掛け布団」
	-r	alku_ 「歩く」	> alker 「歩み」
	-nku	turki_ 「押す」	> turkenku 「鍵」
	-del	sor_ 「学ぶ」	> sordel 「教養」
	-AA	tari_ 「植える」	> tarie 「田畑」
	-š	oo_ 「飲む」	> ooš 「飲み物」
	-leg	aminaa_ 「暮らす」	> aminaaleg 「生活」
	-l	šad_ 「できる」	> šadel 「能力」
	-AAr	melj_ 「競う」	> meljeer 「競争」
	-AAč	daul_ 「歌う」	> daulaač 「歌手」

(恩和巴图 (编著) 1988: 534-543)

とくに最後の -AAč は恩和巴图 (编著) (1988: 348) が動詞接辞としても扱っている形式であるが、本論文ではこれについて使用頻度の低さから動詞接辞と見なさず、あくまで派生接辞であると見る (cf. 2.2.2.)。

2.4. 動詞前辞

以下では 2.4.1. で動詞前辞という要素の概要を述べる。続いて 2.4.2.～2.4.4. で動詞前辞の音韻・形態的特徴、共起する動詞、意味的特徴という観点からダグール語の動詞前辞について記述する。

2.4.1. 概要

動詞前辞とは、動詞の前に置かれ主として動詞に「破壊」の意味を持たせる機能のある不変化詞類である。

ダグール語は接尾辞型の言語であり、語としての独立性の低い要素は語彙的な語の後ろに置かれるのが普通である。しかしこの動詞前辞は動詞語幹の直前に置かれ、動詞に意味を付与する役割を持つものである。その独立性などの性質には不明な点も多いが、動詞の直前位置に置かれるという点で他の副詞的な語より独立性は低い。また基本的に動詞の直前位置に現れるものであるが、音韻的には独立しており接頭辞であるとは言い切れない。次項で扱うように動詞前辞は動詞に派生することが可能であるが動詞そのものではないため、複合動詞の前部要素であるとも扱わない。

Yamada (2016) はモンゴル語における動詞前辞 (preverb) の役割について議論したものであるが、ダグール語にも類似の要素がある。恩和巴图 (编著) (1988: 411) が「造形副詞」としてまとめた語を、その意味機能から整理し直すと次の例 2-10 のようになる。例 2-10 で付した日本語の意味は凡その特徴を捉えたものであるが、基本的に「破壊」に類する意味を有するものである。

- (2-10) 破壊 *kialt, kenk, hiat, hag, pieč*
 压碎 *kiap, mial, mielč, mielj, tamb*
 断裂 *čak, tur, pur, hump*
 破綻 *long, lart, set,*
 拔去 *bolg, bolt, honki*
 貫通 *čulp, emb, hult, tant, huč*
 崩壊 *kolt, lar, hod, kuak, šir, lomb*
 その他 *lamb* (設置、固定), *kam* (閉鎖), *šeb* (無音)

以下、次項 2.4.2. では動詞前辞の音韻・形態的特徴について、次の 2.4.3. ではその主な用法について、2.4.4. では意味的特徴について概説する。いずれも資料が十分でなく、詳細については今後の研究課題としたい。

2.4.2. 音韻・形態的特徴

モンゴル語における動詞前辞は、ネイティブにとって音象徴的な語であると感じられることがあるようである。ダグール語について同様の感覚が認められるのかは検証が必要であるが、筆者の印象からすると /l/ 始まりの語が多いこと、/p/ を含む語が多いこと、/r/ 終わりの語が多いこと、口蓋化子音始まりの語が多いこと、鼻音を含む語が多いこと、語形がいずれも短いこと、さらに重複して用いるものがあることなどオノマトペのように思える特徴を有する点が指摘できる (恩和巴图 (編著) 1988: 449-454 が挙げる摹拟词 (音声や形象を模倣することで動作や状態を表す語) に見られる特徴に似る)。次の 2-11 a. では下線部の動詞前辞 *kolt* が 1 つ用いられているが、b. では 2 つ重複して用いられている。この重複により動作の複数性が表されているものと考えられる。

(2-11) a. *nek mangie ireer harie ekeeyiigiini kalteg beyiini kolt idee yawoo talilen.*

nek mangie ir-eer harie ekee-yii-g-iini kalteg bey-iini kolt
 one monster to.come-ANT however sister-GA-E-3SG half body-3SG collapse
id-ee yaw-oo tali-len
 to.eat-ANT to.go-ANT to.put-PERF

「化け物が一匹やってきて、なんと姉の半身をがぶりと食べてしまった」

(恩和巴图 (編著) 1988: 387)

※*ekeeyiigiini* に見られる挿入子音 *-g* は「～のもの」という意味の接辞である可能性もある。恩和巴图 (編著) (1988) は同環境では *-II-Ilni* が縮約し *-Ilni* となると述べ、子音が挿入されることについては言及していない。

b. *šireeyee hoo kolt kolt tarkjaabšie.*

širee-yee hoo kolt kolt tark-ĵ+aa-b=šie
 desk-REFL all collapse RDP to.hit-SIM+to.be-NPST=2SG.Q

「机をみんなばかばか叩き潰している」(恩和巴图 (編著) 1988: 412)

このようなオノマトペらしい特徴がみられる一方で、オノマトペ的な特徴とは言い難い語形も指摘できる。例えば、2-11 に現れる動詞前辞 *kolt* のように末尾に *lt* や *l+* 子音 の形を持つ語形を有する動詞前辞は複数見られるが、これは 恩和巴图 (編著) (1988: 449-454) が挙げる摹拟词には類例が見つからない。

動詞前辞の主要な特徴として、多くが派生動詞を有する点も指摘できる。具体的には、上掲の動詞前辞の多くが動詞派生接辞 *-loo_* を付すと他動詞に、*-r_* を付すと自動詞になるという他動詞と自動詞の対を派生する (2-12)。

- (2-12) *kolt* (動詞前辞) 崩れ去るさま。 cf. 「[副] 崩掉(一块)」(恩和巴图 1983: 125)
koltloo_ (他動詞) 崩す
kolter_ (自動詞) 崩れる

名詞類を動詞に派生する派生接辞にもよく似た *-l_*, *-lAA_*, *-r_* があるが、一般には他動詞と自動詞の対を派生することはない。ただし使用の頻度には差があり、すべての動詞前辞につき有対の派生動詞が見いだせるわけではないので、これをもって動詞前辞か否かの決定的な判断基準にすることはできない。

なお、語根が男性母音から成る場合には *-loo* という円唇母音が現れるところも特徴的である。モンゴル語の対応形式は *-l* で、母音は含まれない。

2.4.3. 共起する動詞

得られた用例数が限られるため十分な記述をすることはできないが、Yamada (2016) ではモンゴル語の動詞前辞が「打つ」などのような打撃を表す表面接触動詞と共起しやすいことが示されており、ダグール語にも同様の傾向があるものと思われる。先の例 2-11 b. では動詞前辞 *kolt* が *tark_*「叩く」と共起しているが、次の 2-13 のように他の動詞前辞 (破壊) も *tark_*「叩く」と共起する例があり、また同じく破壊の動詞前辞が他の表面接触動詞 *noo_*「ぶつける」と共起する例 2-14 も見られる。以下の例では動詞前辞と動詞そして対応する和訳に下線を引いた。

- (2-13) *argii lonkui yuguu pieč tarksenšie?*

argi-ii lonku-ii yuguu pieč tark-sen=šie

liquor-GA bottle-GA why break to.hit-PERF=2SG.Q

「酒瓶をどうしてがちゃんと打ち割ったんだ」(恩和巴图 (編著) 1988: 412)

- (2-14) *garie kialt noosen.*

gari-ee kialt noo-sen

hand-REFL break to.strike-PERF

「手をばしっとぶつけて折ってしまった」(恩和巴图 (編著) 1988: 412)

この他、恩和巴图 (1983) の語彙集では共起しやすい組み合わせが見出し語として掲載されており、これを見ると例 2-10 で言う圧碎は *dar_*「押す」、断裂は *herk_*「切る」、抜去は *tat_*「引く」といった動詞と組み合わせられやすいといった傾向は見いだせるかもしれない。次の例 2-15 は圧碎の動詞前辞 *mial* が *dar_*「押す」と共起している例である。

(2-15) *madennaa jinčerdgudee guarben weyii hadieyiišni mial mial daraa garsen.*

maden-d-aa jinčerd-gu-d-ee guarben wey-ii hadie-yi-šeni mial
 last-DAT-REFL to.be.hit-FUT-DAT-REFL three joint-GA wall-GA-2SG crushed
mial dar-aa gar-sen
 RDP to.push-ANTII to.go.out-PERF

「最後に叩かれたとき、三節の壁をばりばり押し倒してしまった」

(恩和巴图 (编著) 1988: 412)

表面接触動詞と共起しやすいことや動詞前辞ごとの共起しやすい動詞がある点は、モンゴル語の動詞前辞と似ている。ダグール語の動詞前辞はこれらの他に、*ič* 「行く」、*hii* 「する」といった軽動詞と共起する用法のある点が特筆できる。こうした軽動詞と共起すると、動詞前辞の派生後の動詞 (例えば動詞前辞 *huč* 「貫通」に対する *hučlee* 「刺す」 *hučir* 「刺さる」) のような働きをする。とくに *ič* 「行く」との組み合わせは自動詞としても他動詞としても用いられるようである。次の例 2-16, 2-17 では自動詞 (破壊されるものが主語) として、2-18, 2-19, 2-20 は他動詞 (破壊されるものが目的語、(2-18) (2-19) は主語が明示されていない例、(2-20) は「汗」が主語) として用いられている。

(2-16) *kurku dees tur iče talisen.*

kurku dees tur ič-ee tali-sen
 long rope tear to.go-ANTII to.put-PERF

「長い縄はぶつと切れてしまった」 (恩和巴图 (编著) 1988: 411)

(2-17) *en' tualegnaani hojoorooroo honki ičsen.*

en' tualeg-naani hojoor-oor-oo honki ič-sen
 this pole-1PL.EXCL root-AI-REFL pull.out to.go-PERF

「この柱は根元から引っこ抜けた」 (恩和巴图 (编著) 1988: 412)

(2-18) *čonkui guu hiat ičsen.*

čonku-ii guu hiat ič-sen
 window-GA glass break to.go-PERF

「窓ガラスをがちゃんとやってしまった」 (恩和巴图 (编著) 1988: 412)

(2-19) *hakruoo hult hiisen.*

hakru-oo hult hii-sen
 trousers-REFL tear to.do-PERF

「ズボンをびりっとやった」 (恩和巴图 (编著) 1988: 412)

(2-20) *huls kantaasii tant ičsen.*

huls kantaas-ii tant ič-sen

sweat coat-GA penetrate to.go-PERF

「汗が上着にしみ込んだ」(恩和巴图 (编著) 1988: 412)

この他、動詞前辞が単独で用いられる例がテキストから得られたが、こうした例についてはさらなる分析が必要である (2-21)。ここでは「目をぐさっと！」という訳語を与えたが、こうしたオノマトペ的な性質を持つ動詞前辞が単独で動作まで含意した特殊な表現である可能性がある。*huč* という語が、接辞を要さず動詞 *huč* としても使用されうるなどの可能性もあるだろう。なお、派生動詞としては *hučlee_*, *hučir_* がある (恩和巴图 1983)。

(2-21) *nidini huč!*

nid-ini huč

eye-3SG penetrate

「そいつの目をぐさっと！」(恩和巴图等 (编) 1988: 121)

2.4.4. 意味的特徴

Yamada (2016) ではモンゴル語の動詞前辞の機能が「破壊動詞化」にあると論じた。例えばモンゴル語の動詞 *coxi_* 「叩く」は表面接触動詞であり、「叩いた」結果として目的語名詞に「壊れる」などの影響を及ぼすことは含意しない。そこで動詞前辞 *xaga* 「破壊」を付して *xaga cohi_* とすると、目的語名詞に「壊れる」などの不可逆的な影響を与えることを含意するようになる。これは Fillmore (1970) が英語の *hitting verb* (打撃動詞) と *breaking verb* (破壊動詞) を比較したことになぞらえたもので、まずモンゴル語にもこれに類する現象があり、そして動詞前辞が打撃動詞を破壊動詞に変える機能や、その例外などを示した研究である。動詞前辞を派生して成る他動詞は破壊の意味を持ち、目的語に不可逆的な変化を齎す意味を有する破壊動詞である。

ダグール語の上掲の例からも、先行研究で付された漢語訳では結果補語が付され、「～した結果、破壊された」というような意味を動詞前辞が持つことは明らかである。しかし Yamada (2016) で行ったテストのように、動作の完遂や格配列などに関する調査をダグール語の動詞前辞について実施できていない。これについては今後の研究課題としたい。

第二部 述部のさまざまな形式

本論第二部では、本論文の主たるテーマであるダグール語の述部の現れについて多方面から検討する。第三章では述部の基本構造として、動詞述語と名詞類述語の基本的な構造について概観する。そして動詞述語と名詞類述語を組み合わせる形式についてもここで扱い、関連して否定と存在についてもまとめる。第四章では、節のタイプごとに述部の様相を見る。具体的には、主節と連体修飾節、連用修飾節である。

なお、本論の一部は筆者による次の研究ノート、論文、学会発表が元になっている。学会発表をもととして大幅に加筆したものについては、参考文献一覧に掲載していない。これについては☆印を付した。

第三章 述部の基本構造

3.2. 名詞類述語

： ☆YAMADA Yohei (2016) A Verb aa in Dagur. A presentation in Conference of central Asian language and linguistics, at Indiana University.

： 山田洋平 (2017a) 「ダグール語の名詞述語」

3.4.2. 二種類の否定の使い分け

： YAMADA Yohei (in preparation. b) Preverbal and Postverbal Negation of Dagur

3.5.2. 動詞 aa_

： ☆YAMADA Yohei (2016) A Verb aa in Dagur. A presentation in Conference of central Asian language and linguistics, at Indiana University.

4.1.2. 終助詞

： 山田洋平 (2017b) 「ダグール語の終助詞」

4.2. 非主節の述部

： ☆Ямада Ёохэй (2016) Дагуур хэлний болзох нөхцөл. (「ダグール語の条件副動詞」) A presentation in the Second International Conference on Mongolic Linguistics, at Kalmyk State University.

： ☆YAMADA Yohei, GEKA Aoi (2017) Clause Linkage in Mongolic Languages: An RRG Approach to Microvariation. A presentation in Role and Reference Grammar 2017, at University of Tokyo.

： 山田洋平 (2015b) 「ダグール語の (連用修飾的) 複文」

第三章 述部の基本構造

本章ではまず 3.1. において本論文における述部の定義を行う。次いで、述部の基本構造として、動詞と名詞類がそれぞれ述部の主要部となる場合についてそれぞれ 3.2., 3.3. で整理する。3.2. においては動詞が述部を成す場合について整理し、これが文法化して組み合わさった補助動詞構造についても扱う。3.3. では名詞類が述部を成す場合について整理し、補助動詞の一種であるコピュラや、名詞類述語文が表しうる意味についても整理する。

3.4. ではこうした動詞述語や名詞類述語を中心として複数の要素からなる述語複合体について扱う。実際には動詞や名詞類が単体で述語を成すケースばかりでなく、これらが組み合わさって述部を成す。述語複合体とはどのようなものか整理したのち、動詞述語が名詞類述語に取り込まれる形をとる人魚構文についても考察する。

述語複合体と関連して否定について 3.5. で扱う。ダグール語における否定表現は、接辞というより動詞の前後に置かれるやや独立性の高い要素によって成される。とくに動詞述語で非過去時制の場合には前置否定と後置否定を使い分ける必要が生じるが、これについても考察する。

3.6. では動詞述語にも名詞類述語にもまたがる表現の枠組みとして存在や所有について扱う。端的に言えば動詞述語文的に表される存在や所有の表現もあれば、名詞類述語文的に表される存在や所有の表現もあり、これらの表現の根底に動詞述語文と名詞類述語文の違いが現れると見る。

3.7. ではこれら 3.1.~3.6. での議論をまとめ、本章を閉じる。

3.1. 述部とは

本論文は、ダグール語における節の主たる構成要素である述部に焦点を当てることで、「文」あるいは節の成す構造を研究する土台を築いてゆくことを目的としている。ここでは節が述部と項から成ることを前提として記述を行っている。石塚 (2015) は述部という用語を主語に対するものと項に対するものとして説明している。本論文においてもこれまでの記述において前置き無く「主語」「目的語」などの用語を用いてきたが (例えば 1.4.2.3.)、これには「文」あるいは節が「主語」「目的語」そして述部などの要素から成っていることを前提としたものである。

本論文では石塚 (2015) を踏まえ、ダグール語の述部を「項の属性や関係を表す成分」であると考え、また「文」や節のような意味のまとまりを支配するものであると見る。例えばダグール語の話し手が発した次の 3-1 のような発話は、šii「あなた」saren「傘」などの要素が含まれるが、barigaanie「持ちなさい」という語によって目的語 saren「傘」が支配され、所有者たる主語 šii「あなた」との関係を示し、1 つにまとめていると考えられる。このとき、barigaanie「持ちなさい」は述部を成していると考ええる。

(3-1) *šii gargudaa saren barigaanie.*

šii gar-gu-d-aa saren bari-gaanie
2SG to.get.out-FUT-DAT-REFL umbrella to.hold-FUT.IMP.2SG
「あなたは出るとき傘を持ちなさい」 E

実際の言語使用の場においては、次のように述部や項だけで現れる発話もある。これは「述部が項の属性や関係を表す」の反例であるというよりも、文脈などによって明確であるために (例えば 3-1' では実際に「傘」を見せながらの発話であったり、3-1'' では「雨が降りそうだ」などの前提知識を聞き手と共有していたりするなど) 省略された例であると考ええる。

(3-1') bari-gaanie

to.hold-FUT.IMP.2SG
「持ちなさい」

(3-1'') saren

umbrella
「傘」

次節以降で見ていくように項を支配することのできる動詞が典型的な述部の構成要素となり (3.2.)、さらに名詞類も動詞なしに述部を構成することができる (3.3.). 3.4. で見るよ

うに、動詞や名詞類といった複数の要素が連続して現れ、個々の語はそれぞれ独立性を保ったまま一つの述部を成すようにふるまう。これを本論文では述語複合体と呼ぶ。

より具体的には、述部は次のようなものを指す。述部は、語彙的な意味を持ち項の属性や関係を表す機能を担う中心的な述語を一つ含む (述部がその核において並列する関係の述語を有するならば、二つ以上の述語が含まれることもありうる)。

述語に後続するものとして、補助動詞とその他補助的な機能を果たす動詞 (コピーラ、引用動詞)、補助的な機能を果たす名詞類、終助詞的な機能を果たす名詞類、そして述語人称と不変化詞に含まれる終助詞までが、述部に含まれる。

述語に先行するものとして、動詞が支配する必須項 (主語を含む) やその他付加される語は述部に入らない。動詞を修飾する副詞的な要素も述部には含めないが、動詞述語と不可分な要素として否定を表す語 *ul*, *es*, *buu*、そして動詞前辞については述部に含むものとする。名詞類述語も基本的にこれに準ずるが、動詞述語のように多様な項を支配することのない名詞類述語は、主語項の属性を表すために名詞類述語を修飾する要素についても述部に含むものと考えたい。こうした名詞類述語をさまざまな修飾語についても、主語の属性を表す述部の一端を成すものとして以下の検討に含める必要があるが、本論文においてはこの点検討するに至らなかった。これについては稿を改め、項や名詞類について議論する際に検討したい。

本論文ではダグール語の述部なるものを包括的に扱うことを目指し、主節ならぬ連体・連用修飾節のような節の述部も考察の対象とした (4.2. で扱う)。しかしこれは主節への依存度が高く、各種の項をまとめあげる述部としての性質はいくらか弱いものである。この点で、等しく述部を成すものとして扱うべきかという問題が残る。

3.2. 動詞述語の概要

以下では動詞述語の概要を述べる。基本的な性質については 3.2.1. で述べ、次いで 3.2.2 では複数の動詞が複合的に用いられる構造、すなわち補助動詞構造について述べる。

3.2.1. 動詞述語とは

動詞述語とは節の述部の主要部である述語が動詞によって成るもので、述語が取る形式としては典型的なものである。動詞が述部に現れるのは、動詞接辞の持つ時制やモダリティ的な意味によって話者の視点や態度を標示し、あるいは節の性質を決定づけることで、まとまった叙述内容を前後の文脈の中で位置づける役割を担うためというのが理由の一つであろう。文脈の中で位置づけるとは、一つには情報の受け手に対し伝達する態度のことであり、また一つには他の叙述内容との時間的・論理的な関係を示すことである。こうした節の性質による述語の使い分けについては、次章「第四章 節のタイプと述部」において詳しく取り扱う。

まとまった叙述内容を構成するべく、さまざまな名詞句を支配するというのも動詞の重要な機能の一つであり、これは動詞が述部に現れやすいもう一つの理由である。動詞は主語や目的語、その他の格接辞をとった名詞項などの成分よりも後部に現れ、これらの項を支配する。基本的に目的語・述語という語順となるダグール語（及びその他モンゴル語族の諸言語）の基本的な語の配列は、こういった動詞が後部に現れるという特徴による。次の例 3-1 (再掲) では下線部 *bari_* 「持つ」が支配する主語項 *šii* と目的語項 *saren* が動詞より前に現れている。なお、主語項が目的語項に先行するのは旧情報あるいは主題となる名詞句がその他の要素に先行するためである。また *gargudaa* 「出るとき」は動詞を修飾する要素であり、やはり動詞よりも前に現れている。

(3-1 再掲) *šii gargudaa saren barigaanie.*

šii gar-gu-d-aa saren bari-gaanie
2SG to.get.out-FUT-DAT-REFL umbrella to.hold-FUT.IMP.2SG
「あなたは出るとき傘を持ちなさい」 E

動詞述語はそれぞれ主語項以外にも名詞項を支配する。どの動詞がどのような名詞項を支配するかは、動詞語幹の語彙的な意味によって決まる。動詞語幹には 2.3.1. で概観したような文法的な派生接辞が付されることで、こうした項の増減を行うものもある。本論文では、こうした動詞に支配される項や、動詞を修飾する成分そのものは述部の外側にあるものと考え、研究対象としない。

動詞述語は、単独の動詞語幹によって成るシンプルな構造を有するものと、複数の動詞を複合的に組み合わせて構成される補助動詞構造がある。次項では、こうした補助動詞構造について概観する。

3.2.2. 補助動詞構造

本節では複数の動詞が複合的に用いられる、いわゆる補助動詞構造についてまとめる。

3.2.2.1. ではダグール語における補助動詞構造について定義づけをし、次の 3.2.2.2. では具体的なダグール語における補助動詞構造についてまとめる。3.2.2.3. ではその他の補助動詞構造のような構造についてまとめる。

3.2.2.1. 補助動詞構造とは

本論文におけるダグール語の補助動詞構造に関して、モンゴル語の補助動詞構造を扱った斯欽格日樂 (2015) による定義づけを参考として次の 3-2 のように規定する。

(3-2) 補助動詞構造

2つ以上の動詞が形式上複合的に用いられており、先行する動詞 (本動詞) が語彙的な意味と名詞項を支配する機能を保持し、後続する動詞 (補助動詞) が補足的な意味を加えるという構造

そしてダグール語における典型的な補助動詞構造は、二つの動詞の組み合わせによって例 3-3 のように進行相をはじめとしたアスペクトの意味を表す構造や、例 3-4 のように「～できる」という意味を表す構造などが想定される。

(3-3) *sonsej̆aabei*

sonse-j̆+aa-bei
to.hear-SIM+to.be-NPST
「聞いている」

(3-4) *husgulj̆ej̆ šadbei*

husgulj̆-j̆ šad-bei
to.speak-SIM to.be.able-NPST
「話せる」

世界の言語の補助動詞構造について記述した Anderson (2006: 4) では、「補助動詞」の「補助」(auxiliaries) について「動詞連続や節連結、動詞+補文節の組み合わせや時制・相・法の接辞を含む広い意味での形式・機能の連続体において、それぞれが独立せずに単独の節を成す狭い意味での形式・機能の組み合わせであり、それ自体離散 (discrete) していないもの」であると言う。先の 3-2 では、組み合わせさった二つの動詞が形式上複合的な形をとること、そして一方の動詞が文法的意味を担うことで、「狭い意味での形式・機能の組み合わせ」という構造が形成されるものとする。またこの構造では語彙的な動詞が文法化し補助動詞となる。補助動詞が語順的には本動詞に後続する点は、ダグール語における接辞

が基本的に主要部に後続する接尾辞型の言語であることと並行的な現象に見える。

ダグール語における典型的な動詞連続を表す形式、例えば並列の -j, 先行の -AAr を伴う動詞は二つの動詞節が単純な継起関係にあることを表すものとして頻繁に用いられるものである。しかし並列の -j が現れたとしても、全てを補助動詞構造と呼ぶことはできない。次の 3-5 のような構造は単純に二つの動作の継起関係を表すものであると考える。

(3-5) *sonsej gaigbei.*

sons-j gaig-bei
to.hear-SIM to.be.surprised-NPST
「聞いて驚く」

3-2 で形式上複合的としたのは、必ずしも複合であると断じがたいものだからである。個々の現象について詳細は 3.1.2.2. にて記述するが、たとえば音的に両要素の融合度が高い例 3-3 の -j+aa_ も、その間に =l (=EMP) などの要素を挿入することが可能であることから、厳密には複合であるとは言えない。その他の補助動詞構造も、否定の ul という語を本動詞と補助動詞の間に置くことが可能である (3-6)。

(3-6) *usguljej ul šaden*

usgulj-j ul šad-n
to.speak-SIM NEG to.be.able-NPSTII
「話せない」

山越 (2005: 103) はモンゴル語族のシネヘン・ブリヤート語について文法的にひとまとまりを成す複合形式と、音韻的に1語であると言える複合語を区別し、複合形式でありながら1語を成さない複合体を認めている。ダグール語の (3-2, 3-3) が成す「ひとまとまり」の構造は、山越 (2005: 135) が言う「非常にゆるやかな複合体を形成している」にあたると言える。

先行する動詞が語彙的な意味と名詞項を支配する機能を保持し、後続する動詞が文法的な意味を担うという特徴は比較的明解であり、例 3-4 の šad_ 「できる」は本来有していた目的語項を支配する力を、この構造において失っている (3.2.2.2. の◆「～できる」「～できない」「～してもよい」を表す補助動詞 において詳述)。補助動詞構造では、補足的な意味を表す補助動詞を除いても (本動詞の動詞接辞を調整すれば) 文は成立するが、本動詞を除くと文が成立しない。しかし例 (3-3) の aa_ は、本来の用法が自動詞として主語項のみを支配するものであるとするならば、この補助動詞構造において主語項を失っているかどうかは判別しにくい。また、次のように補助動詞構造によって項を追加することになる補助動詞構造も認められる。

(3-7) *sanesen huudee hiiĵ ukenbi.*

san'-sen huu-d-ee hii-j uk-n=bi
to.miss-PERF person-DAT-REFL to.do-SIM to.give-NPSTII=1SG

「懐かしい人に (手紙を) 書いてやるんだ」(恩和巴图他 (編) 1988:244)

これは *uk_* 「与える」を補助動詞とする補助動詞構造 (下線部) において、受益者項 *huudee* 「人に」(二重下線部) が追加されたものと考えることができる。

以上のように個別の例を見ると、先に述べた定義には問題もあるが、補助動詞構造と呼べそうな構造の凡その外枠を決めることはできそうである。こうした表現では先行する動詞が取る動詞接辞が限られ、主として単純な時間的關係を現す *-j* (並列)、*-AAr* ~ *-AA* (先行)、*-n* (随伴) がもっぱら現れるといった制限があることを指摘できる。

次節 3.2.2.2. ではダグール語における補助動詞構造の具体的な例を掲載し、個別に考察する。補助動詞構造を含む述語の複合的な構造に関する問題は、3.4. において再度議論する。さらに 3.2.2.3. では、補助動詞構造に似るが本項で見たものとは構造が異なるものについて述べる。

3.2.2.2. ダグール語の補助動詞

恩和巴图 (編著) (1988) はダグール語の補助動詞として *aa_* 「ある」、*bai_* 「立つ」、*tali_* 「置く」、*aw_* 「取る」、*uk_* 「与える」、*ir_* 「来る」、*ič_* 「行く」、*yaw_* 「行く、歩く」の 8 つを特に取り上げ、この他に補助動詞的に用いられるものとしてさらに *bar_* 「終わる」、*eurkee_* 「始める」、*uj_* 「見る」、*gar_* 「出る」、*yad_* 「できない」、*bol_* 「なる」、*ol_* 「得る」を挙げている (鈎括弧内は本動詞としての代表的な意味を表す)。山田 (2011) ではこれに *ekil_* 「始める」(ハイラル)、*šad_* 「できる」を加えた。さらに *dulce_* 「過ぎる」についても補助動詞的な用法があることをチチハルで確認している。以下ではこれらの補助動詞について個々に様相を概観する。

◆進行相アスペクト的な意味を表す補助動詞構造

aa_ 「ある」が補助動詞として用いられると、「～している」という進行相の意味を表す補助動詞構造を成し (3-3 再掲)、その使用頻度は極めて高い。なお存在動詞 *aa_* 「ある」は、本動詞としては次の例 3-8 下線部のように用いられる。

(3-3 再掲) *sonseĵaabei*

sonse-j+aa-bei
to.hear-SIM+to.be-NPST
「聞いている」

(3-8) *ter giaad harben dolootii boltlaa aasen.*

ter giaa-d harben doloo-tii bol-tl-oo aa-sen
that town-DAT ten seven-PROP to.become-TERM-REFL to.be-PERF

「私は街に17 歳になるまでいました」(恩和巴图等 (編) 1985: 14)

3-3 に見られる構造では、本動詞と補助動詞の両形態素の融合の度合いが強く *-j+aa_* と記述した。両形態素の間に *=l (=EMP)*, *ul (NEG)* などの要素を挿入することが可能であることから、複合と言えるほどの融合度でないとして、このことを反映した表記として *+* を用いた。

当該形式を複合 (*-j+aa_* とするなど) と見て、融合度の低い *-j aa_* あるいは *=l (=EMP)* を挿入した *-j=l aa_* とは別形式であるとする可能性もありうるが、ここでは意味や機能などの面で両形式を区別するほどの根拠が見いだせないため、別形式であると区別することはない。なお、恩和巴图 (編著) (1988) の記述では *-j aa_* 両形態素を完全に融合したものであるかのように *-jaa_* という単独の形態素として記述しているが、母音はじまりの補助動詞 (*uk_* 「与える」、*uj_* 「見る」など、後述) についてはいずれも先行する同時副動詞接辞 *-j* と融合すると見ているようである。

aa_ と並んで進行相アスペクトを表す補助動詞として、*bai_* 「立つ」がある。モンゴル語では同源の形式 *bai_* 「ある」がダグール語の *aa_* のような意味機能 (本動詞の「ある」から助動詞の用法まで) を担っていると言えるが、ダグール語では中世モンゴル語の存在動詞 *aa_* を保持し、同時に中世モンゴル語の *bai_* 「立つ」も意義をおそらくそのままに保持していると言える。この語も *aa_* と同様に「～している」のようなアスペクト的意味を成すとされるが、筆者は実例に出会っていない。恩和巴图 (編著) (1988: 399) によれば、*bai_* による補助動詞構造は必ずいわゆる副動詞接辞を取り、主文の述語にならないという。

(3-9) *goij baigaar čuagd yawssen.*

goi-j bai-gaar čuag-d yaw-sen
to.request-SIM to.stand-ANT army-DAT to.go-PERF

「ずっと頼んで、兵隊になった」(恩和巴图 (編著) 1988: 399)

例 3-9 は *goi_* 「頼む」という動作が進行継続していたことを表すが、進行相というよりは長時間の継続という意味を表すものと考えられる。また *bai_* 「立つ」という主動詞の意味機能はこの構造において失われている。*gar_* 「出る」も、補助動詞として用いられると長時間の継続を表す例がある。

(3-10) *udrii tiab geridee sawoo garsen.*

udr-ii tiab geri-d-ee saw-oo gar-sen
day-GA all.day.long home-DAT-REFL to.sit-ANTI to.go.out-PERF
「一日家で座っていた」(恩和巴图 (编著) 1988: 403)

◆完了相の意味を表す補助動詞構造

tali_「置く」、aw_「取る」は補助動詞として用いられると、「～してしまう」という完了相アスペクト的な意味を成す (3-11)。恩和巴图 (编著) (1988: 387) の挙げる用例では、本動詞は全て先行 -AAr ~ -AA を取る。

(3-11) *bii idee taliyaa*

bii id-ee tali-yaa
1SG to.eat-ANTI to.put-VOL
「私が食べてしまおう」(恩和巴图 (编著) 1988: 387)

なお、派生接辞によるアスペクト形式として接辞 -jik_ が類似の意味を表し、この補助動詞との使い分けが問題になる。-jik_ と tali_ などの補助動詞が共起するような用例は得られていないが、こうした非分析的な形式との使い分けは不明である。この例 3-12 では先行する主動詞の動詞接辞に同時 -j が用いられている。

(3-12) *dansii kaartii nemj tali*

dans-ii kaart-ii nem-j tali-ø
form-GA card-GA to.add-SIM to.put-IMP
「登録カードに書き込んでください」(锡莉・布日古德 2014: 125)

◆その他のアスペクトの意味を表す補助動詞

その他のアスペクト的な意味を表す補助動詞表現として、「～し終える」「～し始める」「～したことがある」がある。この他に移動動詞を補助動詞として用いた場合にもアスペクト的な意味で用いる用法があるが、これについては次項で扱う。

bar_「終わる」は補助動詞として用いられると、「～し終える」という意味を表す。動作の完了という局面を表すという点で、上述の完了相アスペクト的な意味を表す補助動詞との異なりが問題となる。bar_ は話者の意識として動作が完全に終了しており、次に生じる動作と分断されていることを表す。それを端的に表す例として、補助動詞としての bar_ は、ul bar(-n) の形式で「～するに留まらず」「～するばかりでなく」の意味で用いられ、bar-j, bar-aar などの形式で「～したら」「～してから」の意味で極めてよく用いられる。チ

チハルにて得られたデータでは *tii baraa, tii araa* などの形で「それから」という接続詞的に用いられるが、これは *bar_* が本動詞としても似たような用法を持つことを示す。

(3-13) *hoyooloo baisj ul baren degiisel aulii doterini učiiken gurees taulie herem yekee hoo gačerj barj hauyaaraa hoo baisjaawei.*

hoyool-oo	bais-j	<u>ul bar-n</u>	degii-sel	aul-ii	doter-ini
by.two-REFL	to.rejoice-SIM	neg to.finish-ASS	bird-PL	mountain-GA	inside-3SG
učiiken	gurees	taulie herem	yekee	hoo	<u>gačer-j</u> <u>bar-j</u>
small	animal	rabbit squirrel	something	all	to.come.out-SIM to.finish-SIM
hauyaar-aa	hoo	bais-j+aa-wei			
by.everyone-REFL	all	to.rejoice-SIM+to.be-NPST			

「二人で喜ぶばかりでなく、鳥たちや山の中の小動物、ウサギやリスやなんかがみんな出てきてそれから皆で喜び合った」(山田 2018: 199)

eurkee_, *ekil_* 「始める」は補助動詞として用いられると、それぞれ「～し始める」の意を表す。なお、*ekil_* はハイラル方言に見られる語形である。

(3-14) *uwel bolguotoor čas warj eurkeesen.*

uwel	bol-guotoor	čas	<u>war-j</u>	<u>eurkee-sen</u>
winter	to.become-SUC	snow	to.enter-SIM	to.start-PERF

「冬になると雪が降り始めた」(恩和巴图 (编著) 1988: 367)

(3-15) *šii udeš ert yeekeeyees weilee kiij eurkeesenšie?*

šii	udeš	ert	yeekee-yees	weil-ee	<u>kii-j</u>	<u>eurkee-sen=šie</u>
2SG	yesterday	morning	when-ABL	job-REFL	to.do-SIM	to.start-PERF=2SG.Q

「君は昨日の朝何時に仕事を始めたのだ」(塩谷 1990: 75)

dulee_ 「過ぎる」は、ハイラル・ダゲール語において補助動詞として用いられ、「～したことがある」の意を表す。これは漢語の「过」(「過ぎる、～したことがある」)の翻訳借用であろう (3-16, 例文中の述語人称は脱落している)。

(3-16) *bii beejen-d ičj duleesen.*

bii	beejen-d	<u>ič-j</u>	<u>dulee-sen</u>
1SG	Pekin-DAT	to.go-SIM	to.pass-PERF

「私は北京に行ったことがある」DS

◆移動動詞由来の補助動詞

ir_ 「来る」、ič_ 「行く」、yaw_ 「行く、歩く」は、本動詞としては移動を表す移動動詞であるが、補助動詞としては動作の継続や状態の変化を表す用法 (e.g. 「暑くなってくる」) や動作の方向を表す用法 (e.g. 「出てくる」) がある。

動作の継続や状態の変化を表す用法の例は次の通り (3-17, 3-18, 3-19)。

(3-17) *baitelsaar irsen ĵakaa martsenšie?*

baitel-saar ir-sen ĵak-aa mart-sen=šie
to.use-PROG to.come-PERF thing-REFL to.forget-PERF=2SG.Q

「(ずっと) 使ってきたものを忘れたんですか」(恩和巴图 (编著) 1988: 400)

(3-18) *orie bolguotoor kuitereer ičsen.*

orie bol-guotoor kuitereer ič-sen
late to.become-SUC to.get.colder-ANT to.go-PERF

「遅くなるにつれて寒くなっていった」(恩和巴图 (编著) 1988: 401)

(3-19) *tenger harengui boloor yawĵaabei.*

tenger harengui bol-oor yaw-ĵ +aa-bei
sky dark to.become-ANT to.walk-SIM+to.be-NPST

「空が暗くなっていっている」(恩和巴图 (编著) 1988: 402)

「出る」「落ちる」などのような動作主の移動を含意する動詞を本動詞に取るとき、話者の視点に近づいている (ir_ 「来る」) か、話者の視点から遠ざかっている (ič_, yaw_ 「行く」) かという直示の意味を加える用法がある (漢語の方向補語の用法に似る。3-20, 3-21)。

(3-20) a. gar-aar ir_
 to.go.out-ANT to.come
 「出てくる」

b. wan-ĵ ič_
 to.fall-SIM to.go
 「落ちていく」

c. wan-aar yaw_
 to.fall-ANT to.walk
 「落ちていく」

(3-21) *elee gaĵraar horilčej irsen oler.*

elee gaĵer-aar horilč-ĵ ir-sen oler
each place-AI to.gather-SIM to.come-PERF people

「各地から集まった人々」(恩和巴图 (编著) 1988: 299)

◆「～できる」「～できない」「～してもよい」を表す補助動詞

šad_「できる」は本動詞としても補助動詞としても「できる」の意味で用いられる。次の例 3-22 ではまず補助動詞としての用法が現れ、疑問に対する返答として本動詞の現れない形で用いられている。

(3-22) a. *nugeršeni niahnaar usgulfej šadweiyee?*

nugr-šeni niahn-aar usgulj-j šad-wei=yee
 wife-2SG mandarin-INS to.speak-SIM to.be.able-NPST=Q

b. *ter ul šaden. ter nekel maanii endii usgii šadwei.*

ter ul šad-n ter nek=l maanii end-ii usg-ii
 that NEG to.be.able-NPSTII that one=EMP 1PL.GA here-GA language-GA
šad-wei
 to.be.able-NPST

「奥さんは漢語が話せるんですか」

「できません。彼女はただ私たちの言葉しかできません」(塩谷 1990: 50)

「できない」にあたる表現としては上記 šad_ の否定表現 *ul šad_* がよく用いられるが、*yad_* 「できない」という語もまれに用いられる (3-23)。

(3-23) *yuguu barj yadebšie, aagaasaa aatgei.*

yuguu bar-j yad-b=šie aa-gaas-aa aa-tgei
 why to.finish-SIM not.to.be.able-NPST=2SG.Q to.be-COND-REFL to.be-PERM

「何で終わらせられないの？あるならあるでいいじゃないか」

(恩和巴图 (编著) 1988: 403)

bol_ 「なる」、*ol_* 「得る」は、ともに「～してもよい」の意味で用いられる。一人称や二人称に対する許可であっても、この補助動詞用法では述語人称が付されない (三人称であるか、あるいは一般称であると解釈される。4.1.2. でもこの問題を扱う)。

(3-24) *gargii taawnaas enčkeen ali uderč bur ičej bolwei.*

gareg-ii taawen-aas enčkeen ali uder=č bur ič-j bol-wei
 planet-GA five-ABL other which day=also every to.go-SIM to.become-NPST

「金曜日以外ならいつでも行ってよい」(塩谷 1990: 51)

◆その他

uj_ 「見る」は補助動詞として「～してみる」という試みの意味が付与される。

(3-25) *šii ačaa-yaas-aa hasoo-ǰ uǰ kenee.*

šii ačaa-yaas-aa hasoo-ǰ uǰ-ø=kenee

2SG father-ABL-REFL to.ask-SIM to.see-IMP=SFP

「父親に聞いてみろよ」(恩和巴图 (编著) 1988: 402)

uk_「与える」は補助動詞として用いられ、日本語の「～してやる」「～してくれる」に当たる表現を成し、行為に受益者がいることを含意する。

(3-26) *henii čii irgui tall buu neeǰuku-tu!*

hen-ii=čii ir-gu-ii tall buu nee-ǰ+uku-tu

who-GA= ever to.come-FUT-GA although PROH to.open-SIM+to.give-IMP.PL

「誰が来ても戸を開けてやってはいけない」(恩和巴图 (编著) 1988: 446)

3.2.2.3. 補助動詞構造のような表現

ここでは補助動詞構造に類似し、複数の動詞が複合的に用いられるが、前節で述べたものとは構成要素や構造が異なるものを挙げる。具体的には、補助動詞がコピュラと呼ぶべきものである構造と、補助動詞が引用動詞と呼ぶべきものである構造がある。

恩和巴图 (编著) (1988: 397) はダグール語の補助動詞について「他の語を補助し色々な文法的な意味を表す動詞」であるとし、名詞類と補助動詞 *aa_* または *bol_* の組み合わせによる構造をも補助動詞構造として扱っている。名詞類を補語として取る *aa_* や *bol_* は、名詞類述語を補うコピュラと呼ぶべきもので、本来の動詞意味を失っている点で補助動詞的であると言える。しかし *aa_* が名詞類述語を伴う例については 3.3. 名詞類述語において扱うべきものであると見て、議論を 3.2. に譲ることとする。

動詞接辞 *-gu*, *-sen* を取る動詞の形動詞形は名詞類的な性質を有することから (cf. 2.2.2.), 名詞類述語と同様にコピュラ *aa_* または *bol_* を後続させることができる。この構造では動詞が複合的に用いられており、補助動詞構造のような表現であると言える。例えば *-gu aa_* という構造は、次の3-27に見るように仮定条件の帰結節でこの形式が用いられる。*aa_* が取る動詞接辞により、「～することになっている」「～することになっていた」などと訳すことができる表現である。

(3-27) *kerwel huar ul war-gu-d aa-gaas-ini, bii ordoon jawes geugleečgu aasenbie.*

kerwel huar ul war-gu-d aa-gaas-ini, bii ordoon jawes
 if rain NEG to.enter-FUT-DAT to.be-COND-3SG 1SG originally fish
geugleeč-gu aa-sen=bie
 to.go.to.fish-FUT to.be-PERF=1SG

「もし雨が降らなかったら私はもともと魚を釣りに行くつもりだった」

(塩谷 1990: 85)

el_ (チチハルで hel_, ハイラルで gel_) 「と言う」は、文のようなまとまりを支配し、発話や思考の内容を引用する、引用動詞と呼びうる動詞である。この動詞の被支配部末尾に、動詞の非過去が現れる -bei el_ や動詞の意志が現れる -yaa el_ は、固定の表現として「～しようと言う」から転じ「～しようとする」「～するつもりだ」の意味で用いられる。非過去も意志も被支配部に現れうるあらゆる形式の一部であることを思うと、必ずしも積極的にこの組み合わせ全てを補助動詞構造と呼ぶ根拠はない。

しかし「～しようとする」「～するつもりだ」の意味で用いられる場合には、次のように本動詞に述語人称が現れず、引用動詞側 (次の例では引用動詞を本動詞とする補助動詞側) に述部全体の主語と照応した述語人称が現れる。このことから、こうした構造も補助動詞構造のように2つ以上の動詞が複合語的に用いられていると言える。

(3-28) *baa buni yawbei elj aawaa.*

baa buni yaw-bei el-j aa-waa
 1PL.EXCL tomorrow to.walk-NPST to.say-SIM to.be-NPST.1PL.EXCL

「私たちは明日出発するつもりだ」(恩和巴图 (编著) 1988: 396)

3.3. 名詞類述語の概要

本節ではまず 3.3.1. において名詞類述語とはどのようなものであるのかまとめ、次いで 3.3.2. で名詞類述語が表す意味についてまとめる。

3.3.1. 名詞類述語とは

1.4.2. で扱ったように、ダグール語における名詞類とは動詞以外の語類のうち名詞接辞を付することが可能なものである。意味によるグルーピングは難しい面もあるが、名詞接辞を付することができない不変化詞類と比べると、文法的というより語彙的な意味を有する語の集合である。こうした名詞類が述語となると、主語について同定したり、属性や性質を表す名詞類述語文となる。本節で扱うのは、こうした名詞類述語である。

「A は B である」という意味を表す構文はモンゴル語族において一般に “A B” というように名詞類を並べることで成される。これはより厳密に言えば次の (3-29) のような事実を述べたものである。

- (3-29) ① A (名詞述語文主語) B (名詞述語文補語) いずれの項も格接辞が付されない
② テンスなどが無標の場合、コピュラ動詞は用いられない

これらはモンゴル諸語の大体において共通した特徴といえ、ダグール語も例外ではない。

①については格接辞が付されないのみで、裸の形で現れなければならないという意味ではない。いずれの項も人称所属を付して現れうるが、両方に付されるということはなく、また再帰が付されることはない。例 3-30 a, b を参照されたい。

(3-30) a. *ter kuu ečegmeni.*

ter kuu ečeg=meni
that person father=1SG
「あの人は私の父です」 DS

b. *meemeešin seb yee.*

meemee=šin seb=yee
mother=2SG teacher=Q
「あなたのお母さんは先生ですか」 DS

②に関し、ある条件下において存在動詞がコピュラ動詞として用いられることがある。テンスやアスペクトの対立の他、きれつづきといった節のタイプの意味を付与したい場合に用いられる。aa_ が非過去の無標の形でコピュラとして用いられるのは稀だが、次の 3-31 のように感嘆文であったり、普遍の真理などを述べたりする際には使用されるようである。

(3-31) *yamer aapkaatii larč aabei.*

yamer aapkaat-ii larč aa-bei
 how young.yusu.tree(distylium racemosum)-GA leaf to.be-NPST
 「なんという若い柞木 (ユスノキ) の葉だ」 (恩和巴图等 (編) 1988: 302)

このコピュラは、次の 3-32 のように過去の形式であったり、3-33 のように進行相の形式を取ったりした形で現れやすい。なお進行相形式が用いられると一時的な状態を表し、用いない無標の場合は、一般的な事象を表す。

(3-32) *tednii neuĵ irgu erend bii ušken aasenbi.*

tedn-ii neu-ĵ ir-gu eren-d bii ušken aa-sen=bi
 they-GA to.move-SIM to.come-FUT time-DAT 1SG small to.be-PERF=1SG
 「彼らが引っ越してきたとき、私は小さかった」 (恩和巴图等 (編) 1985: 15)

(3-33) *šii ul dialletenšii, eren bas erd aaĵaabei.*

šii ul dialle-ten=šii eren bas erd aa-ĵ+aa-bei
 2SG NEG to.be.late-PERF=2SG time yet early to.be-SIM+to.be-NPST
 「お前は遅れていないよ、時間はまだ早い」 (恩和巴图等 (編) 1985: 9)

3.3.2. 名詞類述語のタイプ

Dixon (2010: §14.) では世界の言語におけるいわゆる名詞述語について、コピュラ文と無動詞文に分け、その表し得る意味の階層を次の表 3-1 のように示している。

表 3-1: 名詞類述語文の表し得る意味 (Dixon (2010: 14.1) をもとに作成、例は筆者による)

	コピュラ文	無動詞文	例 (ダグール語)
A1 同定 Identity	○	○	bii nar-ii kuu=bi 1SG sun-GA person=1SG 「私は日本人だ」
A2 属性 Attribution	○	○	minii biau-meni guaidaan 1SG.GEN watch-1SG slow 「私の時計は遅れている」
A3 所有 Possession	○	○	ter nek debtlien biteg, šiniig=yee that one book book yours=Q 「あの一冊の本はお前のか」
A4 受益 Benefaction	○	○	
A5 所在 Location	○	×	
B 存在 Existence	○	×	

「A1 同定」は名詞類述語文の最も典型的な意味のタイプであり、主語を同定する具体物を表す語が述部となるものである。

「A2 属性」は A1 に比してより抽象的な語が述部となるものである。1.4.2.2. で確認したように、いわゆる「形容詞」的な性質を持つ語も名詞類に含まれ、同様に述部となることができる (3-34)。ダグール語の所有の意味を表す接辞 *-tii* は「～を持った、～のある」の意味を持つもので極めて高い生産性を有する (3-35, 下線部)。この *-tii* を有する語が述語となるケースについては、3.6. 存在と所有にて改めて扱う。

(3-34) *en' uder udešees kuiten.*

en' uder udeš-ees kuiten
this day yesterday-ABL cold

「今日は昨日より寒い」(恩和巴图等 (編) 1988: 53)

(3-35) *en' nek huu guarben kecutii.*

en' nek huu guarben kecu-tii
this one person three children-PROP

「この人には3人の子供がいる」(恩和巴图等 (編) 1988: 29)

こうした *-tii* が付された語を含むある種の形容詞的な語の中には、動詞述語や他の名詞類述語と組み合わせて用いられるものがある。こうした語では文法化が進み、より抽象的な意味機能を担うようになる。詳しくは次節 3.4. 述語複合体において扱うが、これ単独では純粋な述部 (の主要部) とは呼び難い、終助詞 (4.1.3. で扱う) 的なものである。例えば 3-36 の下線で示した *jak* 「もの」は文法化が進み、終助詞のようにふるまっている。

(3-36) *edee hoo barsen jak!*

edee hoo bar-sen jak
now all to.finish-PERF thing

「さあ全部終わったぞ」(恩和巴图等 (編) 1988: 435)

また、このうちとくに動詞述語と名詞類述語が組み合わさるものについては、人魚構文と呼び 3.4.2. で詳述する。

「A3 所有」は、名詞の属格形に派生接辞 *-g* を付した語「～のもの」が述部となることで表される (3-37 下線部)。なお、属格という名詞接辞の後ろ (外側) に派生接辞が付されるという語構成は例外的なものであるが、モンゴル語族の言語において「～のもの」という表現が属格＋派生接辞という構造で表されるのは一般的である。*-g* が付された「～のもの」という意味の語はその後ろに名詞接辞を付することができる点で、やはり名詞類に属する語である。

(3-37) *ter biteg šiniig yee? bišen, miniig bišen šiniig ee.*

ter biteg šiniig=yee
 that book yours=Q
 bišen, miniig bišen šiniig=ee
 NEG mine NEG yours=SPF

「その本はあなたのですか」「いいえ、私ではなくあなたのです」(塩谷 1990: 49)

「A4 受益」の意味についてはダグール語では *tuald* という後置詞で表される (3-38 下線部) が、これを述部とするような用例は得られていない。モンゴル語では類似の 3-39 のような用例が多数検出されるが、これは標語という特殊な文体に観察されるものである。ダグール語においてもこの後置詞は名詞類に由来するものなので、同様に特殊な文体においては無動詞文においても成立する可能性がある。

(3-38) *neigen joren-ii buteej bailgaagui tuald kučelbiiyaa!*

neigen joren-ii buteej bailgaagui tuald kučelbii-yaa
 society principle-GA to.construct-SIM to.build-FUT-GA for to.effort-VOL

「社会主義建設のために頑張ろう」恩和巴图 (编著) (1988: 359)

(3-39) ハルハ・モンゴル語の例

malčin xün-ii sanaa setgel xün mal xojor-iin tölöö.
 herder person-GEN thought heart person livestock two-GEN for

「牧民の心は人と家畜のためだ」 D_namdag_negen_ekipajid_bolson_yavdal.txt

無動詞文では「A5 所在」と「B 存在」の意味を表さないという Dixon (2010) の記述通り、ダグール語ではこれらの意味を表すのに少なくとも「A (存在者) B (存在の場所)」「A (存在者)」といった形式は用いられない。テンスが過去である、アスペクトが進行であるなど意味的に有標であるならば、Dixon (2010) が述べる通り存在を表す自動詞 *aa_* が用いられる (3-40, 3-41)。こうした所在や存在については、3.6. 存在と所有 において述べることとする。

(3-40) *ter arben doloo boltloo hotend aasen.*

ter arben doloo bol-tl-oo hoten-d aa-sen
 that ten seven to.become-TERM-REFL town-DAT to.be-PERF

「彼は 17 歳になるまで街にいた」(塩谷 1990: 55)

(3-41) *šii haan' aajaaweišie?*

šii haan' aa-j+aa-wei=šie
 2SG where to.be-SIM+to.be-NPST=2SG.Q

「お前今どこにいるんだ」(塩谷 1990: 55)

3.4. 述語複合体

本節ではまず 3.4.1. において述語複合体とはどのようなものであるのか述べ、次いで 3.4.2. で動詞述語と名詞類述語が組み合わさる人魚構文についてまとめる。

3.4.1. 述語複合体とは

ダグール語の文を構成する述部は、ただ一つの語によってのみなるものではなく、むしろ複数の語が組み合わさり、全体として述部を成すものであると考える。3.2.2. において概観した複数の動詞が組み合わさる、補助動詞構造もこうした複合体の一端を担う。実際には動詞のみの組み合わせに留まらず、名詞類や不変化詞類をも巻き込んでより大きな複合体を成す。これを、ダグール語の述語複合体と呼ぶ。複合体は複数の語から成るが、基本的には次のような組み合わせを基本に据える。こうした基本構造に、不変化詞類も加えたものが述語複合体の全体を成す。

表 3-2: ダグール語の述語複合体の基本的な組み合わせ (動詞と名詞類による)

後続要素 先行要素	動詞	名詞類
動詞	補助動詞構造 (cf. 3.2.2.)	人魚構文 (3.4.2. にて詳述)
名詞類	コピュラ文 (cf. 3.3.1.)	終助詞的な語との組み合わせ (4.1.3.2. などで詳述)

◇動詞が先行要素となる組み合わせ

動詞-動詞 の組み合わせは、3.2.2. で見た補助動詞構造がその典型であるので、ここでは扱わない。その他に引用動詞が動詞述語に後続するものもこの組み合わせであるが、3.2.2.3. で触れたとおり、これも補助動詞的な表現としてひとまずここに含めることができる。

動詞-名詞類 という組み合わせについて、文法化したものについてはとくに人魚構文と呼び、次項 3.4.2. で詳細に扱う。次の 3-42 のように動詞と名詞類述語の間に修飾・被修飾の関係があるものについては、文法化し人魚構文たる前の段階のものも含まれると考えられるが、本論文においては十分な分析に至らなかった。このことについても、次項で簡単に触れる。

(3-42) *en' eweeyimeni baiteljaasen bulkuini.*

en' ewee-yi-meni baitel-j+aa-sen bulku-ini
this mother-GA-1SG to.use-SIM+to.be-PERF mirror-3SG

「これは母が使っていた鏡だ」(恩和巴图 (编著) 1988: 347)

◇名詞類-動詞の組み合わせ

名詞類-動詞 という組み合わせは、実際の言語使用において最も頻度の高いものであろう。この中には、目的語-動詞述語のような関係を成すものが大多数を占める。本論文においては、動詞の支配する各項については述部に含めない考え方を取ることから、こうした目的語-動詞述語の関係は述語複合体とみなさない。

動詞が支配しているとは言えない名詞項を直前に据える構造としては、コピュラ文がある。これは名詞類述語に対し、aa_, bol_ といった動詞が補助的に用いられるという構造をもつものである。これについては 3.2.1. で述べた。

◇名詞類-名詞類の組み合わせ

名詞類-名詞類 の組み合わせは、修飾語と被修飾語という意味関係の組み合わせと、後続の名詞類がより文法化し、終助詞的に用いられるようになったものとの組み合わせの 2 種類が考えられる。前者は名詞類述語としては頻出の形であると思われるが、これについては動詞-名詞類の組み合わせ (3-42) 同様に、述語複合体の議論においてとくに扱わない。名詞類の修飾・被修飾関係として、稿を改めて論じることとしたい。

後者については終助詞的な問題として、詳細は 4.1.3. で扱う。また、名詞類述語文の否定文についてもこの組み合わせによるが、これについては 3.4. 否定文において扱う。

◇述語複合体とは

表 3-2 に示したものの他に、不変化詞類との組み合わせがある。まず動詞前辞と動詞の組み合わせは述語複合体を成すものと考えられるが、2.3.3. ですでに扱った。また否定を表す語が動詞述語の前に置かれる組み合わせがあるが、これについては 3.5. 否定 において述べる。

実際の言語使用では、これらをさらに組み合わせた複雑な動詞複合体も形成しうる。また複合語のような語の組み合わせとは言えないが、両語の間に密接な関係が認められる組み合わせとして、いわゆる「慣用的な表現」(e.g. čulee tali_ 「休みを置く>休暇を取る」など) がある。これも、複合の度合により複合体を成すものとしてみなしうるが、本論文ではこうした慣用的表現について扱わない。

本論文で考える述語複合体は、凡そ次のようなものである。すなわち、動詞や名詞類に先行する要素としては否定を表す要素や動詞前辞 (cf. 2.4.) がある。動詞や名詞類は語彙的な意味を担うものに文法化したものが補助的に付されるという形で、動詞述語には補助動詞や人魚構文的な名詞類の語が、名詞類述語にはコピュラたる補助動詞が付され、それが複数連なりうる。これらに後続する要素として終助詞的な名詞類の語や、終助詞がある。

本節で考えるダゲール語の述語複合体の構造は、大枠においてアルタイ型の諸言語にも見られるものである。本論文における整理は、こうしたアルタイ型の諸言語の間の対照研究にも応用可能なモデルとなるだろう。

3.4.2. 人魚構文

動詞述語が支配する項などを維持したまま、名詞類述語に埋め込まれる形をとる構造を角田 (2011) の用語に倣い人魚構文と呼ぶ。ダグール語では、とくにハイラルにおいて人魚構文ないし疑似人魚構文がよく用いられるが、これは周辺のモンゴル語の影響によるものと思われる。

角田 (2011) は日本語において「[節] 名詞 だ」という構造を持ち、節は動詞述語文と同じ構造を持っているが文は名詞+コピュラで終わる次のような文を人魚構文と呼んでいる (3-43)。

(3-43) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。

[太郎は今本を読んでいる] ところだ。

[外では雨が降っている] 模様だ。

(角田 2011)

これらは構造上は連体修飾節が名詞を修飾した形式のように見えるが、日本語の例から統語上の振る舞いを見ると動詞述語文と同じであるという。次の 3-44 の例では、連体修飾節内の主語は主題化されず、ガ格とノ格の交代が見られるが、人魚構文では主節の主語のようにハで標示されていることを示したものである。

(3-44) a. [太郎の名古屋に行く] 予定は延期された (連体修飾節)

b. *[太郎の名古屋に行く] 予定だ

c. [太郎は名古屋に行く] 予定だ (人魚構文)

角田 (2011) によればこうした人魚構文はモンゴル語などを含むアジアの言語にのみ見られる珍しい現象であるという。

ダグール語においては、とくにハイラルで次のような語が人魚構文または疑似人魚構文の名詞部分として述語複合体の一部を担う。例とともに示す (3-45, 3-46, 3-47, 3-48)。

(3-45) duar-tie {preference-PROP} 「好きだ」

bii suni duandaar jagus batgu duartiebie.

bii suni duand-aar jagus bat-gu duar-tie=bie

1SG night middle-INS fish to.catch-FUT preference-PROP=1SG

「私は夜中に魚釣りするのが好きだ」(塩谷 1990: 73)

(3-46) kereg-tie {necessity-PROP} 「必要だ」

beyee sain bolgooyaa geleese, dangaa eegu keregtiebie.

bey-ee sain bolgoo-yaa gel-ees-ee, dang-aa ee-gu

body-REFL good to.make-VOL to.say-COND-REFL tabaco-REFL to.quit-FUT

kereg-tie=bie

necessity-PROP=1SG

「健康になりたいなら煙草をやめなければならない」(塩谷 1990: 67)

(3-47) sanaa-tii {thought-PROP} 「つもりだ」

bii nekend ičigu sanaatiibie.

bii nekend ič-gu sanaa-tii=bie

1SG together to.go-FUT thought-PROP=1SG

「私は一緒に行くつもりだ」(塩谷 1990: 80)

(3-48) maged {possible} 「かもしれない」

ter gertee harij aniej ul šadgu maged aa.

ter geri-t-ee hari-j anie-j ul šad-gu

that house-DAT-REFL to.return-SIM to.spend.the.New.Year-SIM NEG to.be.able-FUT

maged

possible

「彼は家に帰って新年を過ごせないかもしれない」

(塩谷 1990: 88 ※文末の aa は分析に現れない要素。4.1.3.7. 参照)

いずれも直前の動詞は、連体修飾可能な形動詞形 (cf. 2.2.) の未来 -gu を伴うものである。形動詞形の完了 -sen を伴う例は見いだせず未検証だが、maged については「過去の可能性」を表す用法として -sen maged がありうるかもしれない。また、(3-45)~(3-47) における名詞類の部分は -tii を伴う表現である。

これらはいずれも話者の主観的態度を表す。先行する動詞の動詞接辞さえ調整すれば後続する名詞類を削除しても話者の態度以外に変化なく文が成立するもので、この表現によってモダリティ的な意味が付与されていると考えることができる。

3-45 は「好む」という表現で、名詞類の与位格形を取って「～が好きだ」という表現をすることも可能である。この語は、名詞類を好意の対象とする場合には与位格を取る (3-49) のに対し、動詞述語と組み合わせる際には動詞述語に与位格接辞を付すことはしない。

(3-49) taa hulaandini duartii kawtaa?

taa hulaan-d-ini duar-tii kaw=taa

2PL red-DAT-3SG preference-PROP SFP=2PL

「赤いのが好きですか」(恩和巴图 (编著) 1988: 240)

こうした人魚構文の表現は先述の通りハイラルに多いが、ブトハにおいて見られる若干の例 (3-50, 3-51) も以下に挙げておく。

(3-50) *albii baitaa saiken akenbuugu giaantii.*

alb-ii bait-aa saiken akenbuu-gu giaan-tii
mission work-REFL well to.complete-FUT necessary-PROP

「任務はきちんと全うせねばならない」(恩和巴图 (编著) 1988: 417)

(3-51) *nek sarč yawgu booljoonwei.*

nek sar=č yaw-gu booljoon=wei
one month=also to.go-FUT certainty=NEG.EXIS

「一か月も行くのかもしれない」(恩和巴图 (编著) 1988: 417)

チチハルでは、*el-j san-j+aa-wei* {to.say-SIM to.think-SIM+to.be-NPST} 「～とおもっている」などのような動詞的表現、*kawoo* 「だろう」などのような終助詞表現がよく用いられ、人魚構文は避けられるのかもしれない。また「好む」という表現については、動詞 *taal* 「好む」が用いられる (3-52)。

(3-52) *bii šanĵauyii aidug taalebbei.*

bii šanĵau-ii aidug taal-bei=bi
1SG banana-GA very to.like-NPST=1SG

「私はバナナがとても好きだ」(風間・山田 2014)

3.5. 否定

本節では動詞述語と名詞類述語が混在する表現の例として、ダグール語の述部の否定表現について概観する。ダグール語において、動詞述語や名詞類述語の否定表現は接辞というよりも複合体によって成される。とくに動詞は、動詞の前に否定を表す語を据える前置否定と、後ろに据える後置否定という 2 種類の否定が存在する点に注目したい。後者は前節で述べた人魚構文の一種であると考ええる。

以下では 3.5.1. においてダグール語における述部の否定表現にどのような種類があるのか概観し、3.5.2. において動詞述語に見られる二種類の否定がいかに使い分けられるのか検討する。

3.5.1. 否定の種類

以下、3.5.1.1. において動詞述語、3.5.1.2. において名詞類述語の順に否定の種類について述べる。

3.5.1.1. 動詞述語の否定

ダグール語の動詞述語は、次章で述べる通り叙述と希求がある。否定表現は、否定を表す要素の有無のみによって表される「対称的」なものと、否定を表す要素以外の、例えば動詞接辞を変更する必要があるなどの「非対称的」なものがある。こうした対称性の観点から動詞述語の否定表現をまとめると、次の表のようになる。

表 3-3: 動詞述語の否定表現

	主節の動詞述語 (叙述)	主節の動詞述語 (希求)	非主節の動詞述語
否定表現のタイプ	前置否定または 後置否定	前置否定	前置否定
対称性	非対称的 ※過去時制においては 対称的	対称的	対称的 ※非対称的な表現も ある

主節・非主節といった節のタイプに関しては、次章で扱うこととする。本節ではそれぞれの否定表現の形について述べることとする。とくに、非対称的な否定表現を有する主節の動詞述語については 3.5.2. で詳しく見る。

◆主節の動詞述語 (叙述)

主節の動詞述語のうち叙述的なものについては、前置否定と後置否定の両タイプが用いられる。次の 3-53 では、前置否定の例を肯定・否定を並べて挙げる。

- (3-53) a. *oobei.*
 oo-bei
 to.drink-NPST
 「飲む」(肯定)
- b. *ul oon.*
 ul oo-n
 NEG to.drink-NPSTII
 「飲まない」(否定)

3-53 b. では動詞述語 oo_「飲む」に対して、否定を表す不変化詞類 ul が前置されている。これは前置否定の典型的な形式であり、モンゴル語もかつてはこのような形式を用いたものと考えられる。またダグール語以外においても、いくつかのモンゴル語族の言語ではこのような否定形式が残存している。

3-53 a. と b. の間で非対称となるのは、動詞接辞である。肯定の a. では -bei {-NPST} が用いられているが、否定では -n {NPSTII} が用いられており、これを逆にすることはできない。基本的に常に否定と共起する接辞 -n について「否定」とラベル付けすることも考えられるが (cf. 4.1.1.2.)、いずれにせよ -bei を用いることができなくなるという非対称性は解消されない。

次に後置否定の例を挙げる。次の例 3-54 でも、肯定・否定を並べて示す。

- (3-54) a. *oobei.*
 oo-bei
 to.drink-NPST
 「飲む」(肯定)
- b. *oogu uwei.*
 oo-gu uwei
 to.drink-FUT NEG.EXIS
 「飲まない」(否定)
- c. *oosen.*
 oo-sen
 to.drink-PERF
 「飲んだ」(肯定)
- d. *oosen uwei.*
 oo-sen uwei
 to.drink-PERF NEG.EXIS
 「飲まなかった」(否定)

ここで b. は動詞 *oo_* よりも後ろに否定を表す語 *uwei* が現れていることから、後置否定と見なす。a. では動詞語尾が *-bei* {-NPST} であるが、否定の b. では *-gu* {-FUT} となっている。これは動詞の後ろに *uwei* という名詞類の語を据える、人魚構文的な構造になっているものと考えられる (*uwei* は格接辞を付することが可能である。cf. 3-93)。ゆえに動詞述語は連体修飾可能な形式をとっているものと見られる。過去を表す *-sen* {-PERF} については、3-54 c. d. に見られるように *uwei* を伴わない肯定でも、*uwei* を伴う否定でも、接辞が変わらないため対称的であると言える。これは *-sen* が文末にも連体修飾節にも用いることができるためであろう。

ここでは、(3-53) b. と (3-54) b. の使い分けが問題となるが、これを含め叙述の動詞述語の否定に関しては次項 3.5.2. で再度取り上げることとする。

◆主節の動詞述語 (希求)

希求の動詞述語は基本的に主節にのみ用いられるものである。これを否定する表現としては前置否定のみで、*buu* {PROH} という語を動詞述語に前置することで表す。以下、3-55 は命令、3-56 は複数命令、3-57 は意志、3-58 は未来命令の例である。

- (3-55) a. *oo.*
 oo-ø
 to.drink-IMP
 「飲め」(肯定、命令)
- b. *buu oo.*
 buu oo-ø
 PROH to.drink-IMP
 「飲むな」(否定、禁止)
- (3-56) a. *ootu.*
 oo-tu
 to.drink-IMP.PL
 「(複数に対して) 飲め」(肯定、命令)
- b. *buu ootu.*
 buu oo-tu
 PROH to.drink-IMP.PL
 「(複数に対して) 飲むな」(否定、禁止)

- (3-57) a. *ooyaa.*
 oo-yaa
 to.drink-VOL
 「飲もう」(肯定、意志)
- b. *buu ooyaa.*
 buu oo-yaa
 PROH to.drink-VOL
 「飲むまい」(否定、意志)
- (3-58) a. *oogaanie.*
 oo-gaanie
 to.drink-FUT.IMP.2SG
 「飲め」(肯定、命令)
- b. *buu oogaanie.*
 buu oo-gaanie
 PROH to.drink-FUT.IMP.2SG
 「飲むな」(否定、禁止)

これらは、否定を表す語 *buu* の有無のみが異なり、その他動詞の形式は変わらない対称的な極性を見せる。

◆非主節の動詞述語

非主節において動詞述語は、基本的に前置否定を用い、対称的な極性を示す (3-59)。

(3-59) *ul medeese ul medenbi el.*

ul	med-ees-ee	ul	med-n=bi	el-ø
NEG	to.know-COND-REFL	NEG	to.know-NPSTII=1SG	to.say-IMP

「知らないなら、知らないと言え」(恩和巴图 (编著) 1988: 437)

(3-59) で「知らないなら」にあたる *ul medeese* は、*med-ees-ee* {to.know-COND-REFL} 「知っていれば」の否定にあたる。動詞 *med_* の前に *ul* が現れる前置否定で、対称的である。次の例 3-60 のように *uwei* を用いた後置否定も見られるが、これは非対称的な例にあたらない。

(3-60) *baraan jowsen uwei aatgei, bas antkaa enselsen.*

baraan jow-sen uwei aa-tgei bas antkaa ensel-sen
many to.be.bothered-PERF NEG.EXIS to.be-PERM also very to.be.sick-PERF
「あまり困らなかったとしても、またよく患う」(恩和巴图等 (編) 1988: 205)

3-60 では「困らなかったとしても」*jowsen uwei aatgei* とあり、*uwei* を動詞述語 *jowo_* に後続させる後置否定が用いられ、その後ろにコピュラ+動詞接辞 *-tgei* が現れるという構造になっている。これは一見非対称的な主節の後置否定に似るが、*-tgei* は基本的にこのような非主節に用いられる用法でコピュラ *aa_* にのみ接続し、動詞述語に連体修飾可能な形式 *-gu* または *-sen* を要求するものであることから、肯定 (*jowsen aatgei*) と否定の間で非対称が生じている例ではない。

3.5.1.2. 名詞類述語の否定

名詞類述語の否定表現として最も基本的なものは、名詞類述語の後ろに否定語 *bišen* を置くことによって表される (3-61)。この *bišen* という語自体も形容詞的にも用いられ動詞接辞を付すことのできない語であり、これは 3.4.1. 述語複合体で見た名詞類-名詞類の組み合わせの一つである。文法化し補助要素的に、名詞述語本体に後続するものとみなすことができる。この両要素の間には *=č* 「も」や *-meni* {-1SG} といった要素が挿入できるので、複合形式とは言えない。

(3-61) *en'seni hig bait bišen.*

en'-šeni hig bait bišen
this-2SG big event NEG

「これは大きなできごとではない」(恩和巴图 (編著) 1988: 439)

名詞類述語の否定表現について注意すべきは接辞 *-tii* 「～を持っている、～がある」が付いた語を述語とするものである。この語には、*-tii* の対義となる接辞 *-wei* < *uwei* {NEG.EXIS} があり、*-tii* を用いた構文とくに所有や存在を表す場合には対義となる接辞 *-wei* あるいは接語 *=uwei* を付した語を用いることで否定表現を成す。これについては、3.6. 存在と所有にて扱う。

3.5.2. 二種類の否定の使い分け

以下ではまず 3.5.2.1. で問題の概要をまとめ、3.5.2.2. では過去否定、3.5.2.3. では非過去否定の様相を整理する。3.5.2.4. では問題となる非過去の後置否定について考察する。

3.5.2.1. 概要

前項で見たように主節の叙事的な動詞述語は、肯定・否定で非対称的であり、かつ前置・後置を使い分ける必要がる。具体的な例は 3-53, 3-54 で示した通りだが、図式化すると次のようになる。

(3-62)	肯定	前置否定	後置否定
<u>非過去</u>	動詞-bei	ul 動詞-n	動詞-gu uwei 動詞-gu udien
<u>過去</u>	動詞-sen -IAA	es 動詞-sen es 動詞-IAA	動詞-sen uwei

3-62 を見ると、非過去と過去のそれぞれについて前置否定と後置否定という 2 タイプの否定があることが分かる。このうち網掛け部、過去の前置否定 *es* を用いた形式は出現が稀であることを示している。モダリティ的な意味で用いられる人魚構文には地域によって使用の頻度が違う可能性があるが (ハイラルに多くチチハルに少ない。cf. 3.4.2.)、過去時制においては人魚構文と同じ形をとる後置否定が普通に用いられる (3-63)。

(3-63) *en'ert beymini dembel amersen uwei.*

en' ert bey=mini dembel amer-sen uwei
this morning body=1SG very to.rest-PERF NEG.EXIS
「今朝は体があまり休まらなかった」(塩谷 1990: 67)

また、「まだ～していない」という表現では *-gu udien* という形式が用いられる (3-64)。3-62 では後置否定の過去と非過去の間に据えた。形式としては非過去 *-gu uwei* に似ており、現在の状態を否定するものであるが、表現上は「～したか」という過去の疑問に対する回答としても (過去の否定のように) 用いられるためである。

(3-64) *kuud eilgu udienbie.*

kuu-d eil-gu udien=bie
person-DAT to.marry-FUT not.yet=1SG
「人にまだ嫁いでいません」(塩谷 1990: 55)

頻度からすると非過去においては前置否定が、過去においては後置否定が用いられるというずれがある。こうした使用傾向の違いには、3-63 の「～しなかった」、3-64 「～していない」で後置否定が、非過去否定「～しない」で前置否定が用いられるというところから、確定した事実には後置否定が用いられるといった説明も可能かもしれない。

ここで問題になるのは、3-62 において文字囲みを付した、非過去で人魚構文型の後置否定 *-gu uwei* である (3-65)。

(3-65) *namd bei, tiimer aayieš bii čieyaa edee haan' talisnaa medgu uweibie.*

namd bei, tiimer aa-yieš bii čieyaa edee haan' tali-sen-aa
 1SG.DAT EXIS such.so to.be-CONC 1SG tea.leaf now where to.put-PERF-REFL
 med-gu uwei=bie
 to.know-FUT NEG.EXIS=1SG

「私には (茶葉が) ありますが、今どこに置いたかわかりません」(塩谷 1990)

以下では、3.5.2.2. において過去の否定表現、3.5.2.3. において非過去の否定表現について検討し、3.5.2.4. において非過去で後置否定 *-gu uwei* が現れる条件について考察する。

3.5.2.2. 過去否定

上述の通り、主節の過去時制の動詞述語では基本的に後置否定が用いられる。この点で、過去否定は形式上肯定 (*-sen*) と否定 (*-sen uwei*) が対称的である (3-66)。

(3-66) *bii hoirailčienii orie budaa idelgeeguer solisen aatgaič, ted irsen uwei.*

bii hoir ailčien-ii orie budaa idelgee-gu-eer
 1SG two guest-GA night meal to.let.eat-FUT-INS
sol-i-sen aa-tgai=č, ted ir-sen uwei
 to.invite-PERF to.be-PERM=also those to.come-PERF NEG.EXIS

「私は二人の客に夕飯を食べてもらおうと誘ったのだが、彼らは来なかった。」

(塩谷 1990: 76)

動詞述語が過去の形式であるときに前置否定が用いられるケースとしては、次の3つがある。まず一つは終助詞 *=dee* を伴う修辞疑問文である場合である (3-67)。いわゆる反語的なニュアンスを帯び (恩和巴图 (編著) 1988: 326)、話者の意図としては反語であるゆえに「否定」の意識が薄いものである。

(3-67) *ter dian'ilii badi ul ujsennaa dee.*

ter dian'il-ii badi ul uŋ-sen=naa=dee
 that movie-GA 1PL.INCL NEG to.see-PERF=1PL.INCL=SFP

「その映画は、私たち見たじゃないか」(恩和巴图 (編著) 1988: 327)

3-67 ではいわゆる反語の意味合いを帯び、話者の意図としては「否定」が含意されていないことから、確定した過去の否定である後置否定が用いられなかったものと考えられる。

次に、文のきれつづきの観点から、動詞が **-sen** という接辞を取っているものの文末ではない場合である (3-68)。

(3-68) *wantej ul šadsenč, bii kertejaaweibie.*

want-j ul šad-sen=č bii kert-j+aa-wei=bie
to.sleep-SIM NEG to.be.able-PERF=also 1SG to.lie-SIM+to.be-NPST=1SG
「私は眠れなくても横になる」 (塩谷 1990: 80)

ここでは =č「も」が用いられていることから、文が後続の文につながる事が明示される。しかし実際の言語使用ではこうした「も」が現れることなく、**-sen** や **-bei**, **-n** のついた動詞が文の切れ目を示していないように見える例がある。4.1.2.3. で見るように、同じく **-sen** や **-bei**, **-n** が用いられながら主文でないがゆえに、述語人称が現れないという現象も見られる。これらの現象を関連付けてさらに検証をする必要がある。またここでは非主文であるがゆえに他の非主文の動詞の形式と同様に前置否定が用いられるとの説明をしたが、後置否定が非主文に用いられない理由の説明にはなっていない。この点も、さらなる検討を要する。

もう一つのパターンとして、**-sen** ではない過去を表すもう一つの動詞接辞 **-IAA~lii** が用いられた場合には前置否定が用いられる (3-69)。

(3-69) *es sonsliidaa.*

es sons-lii=daa
NEG to.listen-PST=1PL.INCL
「我々は聞かなかった」 (恩和巴图 (编著) 1988: 438)

なお、**es** は非主文の動詞述語の否定においても、主文から見て時間的に前に完了している行為などを表す動詞述語に用いられることがある (3-70 a, b)。

(3-70) a. ... *kuaamtiiyi kuaarteini es ačeraasaa ul šadenš...*

kuaamtii-ii kuaart-ini es ačer-aas-aa ul šad-n=š
PN-GA sword-3SG NEG to.bring-COND-REFL NEG to.be.able-NPSTII=2SG
「お前はクアームティーの刀を持ってこなかったらできない」

(恩和巴图等 (编) 1988: 85)

b. *yeekiič kuiten aayieš ul ičiesmini ul bolen.*

yeekii=č kuiten aa-yieš ul ič-es=mini ul bol-n
 how=ever cold to.be-CONC neg to.go-COND=1SG NEG to.become-NPSTII
 「どんなに寒くても行かなければいけない」(塩谷 1990: 67)

3-70 a, b ではいずれも同じ動詞接辞である条件 -AAs を付した動詞述語が否定されているが、a. では *es*、b. では *ul* がそれぞれ現れている。これは主節述部の時制を基準として、より前であれば *es* が現れるものと説明できる。

3.5.2.3. 非過去否定

3.5.2.1. で述べた通り、主節が非過去時制であるとき基本的には前置否定が用いられる(3-71, 3-72)。この非過去時制の前置否定において注目すべきは、肯定と否定で動詞接辞が使い分けられる非対称的な形式をとる点である。これはモンゴル語族の言語の中でもダグール語でしか確認されない現象である。

(3-71) *in tereg kai šadwei.*

in tereg kai-ø(<-j) šad-wei
 3SG car to.drive-SIM to.be.able-NPST
 「彼は車が運転できる」(風間・山田 2014: 351)

(3-72) *ter bas weeree warhlaa emsej ul šaden.*

ter bas weer-ee warhl-aa ems-j ul šad-n
 that yet self-REFL clothes-REFL to.wear-SIM NEG to.be.able-NPSTII
 「彼はまだ自分で服を洗えない」(塩谷 1990: 83)

なお、この -n について「非過去否定」つまり否定の意味を含意するものとして考える見方もある (cf. Yu et al. 2010 では一部の -n に否定というグロスを振っている) が、-n が肯定文で用いられる例もある (cf. 4.1.1.2.) ことから、本論文では否定を含まない「非過去」と見なしている。-n が否定で用いられるのは -n の状態性などを表す性質によるものと考えられる。この点は、4.1.1.2. 叙述 において扱う。

非過去時制においては、(3-54) で見た通り後置否定の形式もある。これについてはとくに次項において使用される条件を検討する。

3.5.2.4. 非過去後置否定

非過去時制における後置否定の使用に関しては従来あまり記述がされていない。筆者の分析では -gu uwei という形式は現在進行アスペクトの否定において使用されるケースと、説明の文脈において使用されるケースがある。

3.2.2.2. で見たように、ダグール語では補助動詞構造によって進行アスペクトが表現される。この表現の否定は、本動詞の前に否定の *ul* を置く前置否定によって表現される (3-73)。この例では、否定されるのは本動詞のみであると判断され、補助動詞に付された動詞接辞 *-bei* は *-n* に置き換えられていない。

(3-73) *ter ugin kejee eil-gu-ee-mel ul mede-ǰ+aa-wei.*

ter	ugin	kejee	eil-gu-ee-mel	<u>ul</u>	<u>mede-ǰ+aa-wei</u>
that	girl	when	to.marry-FUT-REFL-REFLII	NEG	to.know-SIM+to.be-NPST

「その少女は自分がいつ結婚するか知らない」(塩谷 1990: 59)

他方、次のように進行アスペクトそのものが否定のスコープ内に入る場合、後置否定の形式が用いられるようである (3-74)。

(3-74) - *šii edee badaa kiiǰ+aa-bei=šie?*

- *badaa kiig uwei, badaa idǰ+aa-bie.*

šii	edee	badaa	kii-ǰ+aa-bei=šie
2SG	now	meal	to.make-SIM+to.be-NPST=2SG.Q
badaa	<u>kii-gu</u>	<u>uwei</u>	badaa id-ǰ+aa-b=bie
meal	to.make-FUT	NEG.EXIS	meal to.eat-SIM+to.be-NPST=1SG

「今料理していますか」「料理していない、食べているんだ」E

例 3-73 では補助動詞構造の本動詞のみが否定のスコープに入り、言わば [*ul mede-ǰ+aa-wei* 「[知らない]状態にいる」ととらえられるのに対し、例 3-74 では補助動詞構造全体が否定され「[作っている状態]ではない」と解釈できる。後者では *uwei* がコピュラたる *aa_* にとって代わり、*ul* が用いられない (*?kii-ǰ ul aa_ {to.do-SIM NEG to.be}*)。

(3-74) では、*aa_* が *uwei* にとって代わられているばかりでなく、動詞接辞も *-ǰ* が *-gu* に代わっている点も注意が必要である。これはすでに見てきた他の後置否定形式と同様に、人魚構文型の構造をとることで先行する動詞が *-gu*, *-sen* といった名詞類修飾可能な形式を要求されていると言える。なお、ハイラルでは類似の表現について *-ǰ* が保持される対称的な否定 (*aa-bei* が *uwei* に置き換わっただけ) となる例も見られる (3-75)。

(3-75) *šii bas minii udeš elsen usgiimeni medeř uweišie?*

šii bas minii udeš el-sen useg-ii-meni mede-ř
 2SG also 1SG.GEN yesterday to.say-PERF word-GA-1SG to.know-SIM
uwei=šie
 NEG.EXIS=2SG.Q

「私が昨日言った言葉を知らないのですか」(風間・山田 2014: 347 原文訳は「あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか」)

こうしたハイラル方言の例は否定表現を表す際に対称的であろうとする働きがあったものとも、*uwei* の文法化が進み先行する動詞に要求する形式が変化したものとも考えられる。

恩和巴图 (編著) (1988) ではこの後置否定の形式を「現在」と説明するが、これは上述のような進行アスペクトの否定において使用されることを捉えたものなのであろう。他方、これは「現在」のような時制でとらえると説明ができない例も多数見られる。例えば次の例 3-76 は後置否定が使用されているが、*buni* 「明日」という語が使用されていることから、未来の事象を表すものであると言える。また進行アスペクトとも解釈できない。

(3-76) *bii tend ul ičim, buni tanigu kuu iregu uwei.*

bii tend ul iči-m buni tani-gu kuu ir-gu
 1SG there NEG to.go-NPST2.1SG tomorrow to.know-FUT person to.come-FUT
uwei
 NEG.EXIS

「私はそこに行かない。明日は知ってる人が来ないんだ」E

3-76 の例は先行する文脈「そこに行かない」に対して「(なぜなら) 知っている人がいない (からだ)」と説明する文脈で後置否定が使用されている。次の例 3-77 では、似た説明の文脈において帰結節の方に後置否定が現れている。後置否定が現れるのが理由節と帰結節という異なりはあるが、いずれも説明の文脈であるということと言える。

(3-77) - *in yuguu ul iren?*

- *in eudiibe, tenn' iregu uwei.*

in yuguu ul ir-n
 3SG why NEG to.come-NPSTII
 in eudii-bei tenn' ir-gu uwei
 3SG to.be.sick-NPST so to.come-FUT NEG.EXIS

「彼はなぜ来ないんだ」「彼は病気だ、だから来ないんだ」E

説明の文脈で使われる形式として、日本語のノダ文が想起される。否定表現においても動詞述語が動詞述語のままである前置否定に対し、後置否定は否定の意味を持つ名詞類の語が使われる人魚構文である。動詞述語を名詞類述語に転換するという点で、述部が連体形を取りノによって名詞化され、コピュラであるダを伴う形式をとるノダ文と比定できる部分がありそうである。しかし 3-77 では帰結節に後置否定が現れていること、非過去では前置否定 (≡非ノダ文) が使われて過去では後置否定 (≡ノダ文) が使われるというギャップが説明しにくいこと、さらに日本語のノダ文が極めて高い頻度で使われるのに対し、ダグール語の主節が非過去の場合に後置否定は低い頻度で現れること、など相違点も多い。この点は今後さらなる研究が必要である。

3.6. 存在と所有

本節ではまず 3.6.1. においてダグール語の存在と所有の表現の概要について述べ、3.6.2. ~3.6.4. で存在と所有の表現に係る 3 要素、動詞 aa_、存在を表す語 bei、接辞-tii について分析する。3.6.5. ではこれらの否定表現をまとめて扱い、3.6.6. ではこれらの表現の使い分けについて見る。

3.6.1. 概要

本節では動詞述語と名詞類述語が混在する表現として、「～がある」という存在や所有を表す表現について検討する。ダグール語で存在や所有を表す表現は、次の 3 種類に分類できる。存在を表す動詞 aa_ を用いるもの、存在を表す名詞類 bei を用いるもの、存在物に接辞 -tii を付すことで表すものである。存在や所有という似通った意味合いの表現を、動詞述語によっても名詞類述語によっても表現することができるのである。3.3.2. でも触れたが、存在するものを表す名詞項と場所を表す項のみから成るような名詞類述語文では存在 (所在) を表すことは基本的にできない。

とくに接辞 -tii を用いた表現は、存在を表す表現ともなりうるが、「～を持っている」という所有を表す表現ともなりうるもので、存在と所有の間の差は明確に線引きできるものではない。このため、本節ではこれらをとくに区別することなく一括して扱っている。

3.6.2. 動詞 aa_

存在表現としてまず考えられるのが、日本語の「ある」に対応する動詞 aa を使うという方法である。しかし実際にはこの動詞は補助動詞的な用法で用いられることが多く、存在の意味ではあまり頻繁に用いられていない (山田 2011)。

aa_ は様々な動詞接辞を伴うことで多様なテンス・アスペクトが表現可能である。ただし補助動詞的に用いられ、あるいは接続詞のように働くものもあり、純粋な存在動詞として機能しているのかわかりにくい例も多い。

塩谷 (1990) が挙げる用例から、-wei (<-bei), -n, -wei を付して文を終止させているものについて用例数をまとめると、次の表 3-4 のようになる。なお、アスペクト的な要素 -j+aa_ に含まれる aa_ は数えない。

表 3-4: 動詞 aa_ が伴う動詞の形式

動詞 aa_ が取る形式		用例数
非過去	aa-wei, aa-n	0
非過去進行	aa-j+aa-wei	11
過去	aa-sen	20
過去進行	aa-j+aa-sen	0

ここから、非過去のようなテンス・アスペクト的に無標の表現では aa_ が用いられにくいことが分かる (-sen の用例数 143 に対し -j-aa-sen の用例数 6 であるので、過去進行の用例が 0 なのは単にもともと頻度が低いためである)。次の例 (3-78) のように、テンスが有標の過去形であったり、あるいはアスペクト的に有標な進行形であったりするものが典型である。

(3-78) *ter arben doloo boltloo hotend aasen.*

ter arben doloo bol-tl-oo hoten-d aa-sen
 that ten seven to.become-TERM-REFL town-DAT to.be-PERF
 「彼は 17 歳になるまで街にいた」(塩谷 1990:59)

恩和巴图等 (編) (1988) の『ダグール語読本』から進行相を含まない非過去の形式を探すと、実例は少ないながら次のような例が得られた。

(3-79) *tenger duar medwu huu baraan aagaas, sanaa medwu huu aabei.*

tenger duar med-gu huu baraan aa-gaas, sanaa med-gu
 sky preference to.know-FUT person many to.be-COND thought to.know-FUT
 huu aa-bei
 person to.be-NPST

「天の好みを知る者多ければ、気持ちが分かる者もいるものだ」

恩和巴图等 (編) (1988: 344)

この例 3-79 では aa-bei という非過去無標の存在動詞が使われているが、ここでは先行する文脈 (baraan aagaas 「たくさんいれば」) と対比されているために現れたものと考えられる。

表 3-4 で「進行」としたものは、3.2.2.1. で見た補助動詞構造であり、aa_ が補助動詞として用いられるものである。このような本動詞と補助動詞に同じ存在動詞が現れる構造はモンゴル語にもみられる。非過去時制においては進行の形式を (=現在であることが明示されている) とる形式のほうがよく見られる (3-80, 3-41 再掲)。

(3-80) *bii ailiiemel beid aaḡaaweibie.*

bii ail-ii emel bei-d aa-ḡ+aa-wei-bie
 1SG village-GA south direction-DAT to.be-SIM+to.be-NPST=1SG
 「私は村の南の方に住んでいます」(塩谷 1990: 59)

(3-41 再掲) *šii haan' aaʃaawešie.*

šii haan' aa-ʃ+aa-wei=šie

2SG where to.be-SIM+to.be-NPST=2SG.Q

「お前今どこにいるんだ」(塩谷 1990: 55)

ただし、この例 (3-41) の訳語が「住んでいる」となっているように、この場合の *aa_* を「暮らす」「生活する」といった動作動詞であると解釈できるならば、テイル形を取ることに違和感はない。次の例 3-81 に見るように、進行相の標示の有無は、観察者が確認中である存在か、あるいは恒常的・一般的な存在かの違いである。

(3-81) a. *tend kuu aawei.*

tend kuu aa-wei

there person to.be-NPST

「そこに (常に、いつも) 人がいます」DS

b. *tend kuu aaʃaawei.*

tend kuu aa-ʃ+aa-wei

there person to.be-SIM+to.be-NPST

「そこに (今のところ) 人がいます」DS

3.6.3. 存在を表わす語 *bei*

テンスやアスペクト的に無標の存在を示す語としては *bei* がある (3-82)。この語の用例は塩谷 (1990) に 22 例見られる。

(3-82) *baawaašni haan' bei?*

baawaa=šeni haan' bei

father=2SG where EXIS

「あなたのお父さんはどこにいますか」(塩谷 1990: 53)

これは「ある」といった意味を持ち、もっぱら述部に用いられる名詞類の語である。意味的には状態を示す抽象的なもので、形容詞的な語である。これに格接辞が付された例は見られないが、人称所属の付された形式は見られる (3-83)。

(3-83) *naad bei, tendee edee čieyaa haan beiyiini medgu uwei.*

naad bei tendee edee čieyaa haan bei-ini med-gu uwei=bi

1SG.DAT EXIS but now tea.leaf where EXIS-3SG to.know-FUT NEG=1SG

「私にはありますが、今どこに茶葉があるかわかりません」(恩和巴图等 (編) 1985: 7)

これは 3.3.2. 表 3-1 の A5 で Dixon (2010) が想定する「A (存在者) B (存在の場所)」型の名詞述語文とは異なるが、「A (存在者) B (存在)」という構造で B という存在を表す述語が存在の場所を表す項を取ることで表現される存在の構文であると言える。ただし、A1「同定」A2「属性」などの名詞述語文と異なり、テンスやアスペクト的に有標の場合にはコピュラ動詞として *aa_* が用いられ、*bei* は削除される。

3.6.4. 接辞-tii

-tii は名詞に接続し「～がある／～を所有する」といった意味を派生する接辞である。共同格接辞 -tii と同形であるが、ここではこれを同音意義の「派生接辞」と見なす。ただし、生産性は他の文法接辞と同じ程度に高い。

tostii utum 「バターを塗った (<油がある) ホットケーキ」、*kuguntii daačaan* 「綿入りの (<綿がある) オーバー」(塩谷 1990: 80, 82)など、同形式が名詞を修飾したり、複合語の前部要素になっているともいえる例もある。ここで扱うのは次の 3-84 のような述部になっている例である (述部に下線を付した)。

(3-84) *en' wairelčuu gaĵir baraan čolootie, tarie tarigud ĵubdel uwei.*

en' wairelčuu gaĵir baraan čoloo-tie tarie tari-gu-d ĵubdel uwei.
 this near place many stone-PROP crop to.plant-FUT-DAT suitable NEG.EXIS

「この近くはたくさん石があつて、作物を植えるのに適しません」(塩谷 1990: 71)

この接辞については 3.2. 名詞類述語でも触れたが、抽象的な語に付く例も多い。日本語訳でも「～がある／～を所有する」という意味になるものもあるが、必ずしもいわゆる存在や所有を表すとは限らない。例えば次の 3-85 のうち上のもの (「子供がいる」「森がある」など) は存在や所有を表していると言えるが、下のもの (「好きだ」<「好みがある」、
 「面倒だ」<「面倒がある」など) は存在や所有とは捉えられない。

(3-85) 存在／所有であると言いだそうな例

učiiker 「子供」 > učiikertii 「子供がいる」

šigee 「森」 > šigeetii 「森がある」

saten 「砂糖」 > satentii 「砂糖がある」

やや抽象的な例

joos 「お金」 > joostii 「お金がある」

eren 「時間」 > erentii 「時間がある／暇だ」

aĵel 「仕事」 > aĵeltii 「仕事がある」

抽象的で、存在らしくない例

taaw 「五」 > taawtii 「五歳」

largien 「面倒」 > largientii 「面倒だ」

duar 「好み」 > duartie 「好きだ」

(例はいずれも塩谷 1990 より)

なお、モンゴル語においてこの類似表現による存在と所有の違いが段階的なものであるということが橋本 (2010) で指摘されている。ダグール語においても状況は似通ったものであると考えられる。

3.6.5. その他の存在

Dixon (2010) が想定する「A (存在者) B (存在の場所)」型の名詞述語文に似た構造は、例外的な形で現れる。例えば次の 3-86 では存在を表す語が現れないが存在・所有の意味を表しているように見える。

(3-86) *geridee heden angeltaa? baa geridee doloo angelbaa.*

geri-d-ee heden angel=taa

house-DAT-REFL how.many family=2PL

baa geri-d-ee doloo angel=baa

1PL.EXCL house-DAT-REFL seven family=1PL.EXCL

「あなたたちは何人家族ですか」「私たちは七人家族です」(恩和巴图等 (編) 1985: 12)

ここでは「A (所有者) B (存在者 / 被所有者)」の構造で、コピュラ無しの名詞類述語文で存在あるいは所有を表している。主語は所有者「あなたたち」「私たち」であり、存在者 / 被所有者「家族」ではない。これは *angel* 「家族」という語が、家族の構成人数を表す特殊な形容詞的な語であると思われるかもしれない。

3.6.3. で挙げた例 3-82, 3-83 では、与位格でマークされた場所項や与位格の付されない疑問語 *haan* ‘どこ」を述部ならぬものであるととらえた。しかし次の新疆のデータより、場所項が述部になっているかに見える例が見られた (3-87)。

(3-87) *tednii gerin bas ailii hoo duandin.*

tednii	ger-in	bas	ail-ii	hoo	duand-in
3PL.GA	house-3SG	also	village-GA	all	middle-3SG

彼らの家は村のど真ん中だ (Yu et al. 2008: 202)

このような構文は他の方言で見いだされず、モンゴル語などにもみられない。新疆ダグール語は周辺のカザフ語からの影響で「A (存在物) B (場所項)」のような構造を獲得したもののように見受けられる。存在を表す語が省略された可能性などについても、さらに検証していく必要がある。

3.6.6. 存在表現の否定

ダグール語では存在表現の否定、不在「～がない」を表すには *uwei* を用いる。モンゴル語の場合は存在動詞 *bai*_ を否定形にしたり、2 種類の不在を表す語 (*ügüi*, *alga*) を用いたりする方法があり、存在表現と並びその否定表現も複数の選択肢がある。ダグール語の場合、存在動詞 *aa*_ の否定形が現れず、不在を表す語についても 1 種類のみ確認されることから、存在表現の否定としては肯定の 3 種類に対して 1 種類がこれに対応すると言える (3-88)。

(3-88) *ter hekidini heur uwei.*

ter	heki-d-ini	heur	uwei
that	head-DAT-3SG	horn	NEG

「その頭には角がない」(恩和巴图等 (編) 1985: 58)

この *uwei* という語は、3.5. 否定において動詞の否定形式にも使用されるものとして紹介したが、名詞類の語である。したがってその使われ方については *bei* にもっとも近いものと考えたいが、これについては次項で詳細に扱う。なお、進行や完了などのようにアスペクト的に有標である場合にはコピュラ *aa*_ を用い、*uwei aa*_ という表現を用いる。肯定の *bei* の場合は、コピュラ *aa*_ が用いられると *bei* を削除しなければならないが、*uwei* は当然ながら削除されない。

3.6.7. 存在表現の使い分け

本項では 3.6.2. ~ 3.6.4., 3.6.6. でみた否定を含む各表現の使い分けについて、とくに主語として取る項に注目して整理する。

山田 (2011) ではダグール語における 3 種類の存在表現を、主語・述語の観点から調査した。これによると、動詞 *aa_* と存在を表す語 *bei* は、存在物「あるもの、存在するもの」が主語に立つ (3-41 再掲, 3-89)。一方で接辞 *-tii* の付された形式は、その存在する場所や所有者が主語に立つ (3-90)。

(3-41 再掲) *šii haan' aaĵaaweišie?*

šii haan' aa-ĵ+aa-wei=šie
 2SG where to.be-SIM+to.be-NPST=2SG.Q
 「あなたは今どこにいますか」 (塩谷 1990: 59)

(3-89) *šamd čie yies bei yee?*

šamd čie yies bei=yee
 2SG.DAT tea leaf EXIS=Q
 「あなたは茶葉を持っていますか。」 (塩谷 1990: 53)

(3-90) *šii čie yiestiiš yee?*

šii čie yies-tii=š=yee
 2SG tea leaf-PROP=2SG=Q
 「あなたは茶葉を持っていますか。」 (塩谷 1990: 53)

ダグール語において述語人称と呼応する主語が、典型的には旧情報をマークするものである (4.1.3. も参照のこと) とすると、それぞれの表現形式は新情報として焦点が当たる部分に異なりがあることになる。すなわち、動詞 *aa_* と存在を表す語 *bei* では、存在する場所などの状態に重きが置かれ、接辞 *-tii* は存在そのものあるいは被所有物に重点が置かれているといえることができる。

しかし塩谷 (1990) では次のような指摘もある。主語として存在物をとる動詞 *aa_* と存在を表す語 *bei* について、主語が所有者を表すような例がある。先の 3-89 に対し、*šamd* 「あなたに」が削除されると次の 3-91 のように主語として二人称単数つまり所有者がマークされるという。これは「文法的には問題があるが、口語では一応適格文として認めうる」としている (塩谷 1990)。

(3-91) *čie yies beiš yee?*

čie yies bei=š=yee
tea leaf EXIS=2SG=Q
 「茶葉はありますか。」 (塩谷 1990: 54)

3-89 は直訳すれば「あなたに、茶葉がありますか」と解釈でき、述語たる *bei* 「ある」に対する主語は *čie yies* 「茶葉」である。3-91 では *šamd* 「あなたに」が削除されて、二人称

単数の述語人称が付された形になる。bei に述語人称が付され所有者が主語としてマークされる例は他に確認できないことから、所有者たる与位格項を欠くと、存在そのものに重点を置く -tii との類推から bei がむしろ存在するものをマークする接辞のように働くようになった、あるいは所有構造に近づいた例外的なものと考えられる (4.1.2.2. の例 4-24 で見る疑問文中の二人称単数の出現と同じものと説明できる可能性もある)。

さらに動詞 aa_ にも、次のような例が見られる。この例 3-92 では、aa_ の項として šii {2SG} と eren 「時間」があり、述語人称を見ると二人称単数が主語であるとわかる。

(3-92) *šii kerwel učeek ert bosgud aagaasaa ertii budaa idegu eren aasenšie.*

šii	kerwel	učeek	ert	bos-gu-d	aa-gaas-aa	ert-ii	budaa
2SG	if	little	early	to.get.up-FUT-DAT	to.be-COND-REFL	morning-GA	meal
id-gu	eren	aa-sen=šie					
to.eat-FUT	time	to.be-PERF=2SG					

「あなたがもし少し早く起きれば、朝御飯を食べる時間があつたのに」(塩谷 1990: 85)

この文では aa_ が二人称単数代名詞 šii を主語として取っていて、eren 「時間」が項として浮いてしまっている。ここで eren 「時間」が eren-tii {time-PROP} という具合に -tii {-PROP} を付していれば aa_ は存在を表す動詞というよりも文法化の進んだコピュラであると解釈されうる。

いずれも存在物でなく所有者が主語としてマークされることは先の説明に反するが、-tii のような所有表現におされての言語変化の途上であるのかもしれない。なお、これらの例はハイラルにおいて見られたものであり、他の地域ではまだ確認できていない。

次に、3種類の存在表現に対する否定の uwei の取る主語項について見てみる。結論から先に述べると、存在物が主語となる場合も、所有者が主語となる場合も両方見られる。次の 3-93 は存在表現が主節にないため述語人称が現れていないが、所属人称が節内の主語二人称単数をマークしている。この部分を取り出すと 3-93' のようになるであろう。

(3-93) *bii kerwel šamii tulkuur uweišni medegud aagaasaa eudee ul goljigu aasenbie.*

bii	kerwel	šamii	tulkuur	ii-šeni	med-gu-d
1SG	if	2SG.ACC	key	NEG.EXIS-GA-2SG	to.know-FUT-DAT
aa-gaas-aa	eud-ee	ul	golj-gu	aa-sen=bie	
to.be-COND-REFL	door-REFL	NEG	to.lock-FUT	to.be-PERF=1SG	

「もしあなたに鍵が無いと知っていたら、ドアを閉めないでおいたのに」

(塩谷 1990: 85)

(3-93') *šii tulkuur uweišie*

šii tulkuur uwei=šie
2SG key NEG.EXIS=2SG
「あなたは鍵が無い」

次の 3-94 は「無いもの」が主語になっている例である。これは「あなたには黒砂糖がありますか」という疑問文に対する回答である。

(3-94) *uwei, namd har saten uwei, čigaan saten bei.*

uwei namd har saten uwei čigaan saten bei
NEG 1SG.DAT black sugar NEG.EXIS white sugar EXIS
「いいえ、黒砂糖はありません。白砂糖があります」(塩谷 1990: 53)

さきに見た *bei* や *aa_* の主語項に例外的な表れが生じるのは、主語項が安定しないこの *uwei* が影響している可能性もあるだろう。

ここまで概観してきた「主語として何を取るか」(=述語人称はどの項と照応するか) という観点からこれを整理すると次の 3-95 のようになる。

- (3-95) a. **aa** biteg nadad aa-bei. 「本は私のところにあります」
book 1SG.DAT to.be-NPST 主語は本 存在するもの
- b. **bei** biteg nadad bei. 「本は私のところにあります」
book 1SG.DAT EXIS 主語は本 存在するもの
- c. **-tii** bii biteg-tii=bi. 「私は本があります」
1SG book -PROP=1SG 主語は私 所有者
- d. **uwei** bii biteg uwei=bi. 「私は本がありません」
1SG book NEG.EXIS=1SG 主語は私 所有者
- biteg namd uwei. 「本は私のところありません」
book 1SG-DAT NEG.EXIS 主語は本 存在するもの

aa_ と *bei* は、主語として存在物を、*-tii* は主語として所有者を取る。これらに対応する否定表現 *uwei* はいずれの体系にも対応している。これをまとめると次のようになる。

表 3-5: 存在表現 3 種類の使い分け

焦点	主語	時制、相について有標	時制、相について無標
存在そのもの	所有者、存在する場所	(-tii aa)	-tii
存在する場所など	存在物	aa	bei

時制、相などが有標であるとは具体的には過去時制である、進行相である、また当該の節が他の節に依存する関係になっている (cf. 4.2.) ことを指す。

ここでは主語として取られる項というものが文の旧情報を担うものであると考え、焦点とはそれに対する新情報、あるいは叙述内容の中心的役割を成すものである。「時制、相など」が「豊富である／無標である」とはモンゴル語の存在表現に関する研究である橋本(2010)での分類を参考にしたものだが、動詞述語と名詞類述語の根本的な差異がここに現れている。

3.7. まとめ

本章では述部の構造として、まず基本的な動詞述語と名詞類述語について整理した。

3.1. では、節を構成する成分の一つである述部について「項の属性や関係をあらわす」ものであると定義した。複数の項を支配して関係をあらわすという点で、典型的には動詞がこれを担う。

3.2. では動詞述語について概観した。その中で 2 つ以上の動詞が複合的に用いられ、後続する動詞が文法化して補助動詞になる補助動詞構造が盛んに用いられることを述べた。

3.3. では名詞類も単独で動詞を伴わずに述語を成すことが可能であることを述べた。ただし時制や相が有標である場合には、補助的に存在動詞 *aa_* などがコピュラとして用いられる。

名詞類には形容詞的な語や抽象的な意味の語も含まれ、中には動詞述語と組み合わせて、いわゆる人魚構文を成すものもある。このように動詞と動詞による補助動詞構造、名詞類に動詞が後続するコピュラ構造、動詞に名詞類が後続する人魚構文などの表現がダグール語には豊富であり、さらにこれらが複数組み合わせたり、前後にある種の不変化詞類の語などが組み合わせたりして、さらに複雑な構造を成すこともある。3.4. ではこれを述語複合体と呼び、アルタイ型の言語類型のモデルを示した。

3.5. では述語複合体を成す頻度の高い表現として否定を取り扱った。ダグール語の動詞は非過去時制において前置否定と後置否定の 2 種類の否定表現があり、否定のスコープなどにより使い分けられている。

3.6. では動詞述語によっても名詞類述語によっても成される存在や所有を表す表現について観察した。名詞類述語で表す場合、存在そのものを表す語 (*bei* 「ある」) を用いるものと、「～がある」という意味を表す接辞を存在物に付すという 2 種類の方法がある。これらの使い分けは存在物に重きを置くか、所有者や存在の場所などに重きを置くかによって決定される。またこれら存在や所有の否定は、*uwei* 「ない」という語を用いる一択となっている。

第四章 節のタイプと述部

本章では節のタイプを主節か非主節かに分類して、それぞれの述部の様相を概観する。節は「文を完結させるもの」すなわち主節と呼ばれるものと、それ以外に大別できると考える。その定義の詳細と述部の様相は、それぞれ以下 4.1., 4.2. で見ていく。

4.1. 主節の述部

本節ではダグール語における節のうち、主節について概観する。4.1.1. において主節とは何か、その概略を述べる。次の 4.1.2. において述語人称について概観する。これは、終助詞との関連で主節を規定するのに役立つ要素であると考えからである。主節における述語人称の位置づけは、4.1.3. 終助詞において、対人的モダリティを表出する要素群との関りとともに検討する。

4.1.1. 主節の特徴

本項ではまず主節とは何か概要を 4.1.1.1. で述べる。その上で、主節の機能を叙述 (4.1.1.2.) と希求 (4.1.1.3.) という 2 つに分類し、それぞれを担う述部の形式についてまとめる。

4.1.1.1. 概要

主節とは、「文」を構成する節のうち主たるものを指す。RRG (Role and Reference Grammar) の枠組みにおいて節とは内核 (nucleus)、中核 (core)、節 (clause) という層状構造を成すものである (Van Valin 2005, 術語の和訳は大堀 2014)。内核が本論文における述部にあたり、中核において必須項が加わり、これに周延的語句・付加成分が加わったものが節である。主節は他に依存することなく成立する独立性の高い節で、「文」は基本的に主節を有し、叙述内容の中心を主節が担う。主要部が後置されるダグール語の基本語順にあっては、複数の節から成る場合でも通常は主節の述部が「文」の末尾に置かれる。端的には「文を完結させる」のが主節の述部の機能である。「文」なるものを厳密に定義するのは困難であるが、ひとまとまりの叙述内容を情報の受け手に対して発信する単位であると考え、そこには対人的モダリティのような話者の態度が現れうるものと考えられる。

本論文ではこうした対人的モダリティを表現する方法として、ダグール語の終助詞の機能に着目したい。そこで、まず本項において終助詞を後続させる形式について形式と用法を確認する。これは 2.2.1. の表 2-1, 2-2 で整理したものを再度検討し、個々の形式についても用例を挙げて記述するものである。次節以降では、4.1.2. において述語人称、4.1.3. において終助詞についてそれぞれ概観する。述語人称を扱うのは、終助詞との関連で主節を規定するのに役立つ要素であると考えからである。具体的な主節における述語人称の位置

づけは、4.1.3. 終助詞において、対人的モダリティを表出する要素群との関りとともに検討する。終助詞を付することができる形式とは、凡そ表 2-1 (再掲) の動詞接辞がこれにあたる。

表 2-1: 終助詞を付することができる動詞接辞 (再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-yaa(,-yaat)	意志	-VOL	○			
-ø	命令	-IMP	○			
-t	複数命令	-IMP.PL	○			
-tgei	許可	-PERM	○	△		
-bei	非過去	-NPST	○	○		
-n	非過去 II	-NPSTII	○	○		
-IAA, -lii	過去	-PST	○	○		
-sen	完了	-PERF	○	○	○	○

この他、表 2-2 (再掲) では一部の終助詞を付することが可能な形式が 2 つ挙げられており、これも考察の対象とする。

表 2-2: 所属人称接辞を付することができる動詞接辞 (再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-gu	未来	-FUT	△		○	○
-gAAn, -gAAAnie -gAAAntie	未来命令	-FUT.IMP -FUT.IMP.2SG -FUT.IMP.2PL	△		○	
-AAs	仮定	-COND			○	
-tel	限界	-TERM			○	
-guOOtOOr	随伴	-SUC			○	
-m, -mkii -mklii, -mlii	立刻	-IMD			○	

この他、すべての名詞類述語もまた終助詞を後続させることが可能である。名詞類述語について具体的な議論は 3.3. で行ったが、補助動詞的にコピュラ aa_ が用いられるものについては、やはり上述の動詞接辞が現れる。

以下では、これらの動詞接辞のうち述語人称を付することができるか否かで二分し、できるものを叙述として 4.1.1.2. で、できないものを希求として 4.1.1.3. でまとめる。

4.1.1.2. 叙述

まず本項で対象とする終助詞も述語人称も付することができる形式を以下に挙げる。これらを以下では叙述の動詞接辞と呼ぶ。なお、-tgei は次項で扱う。

表 4-1: 終助詞と述語人称を付することが可能な動詞接辞 (表 2-1 より抜粋して再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-bei	非過去	-NPST	○	○		
-n	非過去 II	-NPSTII	○	○		
-IAA, -lii	過去	-PST	○	○		
-sen	完了	-PERF	○	○	○	○

非過去の形式には -bei と -n の 2 つがあり、3.5. で述べた通りこれらは基本的に肯定・否定で使い分けられる (3-53 再掲)。

(3-53 再掲) a. *oobei.*

oo-bei

to.drink-NPST

「飲む」(肯定)

b. *ul oon.*

ul oo-n

NEG to.drink-NPSTII

「飲まない」(否定)

否定文でありながら -bei が用いられているかに見える次の例 3-73 (再掲) は、次のような補助動詞構造に見られる。これは否定のスコープが本動詞のみにかかっているため、補助動詞 aa-bei の動詞接辞が -bei のままであるものと考えられる。

(3-73 再掲) *ter ugin kejee eilguemel ul medejaawei*

ter ugin kejee eil-gu-ee-mel ul med-j+aa-wei

that girl when to.marry-FUT-REFL-REFL NEG to.know-SIM+to.be-NPST

「その少女は自分がいつ結婚するか知らない」(塩谷 1990: 59)

他方、-n は 3.5.2.3. でも触れた通り、必ずしも否定文にのみ現れるわけではないため、この接辞そのものに否定の意味が含まれるとは考えない。-n は否定の ul を伴わない場合でも、まず韻文において現れることがある (4-1)。これは当該形式が古くは非過去時制を表すものとして一般に使われていた名残か、あるいは韻律に基づくものと思われる。

(4-1) *ǰau ald taliyu, ǰiduuǰ tondookun ǰorilgaan. miangen nirges huriyu, miaakaal uwei čiečliibi.*

ǰau ald tal-iiyu, ǰiduu-ǰ tondookun ǰorilgaa-n miangen
 hundred chi(length) field-ACC to.dig-SIM straight to.direct-NPSTII thousand
 nirgis hur-iiyu miaakaal uwei čieč-lii=bi
 grain seed-ACC dissatisfaction NEG.EXIS to.scatter-PST=1SG

「百尺の土地を／掘り起こしてまっすぐにする／千粒の種を／もれなく撒いた私」

(恩和巴图 (编著) 1988: 192)

また、次の例 4-2, 4-3 のように疑問の =yee を伴って聞き手に対する糾弾を含意する表現においても現れやすいようである。

(4-2) *weeree hoo medgu uweiyee ul meden bas huuyii basenš yee.*

weer-ee hoo med-gu uwei-yee ul med-n bas
 self-REFL everything to.know-FUT NEG.EXIS-REFL NEG to.know-NPSTII also
 huu-yii bas-n=š=yee
 person-GA to.ridicule-NPSTII=2SG=Q

「自分では何も知らないことも知らずに、人を笑うのか」(恩和巴图 (编著) 1988: 355)

(4-3) *weerie ul hiiǰie elmeng huuyii saatenš yee!*

weeri-ee ul hii-ǰie elmeng huu-yii saat-n=š=yee
 self-REFL NEG to.do-SIMIII rather person-GA to.interrupt-NPSTII=2SG=Q

「自分ではせず、むしろ人の邪魔をするのか」(恩和巴图 (编著) 1988: 428)

この他、el_「言う」、med_「知る」など発話内容や節を支配しうる動詞、また新疆では taal_「好む」のような動詞に肯定の -n が現れやすい傾向が若干あるようである。

過去時制を表す場合には基本的に完了の -sen が用いられる。過去 -IAA ~ -lii はやはり韻文で現れやすい (cf. 4-1)。-sen の使用の拡大に伴い使われにくくなった古い形式と言えるかもしれない。

恩和巴图 (编著) (1988) は当該要素につき述語人称が付されると -lii という形式が現れやすいという。次の例 4-4 のように -IAA に述語人称が付される例もあるので、あくまで音的な傾向にすぎないようである。

(4-4) *ter huuyii šii borooti ul duarelǰaalaas.*

ter huu-yii šii borooti ul duarel-ǰ+aa-laa=š
 that person-GA 2SG very NEG to.like-SIM+to.be-PST=2SG

「あの人のことが君はすごく嫌いだったのね」(恩和巴图 (编著) 1988: 330)

4.1.1.3. 希求

表 2-1, 2-2 のうち述語人称を付すことができないが終助詞を付すことができるものを本項で扱う。対象となる形式を次の表 4-2. に示す。

表 4-2: 終助詞を付すことができるが、述語人称を付すことができない動詞接辞

(表 2-1, 2-2 より抜粋して再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称	格接辞
-yaa(,-yaat)	意志	-VOL	○			
-ø	命令	-IMP	○			
-tu	複数命令	-IMP.PL	○			
-tgei	許可	-PERM	○	△		
-gu	未来	-FUT	△		○	○
-gAAn, -gAAAnie -gAAAntie	未来命令	-FUT.IMP -FUT.IMP.2SG -FUT.IMP.2PL	△		○	

これらのうち特殊なのは未来 -gu である。これは連体修飾節や準体節の動詞述語に付される動詞接辞であるが、3.4.2. で見た人魚構文の先行要素として主節の述部を成すことも可能である。これが終助詞 =dee, =imwoo を伴う例を、4-5, 4-6, 4-7 に示す。

(4-5) en' bait gaigerdegu dee!

en' bait gaigerd-gu=dee

this event to.be.surprising-FUT=SFP

「これはおかしいだろう！」(恩和巴图 (编著) 1988: 433)

(4-6) bii kerwel terwel asoogud aagaasaa yuguu tueerigu dee!

bii kerwel terwel asoo-gu-d aa-gaas-aa yuguu tueeri-gu=dee

1SG if way to.ask-FUT-DAT to.be-COND-REFL why to.get.lost-FUT=SFP

「私がもし道を尋ねていたら、どうして迷うことがあったのだろうか」(塩谷 1990: 85)

(4-7) bii en' beyeerini yawaasaa jubdeltie imwoo, hašil ter beyeerini yawgu imwoo?

bii en' bey-eer-ini yaw-aas-aa jubdel-tie=imwoo hašil ter

1SG this body-INS-3SG to.go-COND-REFL correct-PROP=Q or that

bey-eer-ini yaw-gu=imwoo

body-INS-3SG to.go-FUT=SFP

「私はこっちへ行ったら正しいのか、それともあっちへ行くか」(塩谷 1990: 55)

ここで *-gu* を伴う動詞述語は終助詞を伴うことで感嘆や懷疑などの意味を表している。この用法では、動詞述語が半ば状態性を表す語として一般的な動詞としての性質を欠き、述語人称も付されない。

-gu を除く他の要素は、話し手の期待や望みを伝え、働きかけるというモダリティ的な意味を担う点で共通していることから希求と呼ぶことができる。さらに、否定表現を作る際に *buu* という否定語を用いた前置否定を用いるという共通点も挙げられる (cf. 3.5.1.1.)。以下、それぞれの接辞が付された動詞述語の用例を挙げる。これらの形式が述語人称を付すことができないのは、基本的にいずれも主語となる項を意味的に制限しているからである。

意志は一人称主語の場合のみ使用され、「～しよう」という意味を表すものである (3-11 再掲)。主語の単複問わず用いられるが、新疆では一人称複数の場合に用いる形式 *-yaat* がある (4-8)。

(3-11 再掲) *bii idee taliyaa*

bii id-ee tali-yaa
1SG to.eat-ANTII to.put-VOL

「私が食べてしまおう」(恩和巴图 (编著) 1988: 387)

(4-8) *bad nekend juleen uŋyaat.*

bad nekend juleen uŋyaat
1PL together book to.see-VOL.PL

「私たち、一緒に本を読みましょう」(Yu et al. 2010: 212)

命令は二人称主語を取る場合にのみ使用され、「～しろ」という意味を表すものである。主語の単複により、*-ø*, *-tu* の使い分けがある(3-59, 3-26 いずれも再掲)。

(3-59 再掲) *ul medeese ul medenbi el.*

ul med-ees-ee ul med-n=bi el-ø
NEG to.know-COND-REFL NEG to.know-NPSTII=1SG to.say-IMP

「知らないなら、知らないと言え」(恩和巴图 (编著) 1988: 437)

(3-26 再掲) *henii čii irgui tall buu nee-ŋ+uku-tu*

hen-ii=čii ir-gu-ii tall buu nee-ŋ+uku-tu
who-GA=ever to.come-FUT-GA although PROH to.open-SIM+to.give-IMP.PL

「誰が来ても戸を開けてやってはいけない」(恩和巴图 (编著) 1988: 446)

許可 *-tgei* は三人称主語の場合に用いられるもので、「～させよう、～させろ、～させておけ」などといった意味を表すものである (4-9)。主語が複数の場合に述語人称 *=sel* が付

されることがある (4-10) が、必須ではない (恩和巴图 (编著) 1988: 336)。例 4-11 では主語が複数だが =sel が現れていない。

(4-9) *uĵiesee uĵiičitgei, duraa medetgei.*

uĵ-ees-ee uĵiič-tgei, dur-aa med-tgei
to.see-COND-REFL to.go.to.see-PERM preference-REFL to.know-PERM

「見るなら見させろ、好きなようにさせろ」 (恩和巴图 (编著) 1988: 336)

(4-10) *čulee aagaasaa ireesee iretgeisel.*

čulee aa-gaas-aa ir-ees-ee ir-tgei=sel
free to.be-COND-REFL to.come-COND-REFL to.come-PERM=PL

「暇があれば、来たいときに来させなさい」 (恩和巴图 (编著) 1988: 336)

(4-11) *hen, ted yooč hiitgei.*

hen, ted yoo=č hii-tgei
INT those what=ever to.do-PERM

「ふん、彼らの好きなようにさせておけ」 (恩和巴图 (编著) 1988: 459)

未来命令 -gAAAn の形式は上記の 3 形式と異なり、所属人称を付すことで主語を標示する。主節において所属人称で主語を標示する形式は他には無い。一人称はおおよそ意志「～しよう」に、二人称はおおよそ命令「～しろ」に、三人称はおおよそ許可「～させよう、～させろ、～させておけ」に対応する意味がある。少し間を開けて行動をする「あとで」という意味を含意するものとされる (恩和巴图 (编著) 1988: 340) ため未来命令と呼ぶが、用例数が少なくなお検討を要する。また単数 -gAAAnie, 複数 -gAAAntie という形式は所属人称を付さずに二人称に対する命令を表す要素として頻繁に用いられる。

次はそれぞれの所属人称が付された例 4-12 ~ 4-18 と、-gAAAnie, -gAAAntie の用例 4-19, 4-20 である。

(4-12) *bii ičiesee šamd ĵaagaanmeni.*

bii ič-ees-ee šamd ĵaa-gaan-meni
1SG to.go-COND-REFL 2SG.DAT to.tell-FUT.IMP-1SG

「私が行くならあなたに伝えよう」 (恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-13) *šii ičiesee namd ĵaagaanšeni.*

šii ič-ees-ee namd ĵaa-gaan-šeni
2SG to.go-COND-REFL 1SG.DAT to.tell-FUT.IMP-2SG

「あなたが行くなら私に教えてください」 (恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-14) *hulaadii ičgeeniini.*

hulaadii ič-geen-iini

PN to.go-FUT.IMP-3SG

「フラーディー (人名) に行かせよう」(恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-15) *baa buni ičgeenmaani.*

baa buni ič-geen-maani

1PL.EXCL tomorrow to.go-FUT.IMP-1PL.EXCL

「我々は明日行こう」(恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-16) *badi hauyaaraan ičgeennaani.*

badi hauyaaraan ič-geen-naani

1PL.INCL together to.go-FUT.IMP-1PL.INCL

「私たちはみんなで行きましょう」(恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-17) *taa bas ičgeentaani.*

taa bas ič-geen-taani

2PL also to.go-FUT.IMP-2PL

「あなた方も行ってください」(恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-18) *aan hoyooloon ičgeeniinaani.*

aan hoyooloon ič-geen-iinaani

3PL by.two to.go-FUT.IMP-3PL

「彼ら 2 人で行かせよう」(恩和巴图等 (著) 1988: 52)

(4-19) *ter lonkutii šar tosii arčgaanie!*

ter lonku-tii šar tos-ii arč-gaanie

that bottle-PROP yellow oil-GA to.take-FUT.IMP.2SG

「そのバター入りの瓶を持っていきなさい」(恩和巴图 (编著) 1988: 195)

(4-20) *kekuimeni hajirguorini nekend naadgaantie.*

keku-ii-meni hajir-gu-oor-ini nekend naad-gaantie

child-GA-1SG to.get.home-FUT-AI-3SG together to.play-FUT.IMP.2PL

「子どもが帰ったら一緒に遊んでやってね」(恩和巴图 (编著) 1988: 342)

4.1.2. 述語人称

本項では 4.1.2.1. において述語人称とは何かまとめ、4.1.2.2. においてその音韻・形態的特徴を、4.1.2.3. において用法について、それぞれ述べる。

4.1.2.1. 述語人称とは

ダグール語の述部に義務的に付される述語人称は、節の主語の人称と一致する接語であり、人称代名詞が文法化したものである。印欧語族の言語などに見られる動詞の人称変化

に似るが、名詞類述語などの要素にも付されたり、また一部の終助詞の後ろに付されたりすることから、ホストが比較的自由で独立性が高いところが異なる。しかし先行する要素無しに現れるほどの独立性は有さない。次の 4-21, 4-20, 4-23 は名詞類述語に付された例である。例 4-22 は名詞類述語と述語人称の間に所属人称が現れる例である。

(4-21) *bii tuyaa**=bie***.

*bii tuyaa**=bie***

1SG PN=1SG

「私はトヤーです」(恩和巴图 (编著) 1988: 229)

(4-22) *šii keku-ii-meni seb-ini**=š**=kaw*

*šii keku-ii-meni seb-ini**=š**=kaw*

2SG child-GA-1SG teacher-3SG=2SG=SFP

「あなたはうちの子の先生ですか」(恩和巴图 (编著) 1988: 229)

(4-23) *šii minii meemeemeni bišen**=šie***

*šii minii meemeemeni bišen**=šie***

2SG 1SG.GEN mother-1SG NEG=2SG

「お前は私のお母さんじゃない」(山田 2018: 169)

本論文ではこの述語人称を終助詞の序列の中に含めることで、終助詞と並び主節の述語をマークするものであると考える (4.1.3. で詳述)。モンゴル語族の言語の中では、ダグール語の他ブリヤート語やオイラト語などにも述語人称の要素が見られる。

ダグール語の述語人称は以下の通りである。母音調和による異形態は無い。

表 4-3: ダグール語の述語人称

	単数	複数
一人称	=bi~bie	=baa (包括) =daa (除外)
二人称	=š	=taa
三人称		(=sel)

※三人称複数の形式に丸括弧 () を付したのは必ず現れるわけではないためである。

以下、ダグール語の述語人称の音韻・形態的特徴を 4.1.2.2. で、その使われ方を 4.1.2.3. で概観する。終助詞との承接関係については 4.1.3. 終助詞 において扱う。

4.1.2.2. 音韻・形態的特徴

前節の表 4-3 で見た述語人称の基本形は名詞類述語の平叙文に付された場合に現れる形式である。述語人称によって、先行する動詞接辞や後続する終助詞と同化または融合することで、異形態を成すものがある。次の表 4-4 は非過去 -bei が各述語人称と融合した形を示したものである。

表 4-4: 非過去と述語人称 (形式が不可分のものについては、接語境界を示す = を省略)

	ブトハ [B]		チチハル [Q]		ハイラル [H]		新疆 [X]	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
一人称	-w(ei)	-waa -b=daa	-b(ei)=b	-b=baa -b=daa	-w(ei)=bi	-w(ei)=baa (無し)	-(w)bie ~-w	-baa -b=daa
二人称	-b(ei)=š	-b(ei)=taa	-b(ei)=š	-b(ei)=taa	-w(ei)=š	-w(ei)=taa	-b=š ~-w=š	-w=taa
三人称	-bei	-bei(=sul)	-bei	-bei(=sul)	-wei	-wei(=sul)	-bie	-bie

(恩和巴图 (编著) 1988 をもとに作成)

表からは次のことが分かる。まず第一に -bei は述語人称が付されると母音が脱落し -b という形になりやすい。表中の () は任意であることを示すものであるが、母音部分が脱落するかどうかは地域ごと、また人称ごとに異なる。次に、こうした母音脱落の結果として子音 /b/ が連続するとブトハと新疆において bb > w の変化が起こりうる。

以下ではそれぞれの人称ごとに様相を見る。

この他、二人称単数と三人称の述語人称について形態的特徴を述べる。

二人称単数の述語人称 =š は疑問の終助詞 =yee と融合し =šie という形になりやすい。融合の結果、=šie が疑問マーカーであると再解釈され、二人称単数主語以外で現れることも稀にある。次の例 4-24 では、主語 (動詞 ir_「来る」の動作主) は šau hon「紅さん (人名)」という三人称単数であると考えられるが、=šie {=2SG.Q} が現れている。

(4-24) šau hon irsenšie.

šau+hon ir-sen=šie

PN to.come-PERF=2SG.Q

「紅さんが来たのか」(山田 2016)

三人称の述語人称は、基本的に単複ともに無標であるが、複数では =sel が現われることがある (4-25)。=sel は名詞類につく複数接辞 -sel と同形であるが、名詞類以外にもつきうる述語人称のパラダイムとして現れることから別個の接語 =sel であると見做す。これは -tgei にも付されうる (cf. 4.1.1.3.)。

(4-25) *tikeer areg uwei bol-oor guarbuul-aa want-yaa gel-j eudee geulijie wantsensel.*

tikeer areg uwei bol-oor guarbuul-aa want-yaa gel-j
 then method NEG.EXIS to.become-ANT by.three-REFL to.sleep-VOL to.say-SIM
 eud-ee geuli-jie want-sen=sel
 door-REFL to.lock-SIM to.sleep-PERF=PL

「仕方なく、「三人で寝よう」と言って戸締りして寝ることにした。」(山田 2018: 168)

4.1.2.3. 用法

述語人称は自動詞主語項 (S) (4-26)、名詞述語文主語 (S) (4-27)、他動詞動作主項 (A) (4-28)に一致する。それぞれ述語人称に下線を、照応する主語項に二重下線を引く。以下同様。

(4-26) *baa unees huaindaa egš deu hoyooloo saihen amidaawbaa.*

baa un-ees huain-d-aa egš deu hoyool-oo saihen
 1PL this-ABL back-DAT-REFL big.sister little.sister by.two-REFL beautifull
 amidaa-w=baa
 to.live-NPST=1PL

「私たちはこれから姉妹二人でうまくやっています」(山田 2018: 201)

(4-27) *bii utgai naadej yawgu duartii kuub(i).*

bii utgai naad-j yaw-gu duar-tii kuu=b(i)
 1SG just to.play-SIM to.go-FUT prefer-PROP person=1SG

「私は遊びに行くのが好きな人です」(锡莉・布日古德 2014: 141)

(4-28) *taa niargen niursentaa.*

taa niargen niur-sen=taa
 2PL picture to.draw-PERF=2PL

「君らは絵を描いた」(Yu et al. 2010: 210)

一致の例外として、上述の 4-24 のように二人称単数 =š が疑問 =yee と融合することで、二人称単数以外を主語とする疑問文にも表れる現象が観察される。この他にも、ハイラルでは他の地域と較べると一人称複数や二人称複数においてズレがあるように見える対応がある。一人称複数では他の地域に見られる除外・包括の別がハイラルにおいて見られないが、一人称複数の代名詞は他地域での包括 *badi* が、述語人称としては他地域の除外 =*baa* が用いられる。また、ハイラルでは人称代名詞 *taa* が二人称単数の敬称としても用いられる。この場合、述語人称としては二人称単数 =š が現われることがある (4-29)。

(4-29) *taa sain aaĵaawšie?*

taa sain aa-ĵ+aa-w=šie

2PL good to.be-SIM+to.be-NPST=2SG.Q

「あなたは元気ですか」 (≡ 「こんにちは」) Q

また、次の新疆の例 4-30 では人称代名詞として一人称単数の *bii* が現われているが、「弟と二人で」というところが作用してか述語人称は =*baa* 一人称複数除外が対応している。他の方言ではこのような不一致は確認されない。

(4-30) *bii dewtiyee hoyool ger taldenbaa.*

bii dew-tii-yee hoyool ger tal-den=baa

1SG little.brother-COM-REFL by.two house to.put-PERF=1PL.EXCL

「私は弟と二人で家を建てた」 (Yu et al. 2010: 51)

なお、述語人称は斜格経験者項、受動の動作主項、使役の被使役者項などには一致しない。例 4-31 は「兄弟姉妹」の所有者である与位格項 *šamd* {2SG.DAT} に一致した述語人称は現れない。無標で三人称主語 (この場合、*ag deu egč ugin deu* 「兄弟姉妹」) に照応している。例 4-32 は被使役者で実際に動作を行う *deu* 「弟」に一致せず、使役者 *bii* {1SG} に一致している。

(4-31) *šamd ag deu egč ugin deu bei yee?*

šamd ag deu egč ugin deu bei=yee

2SG.DAT big.brother little.brother big.sister daughter little.brother EXIS=Q

「あなたは兄弟姉妹がいますか」 (锡莉・布日古德 2014: 18)

(4-32) *bii deudee nek kakraa barilgaasenbi.*

bii deu-d-ee nek kakraa barilgaa-sen=bi

1SG little.brother-DAT-REFL one fowl to.let.catch-PERF=1SG

「私は弟に鶏を一匹捕まえさせた」 (Yu et al. 2010: 215)

以上のように述語人称は主語と一致する必須の要素として現れるが、実際の言語使用においてはこれが現れない (一人称または二人称主語なのに述語人称の形式が現れない) 例がある。まず *bol_* を用いた「～してもよい」という意味の補助動詞構造では、見かけ上の主語と一致した述語人称は現れない (4-33)。

(4-33) *bii bas idej bolbei yee? – bolbei.*

bii bas id-j bol-bei=yee? – bol-bei.
1SG also to.eat-SIM to.become-NPST=Q to.become-NPST

「私も食べていいですか」「いいですよ」E

4-33 の先行する文「私も食べていいですか」では id_「食べる」の動作主である bii {1SG} が文の主語となり、述語人称 =bi {=1SG} が現れることが期待されるが、無標である。同様に後続の文でも、動作者 (ここでは id_「食べる」の動作主で質問者である二人称) や許可者 (ここでは bolbei「いいですよ」と回答している一人称) に一致する述語人称は現れていない。なお、類似の補助動詞構造では、本動詞に対する主語が述語人称に反映される (3-15 再掲)。

(3-15 再掲) *šii udeš ert yeekee-yees weilee kiij eurkeesenšie?*

šii udeš ert yeekee-yees weil-ee kii-j eurkee-sen=šie
2SG yesterday morning when-ABL job-REFL to.do-SIM to.start-PERF=2SG.Q

「君は昨日の朝何時に仕事を始めたのだ」(塩谷 1990: 75)

また、bol_「なる」の本動詞としての用法では主語項に対応する述語人称が現れる (4-34)。

(4-34) *dagii gargii durbend bii butun dučin dolootii bolweibie.*

dagii garg-ii durben-d bii butun dučin doloo-tii bol-wei=bie
next week-GA four-DAT 1SG all forty seven-PROP to.become-NPST=1SG

「来週木曜日で私は満 47 歳になります」(塩谷 1990: 55)

bol_ を用いた補助動詞構造では、bol_「～してもよい」の判断の内容が主体となるために述語人称の脱落が起こる (あるいは三人称主語となる) のではなかろうか。なお、duar-tii「好きだ」も述語人称が現れない例が見られるが、これは主語が「～すること」という好意の対象そのものであると判断されるためであろう (4-35)。

(4-35) *bii kumun sonsw duartie.*

bii kumun sons-gu duar-tii
1SG music to.listen-PTCP preference-PROP

「私は音楽を聴くのが好きです」(锡莉・布日古徳 2014: 70)

その他、しかるべき述語人称が現れないかに見える例はハイラルや新疆に見られ、これは他の言語の影響による述語人称の弱化あるいは脱落傾向と見ることもできる。述語人称が現れないケースとして現時点では次のような傾向を指摘する。

引用節など、主節というより文の途中であると見なされる場合に、述語人称が現れないことがある (4-36)。

(4-36) *kerbee bii šamtii yawǰ ul šaden geleesmeni, šii yoo gelǰ sanweišie?*

kerbee bii šamtii yaw-ǰ ul šad-n gel-ees-meni šii yoo
 if 1SG 2SG.COM to.go-SIM NEG to.be.able-NPSTII to.say-COND-1SG 2SG what
 gel-ǰ san-wei=šie
 to.say-SIM to.think-NPST=2SG

「もし私がお前と行けないと言ったらお前はどうか」(塩谷 1990: 82)

なお、3.2.2.3. 補助動詞構造のような表現で見た引用動詞を用いた構造でも述語人称が現れないが、引用動詞を含む述部の述語人称が引用節内の主語に一致する点異なる。

また次のような対比の文脈でも述語人称が現れないことがある。例 4-37 は文の途中であると見なされるためである可能性もあるが、例 4-38, 4-39 は文末の位置で述語人称が現れていない。

(4-37) *bii šamaas hoiroor ag, deumeni namaas hoir nas deu.*

bii šamaas hoir-oor ag, deu-meni namaas hoir nas
 1SG 2SG.ABL two-INS big.brother little.brother-1SG 1SG.ABL two years.old
 deu
 little.brother

「私はお前より二歳年上で、弟は私より二歳年下だ」(塩谷 1990: 55)

(4-38) *ǰieǰiemeni bur ig, bii bur učiikenini.*

ǰieǰie-meni bur ig bii bur učiiken-ini
 big.sister-1SG all big 1SG all small-3SG

「姉さんは一番年上で、私は一番年下だ」(塩谷 1990: 55)

(4-39) *bii eldeb hačin sonin sebjeenii sonssen aatgaič, hari tiimer sebjeenii sonssen uwei.*

bii eldeb hačin sonin sebjeen-ii sons-sen aa-tgai=č hari tiimer
 1SG any kind interesting happiness-GA to.hear-PERF to.be-PERF=also but such
 sebjeen-ii sons-sen uwei
 happiness-GA to.hear-PERF NEG.EXIS

「私は色々な種類の吉報を聞いてきたが、こんな楽しい話は聞いたことがない」

(塩谷 1990: 73)

4.1.3. 終助詞

本項では4.1.3.1.において終助詞と呼ぶべき一連の要素の概要を述べ、以下これらの要素を意味などから6つのグループに分けて4.1.3.2.~4.1.3.7.で分析する。4.1.3.8.ではこれらの終助詞と前項で見た述語人称について、その承接関係を検討する。

4.1.3.1. 終助詞とは

終助詞とは、次の例4-40, 4-41, 4-42の下線部に見るような文末に現われる小辞のことであり、聞き手への働きかけなどモーダルな文法範疇に関わるものである。典型的には恩和巴图(編著)(1988: 432-449)における「语气词」の一部がこれに該当する。少なくとも先行する要素無しに現れることはないという点で独立性が低い、先行するホストが比較的自由である点では接辞ほどの独立性の低さではない。慣例に倣い終助詞と呼ぶが、語として不変化詞類の下位分類に含めるか否かといった問題は本論文においては保留する。ただし、例文の実現形(1行目)では引用元の表記にならい分かち書きする。

(4-40) *taa namd nek aišilj ukweitaa yee?*

taa namd nek aišil-j uk-wei=taa=yee
2PL 1SG.DAT one to.help-SIM to.give-NPST=2PL=Q

「ちょっと手伝っていただけませんか(目上の人に対して)」(塩谷 1990: 91)

(4-41) *šinii šinken magel emesseniišeni činčilsen uweib kee.*

šinii šinken magel emes-sen-ii-šeni činčil-sen uwei=b=kee
2SG.GEN new hat to.wear-PERF-GA-2SG to.notice-PERF NEG.EXIS=1SG=SFP

「あなたが新しい帽子をかぶっていることに気づきませんでした」(塩谷 1990: 82)

(4-42) *bii nee šadguwemee, šii irj nee kenee.*

bii nee-ø (<-j) šad-gu+uwei=mee šii ir-j
1SG to.open-SIM to.be.able-FUT+NEG.EXIS=1SG 2SG to.come-SIM
nee-ø=kenee
to.open-IMP=SFP

「私は開けられないんだ、ちょっと開けてくれないか」H

ダグール語の終助詞を考えるにあたり、まず風間(1992)による接尾型言語の動詞複合体の研究と、ジンガン(2010)によるモンゴル語のモダリティ表現に関する研究を参照する。

風間(1992)は日本語を中心とした接尾型言語について、定動詞として用いられる場合の動詞複合体について検討している。日本語の定動詞として文末に用いられる動詞複合体の承接関係において、その最後に位置することになるのが終助詞である。風間(1992)は日本語の終助詞(=zo, =ze, =wa, =ka, =yo, =ne, =na, =sa, =tomo)に共通する特徴を次のようなものであると説明している。即ち、a. 屈折接尾辞のあとに現われる付属語であり、b. それ自体

は屈折しない（それ以上後ろに屈折形式が付されることがない）ものである（ibid: 249-250）。

さらに風間（1992: 250）は、屈折形式のあとにつく付属語は「個々の動詞の語彙的な性質に左右されることなく、基本的にどんな動詞にもつき、さらに、形容詞や、名詞あるいは名詞述語にもつく、という性質がある。ただし屈折形式のあとにつくために、今度は屈折形式の種類によってついたり、つかなかったりということが考えられる」としている。その機能は判断のムードや働きかけのムードで、日本語の終助詞は後者にあたる（ibid: 254）。

ジンガン（2010）はハルハ・モンゴル語のモダリティに関する包括的研究である。その中で終助詞についてもモンゴル語のモダリティ的な意味を担うものであるとして扱っている。これによると、ジンガン（2010）以前にモンゴル語の終助詞的な要素について明確な定義を行った先行研究は無さそうである。こうした先行研究を概観したうえでジンガン（2010: 239）はモンゴル語の終助詞を次のように定義する。

(4-43) ジンガン（2010: 239）によるモンゴル語の「終助詞」

I 形式的特徴

- ① 文の述部のみに出現する。
- ② 語形変化（活用）しない。
- ③ 文中のほかの要素に依存せず、ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる力がある。

- ##### II 機能の面では、話し手の命題に対する判断、評価など心的態度を聞き手に伝える際に、その判断や評価などへの聞き手の認識を促すための副次的心的態度をマークする。

I の②は風間（1992）の「b. それ自体は屈折しない」に当たる。一方「a. 屈折接尾辞のあとに現われる付属語」に対応する特徴は扱われていないが、ジンガン（2010）は屈折形式を伴わない名詞述語なども想定しているためであろう。形式的特徴の①③は、「終助詞」＝「文末に現われるもの」と通ずる特徴である。ジンガン（2010）は終助詞の用法を検討し、機能と承接関係を次のようにまとめている。図 4-1 では左に配置されたもののほど述語部分に近い。これによると終助詞の機能は、風間（1992）の言う判断のムード、働きかけのムード両方にまたがるものと見られる。

	対事的	対事的かつ対人的		対人的
	真偽判断	説明叙述	情報伝達	妥当化
承接位置	mön biš	san bilee yum dag	süü šiv biz bol uu	daa

図 4-1: 「終助詞」の機能段階 (ジンガン 2010: 240. 図 13 より)

ジンガン (2010) が結論付けるモンゴル語の終助詞の承接関係は、述語に近い (図中左に位置する) ものほど対事的なモダリティを表し、遠い (図中右に位置する) ものほど対人的モダリティを表すことを示している。対事的モダリティとしては叙述内容を断定または否定する「真偽判断」の機能を有する要素が含まれる。対事的モダリティ・対人的モダリティ双方にまたがる要素のうち、対事的に近いものは「説明叙述」として「説明」「回想」「心情の表明」を表すものであり、対人的に近いものは「情報伝達」で、疑問や推量を表すものであるという (ジンガン 2010: 286)。最も対人的である「妥当化」とは、「話し手が一方的に伝える内容、あるいは聞き手への働きかけには何らかの正当な理由があるということを知り手に認識させる」ものである (ibid: 278)。この研究はモンゴル語の終助詞について明確に定義し、相互の承接関係を考慮して機能のラベル付けをしており、モンゴル語学に資するところ大きいものであると考える。

風間 (1992) は日本語を中心に検討をしているが、ここで想定される接尾型言語にはモンゴル語族の言語も含まれると考えられる。本論文では派生接辞、補助動詞、屈折形式、付属語からなる風間 (1992) の動詞複合体という見方の大枠が、モンゴル語族の言語にも適用できるだろうと考えて議論を進める。モンゴル語族の言語にこれを適用するに際し注意を要するのは、屈折形式の扱いである。風間 (1992) では主として「必須性」を根拠として日本語の屈折形式を決定しているが、これは 2.2. でまとめた動詞接辞に凡そ該当する。日本語の動詞の文を終止させる屈折形式 (モンゴル語では定動詞接辞が担う) のうち直説法はみな連体修飾節の述語になる用法 (モンゴル語では形動詞接辞が担う) をも持っている (= 連体形と同形である)(4-44) が、モンゴル語でこれらは一部において区別される(4-45)。

(4-44) 日本語 ([] は屈折形式であることを表す)

ku[-ru]=yo	/	ku[-ru]	hito
to.come-IND.NPST=SFP		to.come-IND.NPST	person

*ire-x=šüü	/	ire-x	xün
to.come-PTCP.FUT=SFP		to.come-PTCP.FUT	person
		「来る人」	

(4-46) モンゴル語

- 即ち、モンゴル語の =yum は「形動詞」(PTCP)の後にのみ後続し「定動詞」(ここでは NPST)に後続しない (4-46a)。他方で形動詞未来形の接辞 -x は主文の動詞述語としては基本的に用いることができない (4-46b)。このことは =yum と「形動詞」の緊密性を示すとともに、主文の述語としては ire-x ではなく =yum あるいは ire-x=yum 全体が担っていることを示すものである。このことを考慮に入れると、先の図 4-1 は次の図 4-2 のように再編成できる。なお、この表で言う述語形式はあくまで典型的なものをラベル付けしたに過ぎず、名詞述語には一部の「形動詞」述語が含まれ、「定動詞」述語にも一部の「形動詞」述語が含まれる点に注意されたい。

	対事的	対事的かつ対人的			対人的
	真偽判断	説明叙述	情報伝達		妥当化
承接位置	mön biš	san bilec yum dag	bol uu	süü šiv biz	daa
述語形式	A) 名詞述語	B) 名詞か「形動詞」述語		C) 名詞か「定動詞」述語	

つまり例 4-46 における =yum のように、基本的に形動詞形の後ろに置かれるものを一つのグループにまとめる (図 4-2, B。ただし例外も多い) ことで、「説明叙述」の類がみな図 4-2 中の B に含まれ、さらに「情報伝達」から =bol と =uu が B に編入される。

統語上の性質が当該要素の意味や機能を決定付けるものであると考えると、図 4-2 でいう B と C の間の隔たりに、これらの文末の要素の役割の違いが現われると見ることができる。そこで筆者は、図 4-2 中の「述語形式」右部 C の =šüü, =šiv, =biz, =daa をモンゴル語における終助詞であると考えたい。定義は次の 4-47 のようになり、これはダグール語にも適用される。

(4-47) モンゴル語の終助詞の定義

節の末尾に現れて聞き手に対する働きかけの機能を有する、それ自体は文の成立に関与しない要素

「それ自体は文の成立に関与しない」とは、すなわち終助詞を削除しても述部のその他の形式に変更を加えることなく「文」や節が成り立つことを意味する。4-46 で =yum は削除すると節を成さなくなるので、ここでは終助詞と見なさない。=yum を付しても削除しても「文」や節が成り立つ -sAn, -dAg -AA といった動詞接辞もモンゴル語には存在するが、ここでは -x を含めた「形動詞」接辞を一つのもので捉え、-x の場合に =yum が現れ、対応する -nA のときに現れないことをもって説明する。

名詞類や動詞のような屈折をしない要素が、節を成す述語形式の後ろに現われるという点で、この定義は風間 (1992) とジンガン (2010) の定義を内包するものである。さらにジンガン (2010) は「終助詞」が「ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる」としているが、本論文では終助詞に従える述語の形式が「ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる」=「言い切りの形」であり、「無ければ文が成立しない」図 4-2 の B のような例を除外する (cf. 4-46)。筆者は、B の形式が動詞の形動詞形を要求することから (広い意味での) 名詞類の語であると考え。終助詞は意味的には対人的モダリティを担うものである。この点、B についても共通した意味特徴があることから、こうした形動詞形を要求する語の一部は終助詞的な要素、あるいは終助詞的な名詞類と呼ぶ。

次項からは定義 4-47 に則り、ダグール語の終助詞を分析する。恩和巴图 (编著) (1988: 432-449) はこれに該当する形式を含む雑多な要素を「語気詞」としてまとめている (4-48)。

(4-48) 恩和巴图 (编著) (1988) の「語気詞」

1. 疑問語気詞 yee
2. 肯定語気詞 dee, yum, jak, mookie, šindee, AA
3. 否定語気詞 ul, es, buu, bišen, udien, uwei
4. 醒悟語気詞 kee
5. 推量語気詞 woo, kaw(oo), b(e)ij(ee), baa
6. 強調語気詞 l, kee, kunu, mak, mati
7. 譲歩語気詞 č, čii, čig, yeeš, yAA(č)
8. 猜測語気詞 aǰ
9. 祈使語気詞 ken', kenec
10. 呼喚語気詞 AA

語気詞とは、いわゆる不変化詞（名詞類でも動詞でもないその他の語類）を意味で分類したものの一つで、恩和巴图(编著) (1988: 432) は次のように説明している。

語気詞とは語彙的な意味をもち、主に文末に置かれてその文全体にいろいろな補助的な意味あるいは情態の意味を加える語類である。ダグル語の語気詞は（人称付加成分を付すことができるなど）一部を除けば屈折形式を有さず、文の成分となることはない。

恩和巴图 (编著) (1988: 432) 筆者訳

この説明の後半はいわゆる不変化詞一般に共通する特徴である。「主に文末」とされるが、3. 否定語気詞 ul, es, buu, 6. 強調語気詞、7. 譲歩語気詞は文末に現われるものでない（＝「単独で文を終了させる」ことはできない）ため、本論文で扱う終助詞には含まれない。

残る語気詞は文末に現われ終助詞的な振る舞いをするが、ここで問題となるのが 4-47 の要件を満たしているか否かである。例えば 3. に属する bišen, udien, uwei は、3.4. 否定で扱った要素であるが、人魚構文などにおいて補助的に現れる要素であり、本項では扱わない。

次項以降はまず 4.1.2.2. で形式名詞由来の要素グループ (yum, jak, mookie)、4.1.2.3. で疑問に係る要素グループ (=yee など) について検討する。次いでその他のグループ「妥当化」の =dee について 4.1.2.4. で、推量に係るグループ (=kaw(oo)~ =woo ~ aalwoo, =b(e)ij(ee)~ =j(ee), =baa, =aǰ) を 4.1.2.5. で検討し、残る =kenec など 4.1.2.6. でまとめる。4.1.2.7. ではこれらの終助詞の承接関係について検討する。

4.1.3.2. 形式名詞由来の終助詞的な要素

モンゴル語の例 4-46 で見た =yum は図 4-2 において終助詞ではないとして除外した。これは「もの」という意味の語に由来する形式名詞であり、文法化は進んでいるが名詞と

しての性質を保持しているものであると考える。ダグール語においても、4-48 で挙げた肯定語気詞のうち *yum*, *jak*, *mookie* はモンゴル語の *=yum* に類する形式名詞由来の要素であり、共時的にも名詞類としての性質を保持しているものであると言える。ゆえに本論文で扱う終助詞の範疇からは除外する。機能としては節を名詞的な属性叙述にはめ込むもので、こうした判断のムードを表出する終助詞的な名詞類であると言える。*yum* やこれの派生形 *mookie* (< *yum*+AA+*kee* か) は名詞修飾可能な形動詞形 *-gu*, *-sen* の後ろにのみ現われる (4-49, 4-50)。

(4-49) *in hiiġ šadgu yum dee, tendee panšin aaġaabei.*

in hii-ġ šad-gu yum=dee tendee panšin aa-ġ+aa-bei
3SG to.do-SIM to.be.able-FUT thing=SFP so relief to.be-SIM+to.be-NPST

「彼はできるんだよね。だから安心している。」恩和巴图 (编著) (1988: 434)

(4-50) *en' huu tend aaġaagu mookie!*

en' huu tend aa-ġ+aa-gu mookie
this person there to.be-SIM+to.be-FUT thing

「この人はやっぱりそこにいたのか」(恩和巴图 (编著) 1988: 435)

jak は日本語「もの」の意味に対応する形式名詞と同形で、「用法は *yum* とほぼ同じだが疑問詞疑問文には用いられない」(恩和巴图 (编著) 1988: 435) という。恩和巴图 (编著) (1988) が挙げる例では *-bei* や希求の動詞接辞に後続する例は無く、いずれも名詞述語や *-gu*, *-sen* に後続するものであり (4-51)、*jak* そのものが格接辞を伴う例まで挙げられている(「屈折しない」とする恩和巴图 (编著) (1988) の説明に反する)(4-52)。

(4-51) *elgud huuyii usugui ul sonsgu jak.*

el-gu-d huu-yii usugu-ii ul sons-gu jak
to.say-FUT-DAT person-GA word-GA NEG to.hear-FUT thing

「言っても人の話を聞かないんだ」(恩和巴图 (编著) 1988: 435)

(4-52) *weeree ireer aagu ġakii her hiibei?*

weer-ee ir-eer aa-gu ġak-ii her hii-bei
self-REFL to.come-ANT to.be-FUT thing-GA how to.do-NPST

「自分で来ているのを、どうするか」(彼は勝手に来てしまうのに、どうしたら良いんだ) (恩和巴图 (编著) 1988: 435)

従って 4-47 の基準に照らせば、4-49~4-52 に見る *yum*, *mookie*, *jak* は終助詞ではない。しかし次のような例も見いだせる。恩和巴图 (编著) (1988) は *yum* の変化した形式として *yumoo*, *moo* (< *yum*+AA) もあるとするが、これが *-bei* とともに用いられている。

(4-53) *ekee, šii hertgaan enne sawjabš moo.*

ekee, šii hertgaan enne saw-ĵ+a-b=š moo
sister 2SG why here to.sit-SIM+to.be-NPST=2SG thing

「姉さん、どうしてここに座っているの？」 (恩和巴图 (编著) 1988: 434)

この形式は恩和巴图 (编著) (1988: 434) に 1 例だけ挙げられたものだが、疑問詞疑問文限定で用いられるという。ここで考えられるのは疑問を表すマーカーとして文法化が進むと終助詞としての性質が得られるという可能性である (cf. *ĵak* の「疑問詞疑問文に用いられない」という記述)。次項ではこれと関連して疑問を標示する要素を検討する。

4.1.3.3. 疑問を標示する要素

図 4-2 では、モンゴル語における極性疑問を標示する要素 *=uu* (/=*üü*) が終助詞ではなく、より名詞的な性質を保持したものであると考えた。他方、これに意味機能の対応するダグール語の形式 *=yee* は次の例 4-54 に見るように *-bei* の後ろに用いられ、*-gu* の後ろに用いられることはないことから、終助詞であると言える。

(4-54) *šii niaken usugu šadbeiš yee?*

šii niaken usugu šad-bei=š=yee
2SG Mandarin word to.be.able-NPST=2SG=Q

「あなたは漢語ができますか。」 (恩和巴图 (编著) 1988: 433)

山田 (2017) ではブリヤート語や中世モンゴル語と比較し、もともと述語人称は述語と疑問マーカーの間に述語人称 (主語代名詞) が入ることは無かったが、ダグール語は疑問マーカーが述語人称よりも後ろに移動したと説明した。そしてこれと並行的に形動詞形 *-gu* に後続することができなくなるという終助詞化が進んだものであると考える。まとめると、次のようになる。

(4-55) 疑問マーカーと述語人称の承接

動詞=疑問マーカー=述語人称 (中世モンゴル語など)

↳ 疑問マーカーは終助詞化の程度が低く、名詞類的である

動詞=述語人称=疑問マーカー (ダグール語)

↳ 疑問マーカーは後ろへ移動し終助詞化が進んだ

モンゴル語における極性疑問を標示する要素も、こうした段階の一途にあり、ダグール語の対応表現と較べるとより名詞的なものであると解釈できる。

先に 4-53 でみた =moo も疑問詞疑問のマーカ―として文法化が進み、終助詞的になったものと考えられる。類例が塩谷 (1990) で疑問詞疑問を標示する imee として挙げられているが、これは -gu, -sen に後続する例しか挙げられていない (4-56)。ハイラル・ダグール語における当該形式もおそらく yum に由来する形式であり、文法化の度合いの低さを示す例であると言える。述語人称との共起例は得られていない。

(4-56) *ter yuguu eimer-tii čangel-ǰ+aa-gu imee ter-ii wačer-ii-ini*

ter yuguu eimer-tii čangel-ǰ+aa-gu imee ter-ii wačer-ii-ini
 that why such-PROP to.be.tired-SIM+to.be-FUT thing that-GA reason-GA-3SG
 med-wei=š=yee
 to.know-NPST=2SG=Q

「彼はどのようにしてこんなに疲れているんだ。理由を知っているか？」(塩谷 1990: 93)

4.1.3.4. 「妥当化」の =dee

=dee は恩和巴图 (編著) (1988) で肯定語気詞と呼ばれているもので、ここではジンガン (2010) に倣い「妥当化」の機能があると見る。「妥当化」とは、この形式 =dee に類似するモンゴル語の daa に付されたラベルで、「話し手が一方的に伝える内容、あるいは聞き手への働きかけには何らかの正当な理由があるということを聞き手に認識させる」(ジンガン 2010: 278) ものである。

ダグール語の =dee は意志や命令など希求の定動詞接辞の後ろや (4-57)(4-58)、述語人称の後ろにも (4-59) 現われる。

(4-57) *ter en' ewee tend tikeesee nogue šamd ukyaa dee.*

ter en' ewee tend tikeesee nogu-ee šamd uk-yaa=dee
 that this mother there so dog-REFL 2SG.DAT to.give-VOL=SFP

「そこでこのおばあちゃんは、それならうちの犬をあげようね (と言った)」

(山田 2011)

(4-58) *šii ǰalgaa usgulǰ dee!*

šii ǰalg-aa usgulǰ-ø=dee
 2SG to.continue-ANTI to.speak-IMP=SFP

「続けて話せよ」(恩和巴图 (編著) 1988: 433)

(4-59) *ul uǰiičieč huu her ičsenš dee?*

ul uǰiičieč huu her ič-sen=š=dee
 NEG onlooker person why to.go-PERF=2SG=SFP

「見に行かない人が、どうして行ったなんてあろうか」(恩和巴图 (編著) 1988: 437)

ダグール語の =dee は他の終助詞とも組み合わせて使用され、恩和巴图 (编著) (1988) が挙げるものだけでも =yee=dee, =yum=dee, =kee=dee, =kaw=dee, =bij=dee, =aj=dee といった組み合わせの後ろ側として現れる。同じ肯定語気詞には šindee という形式が挙げられているが、これも=dee から成ったものであろう。図 4-1, 4-2 でも見たようにモンゴル語の daa が一番外側に位置する (つまり述語から遠い、最後尾に接続する) のと同様に、ダグール語の =dee も承接の末尾の終助詞であるようだ。次の例 4-60 の =iiy=dee は =yee=dee の変化した形で、疑問マーカーの =yee を含むが、文全体では疑問というより反語として用いられるものであるという (恩和巴图 (编著) 1988: 433)。

(4-60) *ul irensel iiydee.*

ul ir-n=sel=iiy=dee

NEG to.come-NPSTII=3PL=Q=SNP

「彼らはきっと来る」(恩和巴图 (编著) 1988: 433)

このように -bei などに後続しうる終助詞や動詞の希求形の後ろに付されることから、=dee は終助詞であり =gu の後ろには付かず =bei の後ろに付くことが期待される。しかし実際には、4.1.1.3. で見たように -gu に後続する例が見られる (4-5 再掲, 4-6 再掲, 4-61)。これはモンゴル語の daa と異なる現れである。

(4-5 再掲) *en' bait gaigerdegu dee!*

en' bait gaigerd-gu=dee

this event to.be.surprising-FUT=SNP

「これはおかしいだろう！」(恩和巴图 (编著) 1988: 433)

(4-6 再掲) *bii kewgel tewgel asoogud aagaasaa yuguu tueerigu dee!*

bii kewgel terwel asoo-gu-d aa-gaas-aa yuguu tueeri-gu=dee

1SG if way to.ask-FUT-DAT to.be-COND-REFL why to.get.lost-FUT=SNP

「私がもし道を尋ねていたら、どうして迷うことがあっただろうか」(塩谷 1990: 85)

(4-61) *ter keekeeyii usiini hoo ter noguiyiini wailhen aaajaagu dee.*

ter keekeeyii us-ini hoo ter nogu-ii-yiini wailhen aa-j+aa-gu=dee

that cat-GA hair-3SG all that dog-GA-3SG near to.be-SIM+to.be-FUT=SNP

「その猫の毛が犬の近くにあったのだ」(山田 2011)

これは非過去 -bei の後ろに =dee が現われ得ないことを示すものではない。次の例 4-62, 4-63 のように定動詞接辞であっても共起し得る。4-64 は名詞類述語と共起する例である。

(4-62) *haluun uder bolbei kawdee.*

haluun uder bol-bei=kaw=dee

hot day to.become-NPST=SFP=SFP

「暑い日になるだろうね」(恩和巴图 (编著) 1988: 442)

(4-63) *jee, ekee, uj kekuee, kekušeni edee yookie saiken amarjii wantjaabei dee.*

jee ekee uj-ø keku-ee keku-šeni edee yookie saiken amar-jii

INT sister to.see-IMP child-REFL child-2SG now how well to.rest-SIMIII

want-j+aa-bei=dee

to.sleep-SIM+to.be-NPST=SFP

「さあ、姉さん見なさい、お子さんを。お子さんは今なんてよく眠っているんでしょう」(恩和巴图等 (编) 1988: 302)

(4-64) *ter mak mori dee!*

ter=mak mori=dee

that=EMP horse=SFP

「それでこそ馬だ！」(恩和巴图等 (编) 1988: 305)

4.1.3.5. 推量に係る要素

恩和巴图 (编著) (1988) は推量語気詞として =kaw(oo)~wooo~aalwoo, =b(e)ij(ee)~j(ee), =baa、猜測語気詞として =aĵ を挙げている。推量語気詞は「だろう」のような意味を表すもので、次の例 4-65 では =kawoo を =baa に置き換えることもできるという。猜測語気詞について塩谷 (1991: 70) は「自問」と呼び、ハイラル・ダグール語につき =aĵ に当たる終助詞として =aaĵ という形式を取り上げている (4-66)。

(4-65) *in gonsuood yaarii-bei, moroosoo irj ul šaden kawoo.*

in gonsuoo-d yaarii-bei, moroosoo ir-j ul šad-n=kawoo

3SG job-DAT to.be.busy-NPST maybe to.come-SIM NEG to.be.able-NPSTII=SFP

「彼は仕事が忙しいからたぶん来られないだろう」

(4-66) *buni uder yawwei aaĵ yee?*

buni uder yaw-wei=aaĵ=yee

tomorrow day to.go-NPST=SFP=Q

「明日行くだろうか？」(塩谷 1990)

これらのうち、=aalwoo, =aĵ~aaĵ は名詞述語や -gu に後続する例 4-67, 4-68 も見られる。ただ、これらは存在動詞 aa_ に由来する形式であり、そのコピュラ的な用法の名残として -gu に後続するものと思われる。この点で、これらは文法化の途上にあると言いうるだろう。なお、b(e)ij(ee) が形動詞形の後ろに用いられる例は得られていない。

(4-67) *higkeelii hiisen aas sain aalwoo.*

higkeelii hii-sen=aas sain=aalwoo

little.bigger to.do-PERF=COND good=SFP

「大きめに作ったら良いだろう」(恩和巴图 (编著) 1988: 442)

(4-68) *buni tenger yamer bolgu aaǰdee?*

buni tenger yamer bol-gu=aaǰ=dee

tomorrow sky how to.become-FUT=SFP=SFP

「明日は天気どうなるだろうか」(塩谷 1990: 65)

問題となるのは、これらの形式 (=baa を除く、=kaw, =b(e)ij, =aǰ) が動詞述語と述語人称の間に現われる例が見られることである (4-69, 4-70, 4-71)。

(4-69) *taa hoir tašierǰaabei kawtaa.*

taa hoir tašier-ǰ+aa-bei=kaw=taa

2PL two to.mistake-SIM+to.be-NPST=SFP=2PL

「君らは間違っているんだろう」(恩和巴图 (编著) 1988: 442)

(4-70) *bii mange bijbi.*

bii mange=bij=bi

1SG great=SFP=1SG

「私は強いだろう」(恩和巴图 (编著) 1988: 443)

(4-71) *badi hiiǰ šadbeič aǰdaa yee?*

badi hii-ǰ šad-bei=č=aǰ=daa=yee

1PL.INCL to.do-SIM to.be.able-NPST=also=SFP=1PL.INCL=Q

「我々にできるだろうか」(恩和巴图 (编著) 1988: 447)

推量とは、叙述内容に対する話者自身の認識であり、これまで他に見てきた対人的モダリティというよりは対事的モダリティを表出するものであると言える。述語人称の出現位置を境に前か後ろに現れるという分布は、こうした対事的・対人的モダリティの別を反映したものであると言える。

4.1.3.6. その他の要素

恩和巴图 (编著) (1988) の挙げる語気詞のうち、残るは醒悟語気詞、祈使語気詞である。醒悟語気詞とは気づきや驚きを表すもので、=k(ee) (=dee が続くと母音が落ちるという) が該当する。=kee は述語人称よりも後ろに現れる (4-72)。祈使語気詞は主に希求の定動詞接辞の後ろに用い、命令などの語調を和らげる =ken', =kenec がある (4-42 再掲)。例 4-73 の =kee は気づきや驚きというよりは、=ken', =kenec の用法に似る。

(4-72) *uĵigud bii en' ahuurii emsgudmeni ul barten kee.*

uĵi-gu-d bii en' ahuur-ii ems-gu-d-meni ul bart-n=kee
to.see-FUT-DAT 1SG this pants-GA to.wear-FUT-DAT-1SG NEG to.fit-NPSTII=SFP
「見たところ私がこのズボンを履いても合わないよ」(塩谷 1990: 80)

(4-42 再掲) *bii nee šadguwemee, šii irĵ nee kenec.*

bii nee-ø (<-ĵ) šad-gu+we=mee šii ir-ĵ nee-ø=kenec
1SG to.open-SIM to.be.able-FUT+NEG=1SG 2SG to.come-SIM to.open-IMP=SFP
「私は開けられないんだ、ちょっと開けてくれないか」H

(4-73) *nek dal badaa idyaa kee!*

nek dal badaa id-yaa=kee
one buckwheat meal to.eat-VOL=SFP
「ひとつお蕎麦でも食べましょうよ」(恩和巴图 (编著) 1988: 441)

ところで =kee には同音異義の不変化詞(「強調」を表す小辞)があり、恩和巴图 (编著) (1988) の言う強調語気詞に当たるものである(例 4-74 の =wel の類、下線部)。次の例 4-74 では =kee が述語人称 (=sel {=3PL}) に先行するよう見えるが、終助詞ではない。これらの =kee, =wel があることで、4-74 は終助詞 =bij や =dec が無ければ成り立たない文になっているところが終助詞と異なる点である。

(4-74) *ted irbei kee wel bijseldec.*

ted ir-bei=kee=wel=bij=sel=dec
those to.come-NPST=EMP=EMP=SFP=PL=SFP
「彼らはきっと来るだろうな」(恩和巴图 (编著) 1988: 443)

この他に塩谷 (1991: 75) では =guee という「婉曲的否定疑問」の形式を挙げている(4-75)。これは否定疑問の形式で、婉曲的に誘いかける働きがあるものと思われる。

(4-75) *yawweiš guee?*

yaw-wei=š=guee
to.go-NPST=2SG=SFP
「行かないのですか」(塩谷 1990: 75)

4.1.3.7. AA について

母音調和による異形態を持つ AA という形式が、恩和巴图 (编著) (1988) では肯定語気詞 (=dec, yum などの仲間) と呼喚語気詞(呼びかけに用いる)に挙げられている。後者に

については「長母音や二重母音、n で終わる語の場合は語末音節を強めるだけで、呼喚語気詞は用いない」(恩和巴图 (編著) 1988: 448) とされる。

塩谷 (1990) がまとめるハイラル・ダグール語の例を観察すると、n 以外の子音で終わる文では全て AA が現われている (4-76)。そこで筆者はこれを「文末 (文の切れ目) を示す音調や抑揚などと並び立つ要素」であると考え、本質的に恩和巴图 (編著) (1988) が扱う AA と同一のものであると見る。その出現の有無は、文末の音環境 (長母音や二重母音および n の後ろでは現れない) ばかりでなく、当該の文の調子 (イントネーション) や地域差個人差などによっても条件付けられると思われる。4-47 の定義「それ自体は文の成立に関与しない」を考えると、文の切れ目を示し文の成立に関与するものであるという点で終助詞とは見なさない。なおチチハル・ダグール語では文末位置の n 音が一律脱落し、AA として実現する (4-77)。例では実現形の該当箇所の下線を引く。

(4-76) *en' saren bajir ee. namd nek aruun saren ul ukenš yee?*

en' saren bajir namd nek aruun saren ul uk-n=ši=yee
this umbrella darty 1SG.DAT one clean umbrella NEG to.give-NPSTII=2SG=Q

「この傘は汚いので、きれいな傘をくありませんか」(塩谷 1990: 64)

(4-77) *in yuguu ul ir ee.*

in yuguu ul ir-ø(<-n)
3SG why NEG to.come-NPSTII

「彼は何故来ないんだ」H

4.1.3.8. 述語人称と終助詞の承接関係

当該の述語が言い切りの形であるかどうかの補助的な判断基準としても用いた述語人称は、4.1.2.3. でも見たようにより述語位置に近いものである。述語人称そのものは屈折形式ではなく、母音調和を受けず先行する語類を問わない接語であり、4.1.3.5. でみたように述語との間に終助詞の介入を許すという性質がある。言い切りの形に後続するものである点は終助詞に近いが、述語人称が文の成立の必須要素となる点や、対人的モダリティを担うというよりは叙述内容の成立に関わる点は終助詞と異なる。

風間 (1992) はエスキモー語を例にとって「動詞複合体を閉じる屈折形式が人称の範疇をふくむ言語は他にも多くみられる」(風間 1992: 258) としている。ダグール語やブリヤート語などに見られる述語人称もこれに似るが、動詞複合体というよりは名詞類述語などを含む述部を閉じる形式であると言える。本項を通じて得られた終助詞をまとめ、述語人称を含めた承接関係を次のように提案する。なお、=kenee については述語人称と共起しないため承接関係からは判断できず、=baa については用例が十分に得られず、検討も不十分であるが、それぞれ意味役割からそれぞれ推量と働きかけに分類した。このため分類が仮のものであることを示すために <> を付してある。

☞述語主要部に近い		述語主要部から遠い☞	
推量	述語人称	働きかけ	「妥当化」
=kaw(oo)	=bi	=(yu)moo	=dee
=b(ei)j	=š	=yee	
=aaĵ	=baa	=kee	
<=baa>	=daa	<=kenee>	
	=taa		
	=sel		

図 4-3: ダグール語の終助詞の承接関係

図 4-1, 4-2 と同じく、左に行くほど内側 (述語に近い) であり、この序列に従って承接する。一番内側に話し手の判断に関わる対事的な要素 (推量など) が入り、それより外側に「働きかけ」として疑問や希求に関わるものが来ると考えられる。この両者の間に主語人称と一致する述語人称の要素が入る点は、両者の機能が明確に異なるということを明示するものと思われる。

4.2. 非主節の述部

本節ではダグール語における節のうち、主節でない節＝非主節の述部について概観する。

4.2.1. において非主節とは何か、その概略を述べる。次の 4.2.2.~4.2.4. では節連結のタイプごとに、等位接続、従位接続、連位接続の順に概観する。

4.2.1. 非主節とは

非主節とは、前節で見た主節と対称的に、聞き手に対する判断のムード、働きかけのムードを表出するような終助詞が現れえず、「文を完結しない」節であると言える。すべて発話は何らかの形で伝達することが目的であるとするならば、聞き手に対する働きかけが存在しない「文を完結しない」節は、不完全であり、他に依存していると言える。非主節とは主節に依存し、独立性の低い節を指すものと考えられる。

例えば次の 例 4-78 では、文末の **kert-bei**「横になる」が主節の述語であり非過去時制であること、三人称主語であることが示されている。これに対し、**čangel-j** **haĵir-aas-aa**「疲れて帰ってきたら」、**bilaad-gu-ini**「鳴くのを」は独立の時制が表示されておらず (-gu 未来 は未来時制を表していない)、また **sons-jie**「聞きながら」は独立の時制も主語も示されていない。これらは主節に依存していると言える。

(4-78) *kaldeg huu čangelj haĵiraasaa ĵilĵmaayii kamgii bilaadwuini sonsjie kertbei.*

kaldeg huu	čangel-j	haĵir-aas-aa	ĵilĵmaa-yii	kamgii
poor person	to.be.tired-SIM	to.get.back-COND-REFL	swallow-GA	kinds
bilaad-gu-ini	sons-jie	kert-bei		
to.tweet-FUT-3SG	to.listen.to-SIMIII	to.lie-NPST		

「貧しい人は疲れて帰ってきたら、燕がいろいろ鳴くのを聞きながら横になる」

(恩和巴图 (编著) 1988:104)

前節でみたように、次の表 2-1 に含まれる動詞接辞は終助詞を付すことが可能なもので、終助詞を付すことなどによって確定した節の叙述内容を相手に届ける役割を担うものである。叙述内容を確定することができる点で、独立性の高い節を成すものであると言える。

表 2-1: 終助詞を付することができる動詞接辞 (再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-yaa(,-yaat)	意志	-VOL	○			
-ø	命令	-IMP	○			
-tu	複数命令	-IMP.PL	○			
-tgei	許可	-PERM	○	△		
-bei	非過去	-NPST	○	○		
-n	非過去 II	-NPSTII	○	○		
-IAA, -lii	過去	-PST	○	○		
-sen	完了	-PERF	○	○	○	○

一方、次の表 2-2 も一部終助詞が付されるものについては主節を成すものとして扱ったが、所属人称によって節内の主語を標示することのできるこれらの動詞形式は、より名詞項のような性質の節を成す述語となると考えられる。

表 2-2: 所属人称接辞を付することができる動詞接辞 (再掲)

動詞接辞	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称接辞	格接辞
-gu	未来	-FUT	△		○	○
-gAAn, -gAAAnie -gAAAntie	未来命令	-FUT.IMP -FUT.IMP.2SG -FUT.IMP.2PL	△		○	
-AAs	仮定	-COND			○	
-tel	限界	-TERM			○	
-guOOtOOr	随伴	-SUC			○	
-m, -mkii -mklii, -mlii	立刻	-IMD			○	

表 2-3 は終助詞を付することができないことや、述語人称も所属人称も付することができないことなどから節としての独立性が低く、主節に依存する節を成す述語の典型である。

表 2-3: 何も付すことができない動詞接辞 (再掲)

	意味	グロス	終助詞	述語人称	所属人称	格接辞
-j	並列	-SIM				
-jii	完成	-SIMII				
-jie	並行	-SIMIII				
-AAr	先行	-ANT				
-AA	先行	-ANTII				
-n	随伴	-ASS				
-rsAAr	継続	-PROG	△	△		
-yieš	譲歩	-CONC				

複数の節などの単位の間を考える場合、それぞれの述語が成す節などの単位の独立性や依存性を見ることになる。こうした節連結の類型については、RRG (Role and Reference Grammar) の枠組みによる分類が提案されている (大堀 2014, 2015)。本論文ではこの分類に則ってダグール語の節連結の整理を試みたい。

まず接続が起こる構造上の単位という点から節を 3 つの基本構造に分けると、述語そのものの連結である内核、義務項を含む中核、その他の要素を含む節の連結という段階が設定できる (大堀 2015)。内核の連結とは本論文においては 3.1.2. 補助動詞構造で扱ったような組み合わせが想定される。3-26 (再掲) では、*nee-j uk_* という 2 つの動詞の組み合わせが主語と、「誰が来ても」という副詞句を共有していると言える。中核における義務項とは、動詞に支配される主語や目的語である。所属人称で節内の主語を表示できる表 2-2 の接辞が付された動詞形式は、再帰接辞を付すことによって主節との同主語か異主語かを標示することができる。3-93 (再掲) では *aa-gaas {to.be-COND}* 「～であれば」という形式に再帰が付され、「(鍵がないと) 知っていた」「(ドアを) 閉めないでおいた」という二つの述語が主語を共有していることが分かる。この点、主語の共有が可能な中核の連結であると考えられる。異主語の場合は連結の度合いが弱く、節としての必須要素をそれぞれ携えて連結する。4-79 では *taliešni < tali-ees-šeni {to.put-COND-2SG}* 「終わったら」に付された二人称単数の所属人称が、積極的に二人称主語を表すものというよりは後続の節との異主語を標示するものであり、二つの節はつながっているがそれぞれ項構造を完備し独立性が高い。

(3-26 再掲) *henii čii irgui tall buu nee-j+uku-tu!*

hen-ii=čii ir-gu-ii tall buu nee-j+uku-tu
 who-GA=ever to.come-FUT-GA although PROH to.open-SIM+to.give-IMP.PL

「誰が来ても戸を開けてやってはいけない」(恩和巴图 (编著) 1988: 446)

(3-93 再掲) *bii kerwelšamii tulkuur uweišni medegud aagaasaa eudee ul goljigu aasenbie.*

bii kerwel šamii tulkuur uwei-ii-šeni med-gu-d
 1SG if 2SG.ACC key NEG.EXIS-GA-2SG to.know-FUT-DAT
aa-gaas-aa eud-ee ul golj-gu aa-sen=bie
 to.be-COND-REFL door-REFL NEG to.lock-FUT to.be-PERF=1SG

「もしあなたに鍵が無いと知っていたら、ドアを閉めないでおいたのに」

(塩谷 1990: 85)

(4-79) *baitaa iškief baraa taliešni badi nekend beežend ičyaa.*

bait-aa iškief-š bar-aa tali-ees-šeni badi
 work-REFL to.deal.with-SIM to.finish-ANTII to.put-COND-2SG 1PL.INCL
 nekend beežen-d ič-yaa
 together PN-DAT to.go-VOL

「仕事が終わったら一緒に北京に行こう」(恩和巴图 (编著) 1988:366)

また接続の依存関係についても、従来は等位接続か従位接続かで捉えられてきた節連結に、節連結などを含む連位関係を加え3つの類型に分類する(大堀 2015)。それぞれの節などの要素に構造上の依存性がなく独立性が高い等位接続は、ダグール語においてそのまま並列するか、接続詞のような語を用いることで表現される。モンゴル語族の言語では一般に独立した語類として接続詞を立てないが、代動詞(ダグール語では *ei* 「こうする」、*tii* 「そうする」など(恩和巴图 (编著) 1988:391) がこれにあたる)がある種の動詞接辞を従えることで接続詞的に働く。この他、ダグール語にはいくつかの接続詞的表現が観察される。

従位接続とは、他方の節などの要素に依存する関係にある接続である。こうした依存関係は、節などの要素に格接辞が付されるなどすることで他の述語の支配下にある、すなわち依存していることが分かる。具体的には、名詞類的な性質が観察されるときに依存関係があることが多い。ダグール語の場合、*-sen*, *-gu* による形動詞形が名詞修飾節や補文節などとして現れる他、形動詞形に格接辞を付した形式が多様な節の関係を表出する。

これ以外の主節たりえない動詞形式はみな時制などを主節に依存し、しかし主節の項を成すものでないため、連位の節連結を行うものであると判断できる。

こうした3×3=9のマトリックスにダグール語の述語形式を当てはめると次のようになる。

表 4-5: ダグール語の節連結

	等位	従位	連位
内核	主節	-gu, -sen による補文節	-n / -j / -AAr / -rsAAr
中核	主節	-gu-AAr 形動詞形 (-格) N 時間表現 形動詞形 -ABL 時間表現	-j / -AAr / -n / -rsAAr -gAAnie
節	主節 (接続詞)	形動詞形 tuald	-AAs / 形動詞形 =aas -tgei=č / 形動詞形 aa-tgaič -tel, -guOOtOOr, -yieš -m / -mkii / -mklii. / -mlii

次項ではこの組み合わせをもとに等位、従位、連位の順に概観する。

なお、Janhunen (2012) はモンゴル語の節連結について 4 つに分類し、上記分類における内核の連結を含めず、また等位接続はモンゴル語において極めて限られたものであるとしている。こうした分類は尤もであり、またダグール語についても適用可能なモデルであるといえるが、本論文では用いなかった。RRG の分類における内核の連結、本論文でいう補助動詞構造が節連結と連続的なものであることが示せる点や、従来のモンゴル語研究で十分に検討されてこなかった等位接続構造について整理し直せる点で本論文における述部の分析に有用なためである。ただし Janhunen (2012: 264) による 4 分類 (関係節 (Relativization), 準体節 (Referative), 物語的連続 (Serialization), 引用 (Quotative)) のうち、引用動詞 el_ 「～と言う」(ブトハ el_, ハイラル hel_, チチハル gel_) を用いた構造については上記の分類に再分類しにくいものであり、かつモンゴル語においてもダグール語においても看過できない頻度の高い形式である。これは引用動詞の直前に主節の述部を置くことができるもので、直接引用も間接引用と同じ構造で表すことが可能であることから被引用部の独立性は高いが、等位接続とは見做しにくい。本論文では、引用動詞を用いた補助動詞構造のような表現を 3.2.2.3. で扱ったが、文と文を繋ぐような構造については引用動詞が取りうる項の問題であり、被引用部については主節同然のものであるとして、これ以上の扱いをしない。これに関する検討は今後の課題としたい。

4.2.2. 等位接続

基本的にそれぞれ内核、中核、節が互いに依存関係のない等位の関係にある場合、述部は主節と同等の形をとる。互いに無関係の独立した文を成すと見なされやすく、別個の文であるのか 1 つの文であるのか判断できないものが多い。ここでは単に、先行研究のテキストなどでも独立した文に見える 2 つ以上の述語が、カンマ (,) で結ばれた形で記述されることがあるのを以て「ネイティブが 1 文であると判断した」と考えるが、これは明確な基準を欠くものである。4.1.2.3. で述べたような述語人称の欠如や、3.5.3. で見た否定表現の

使い分けなどが基準になる可能性もあるので、今後「文」の定義とともに等位接続という節連結を検証していく必要がある。ダグール語の場合、内核に近い階層で接続詞的な要素無しで両要素が並べられる例がまま見られる。

内核が等位で結ばれる例はあまり多くないが、次のような例が見られる (4-80)。次の例の *bat-bei*, *ol-bei* は日本語では「狩って、得ても」と訳したが、*-bei* {-NPST} を主節を成す述語として直訳するなれば「狩る、得る、」となるような連結である。

(4-80) *haan' yawjii batbei, olbei, gub ugin deudee saineini ukubei.*

<i>haan' yawjii</i>	<i>bat-bei</i>	<i>ol-bei</i>	<i>gub</i>	<i>ugin</i>
where to.go-SIMII	to.hunt-NPST	to.get-NPST	all	girl
<i>deu-d-ee</i>	<i>sain-ini</i>	<i>uku-bei</i>		
younger.sibling-DAT-REFL	good-3SG	to.give-NPST		

「どこへ行って狩って、得ても、すべて妹に良いのをあげる」

(恩和巴图等 (編) 1988: 305)

また同例では、*bat-bei*, *ol-bei* に続き *uku-bei* 「与える」という述語が続いているが、これらは主語を共有する内核の連結であると言えよう。

節と節との連結では接続詞的な語が現れるが (4-81)、やはり必須ではない。

(4-81) *ter maden sain banintii, tendee huu hoo duallebei.*

<i>ter</i>	<i>maden</i>	<i>sain</i>	<i>banin-tii</i>	<i>tendee</i>	<i>huu</i>	<i>hoo</i>	<i>dualle-bei</i>
that	very	good	character-PROP	there	person	every	to.like-NPST

「彼は性格がとてもいいので、みんなに好かれています」

(恩和巴图 (編著) (1988: 431)

次の例 4-37 (再掲) のように、連結に際して述語人称を欠くような形式が現れうる。この欠如は他の節に依存していることを意味するものではないが、等位で連結していることを判断する基準となるものであるかもしれない。

(4-37 再掲) *bii šamaas hoir-oor ag, deumeni namaas hoir nas deu.*

<i>bii</i>	<i>šamaas</i>	<i>hoir-oor</i>	<i>ag,</i>	<i>deu-meni</i>	<i>namaas</i>	<i>hoir</i>	<i>nas</i>
1SG	2SG.ABL	two-INS	big.brother	little.brother-1SG	1SG.ABL	two	years.old

deu.
little.brother

「私はお前より二歳年上で、弟は私より二歳年下だ」(塩谷 1990: 55)

4.2.3. 従位接続

従位接続とは、一般に名詞修飾節や補文節などと呼ばれ、他の節に埋め込まれるという構造のものを言う。ダグール語をはじめモンゴル語族の言語ではこれを動詞の形動詞形が担う。ダグール語では *-gu*, *-sen* がついた動詞形式がこれに当たる。次の 4-52 (再掲) は名詞修飾節の例、4-78 (再掲) は補文節の例である。いずれも当該の節を [] で囲った (以下同様、節内の述語に下線)。

(4-52 再掲) *weeree ireer aagu jakii her hiibei?*

[weer-ee ir-eer aa-gu] jak-ii her hii-bei
self-REFL to.come-ANT to.be-FUT thing-GA how to.do-NPST

「自分で来ているのを、どうするか」(彼は勝手に来てしまうのに、どうしたら良いんだ) (恩和巴图 (編著) 1988: 435)

(4-78 再掲) *kaldeg huu čangelj haġiraasaa ĵiljmaayii kamgii bilaadwuini sonsjie kertbei.*

kaldeg huu čangel-j haġir-aas-aa [ĵiljmaa-yii kamgii
poor person to.be.tired-SIM to.get.back-COND-REFL swallow-GA kinds
bilaad-gu]-ini sons-jie kert-bei
to.tweet-FUT-3SG to.listen.to-SIMIII to.lie-NPST

「貧しい人は疲れて帰ってきたら、燕がいろいろ鳴くのを聞きながら横になる」

(恩和巴图 (編著) 1988:104)

4-78 (再掲) に見るように、こうした名詞修飾節や補文節では主語が属対格で標示されるが、次のように主格形で現れることも多い (4-82)。なお、この例文では主要部たる目的語項が、節中に代名詞 (*ter-ii* {that-GA} 「それ (=子供) を」) で残されている。これは新疆のみに見られる特徴かもしれない。

(4-82) *bii terii teĵieĵ awsen kewkum.*

bii ter-ii teĵie-ĵ aw-sen kewku-m
1SG that-GA to.bring.up-SIM to.take-PERF child-1SG

「私が育てた子供」(Yu et al. 2010: 219)

-gu, *-sen* を取る形動詞形は名詞修飾節や補文節の述語になることができ、名詞接辞を付することが可能である。格接辞が付された補文節は、依存する節における必須項として機能する (4-83) が、動詞接辞+格接辞が新たな意味を表出することもある。例えば、*-gu* に与位格 *-d* が付されると「～するとき／～したとき」の意味になり (3-1 再掲: 同主語, 4-84: 異主語)、*-gu* に奪具格 *-AAr* が付されると「～したら」という意味になる (8-85)。

(4-83) *buni yawguer tortsen.*

[buni yaw-gu]-eer tort-sen
tomorrow to.go-FUT-INS to.decide-PERF

「明日行くことに決めた」(恩和巴图 (编著) 1988: 364)

(3-1 再掲) *šii gargudaa saren barigaanie.*

šii [gar-gu]-d-aa saren bari-gaanie
2SG to.get.out-FUT-DAT-REFL umbrella to.hold-FUT.IMP.2SG

「あなたは出るとき傘を持ちなさい」E

(4-84) *beejen kotond ičwudšeni, beleg šamdaa barinbi.*

[beejen koton-d ič-gu]-d-šeni beleg šamd-aa
PN city-DAT to.go-FUT-DAT-2SG gift 2SG.DAT-REFL
bari-n=bi.

to.grasp-NPSTII=1SG

「あなたが北京へ来るとき、あなたに土産を用意しますよ」

(恩和巴图等 (编) 1988: 245)

(4-85) *erij olguoroo šamd ukuičgeenmeni.*

[eri-ř ol-gu]-oor-oo šamd ukuič-geen-meni
to.look.for-SIM to.get-FUT-AI-REFL 2SG.DAT to.go.to.give-FUT.IMP-1SG

「見つけたら届けに行くよ」(恩和巴图 (编著) 1988: 340)

このような構造では、3-1 (再掲) にみるように従属節内の主語が主格形のまま現れる。

この他、-gu, -sen が語を修飾する形で従位接続を成す例もある。例 4-86 では *eren* 「時」という語を修飾し「～するとき」という節を、例 4-87 では格助詞を伴い *tuald* 「ために」という語を修飾し「～するために」という節を成している。例 4-86 では節内の主語が属対格を取っているが、この節が名詞修飾節であると判断されるためであろう。

(4-86) *huuyi hudelgu erendini, hulguee toguř garliibi.*

[huu-yii hudel-gu] eren-d-ini hulgu-ee togu-ř gar-lii=bi
person-GA to.move-FUT time-DAT-3SG plow-REFL to.plow-SIM to.go.out-PST=1SG

「人が動くとき (春になると)、犁杖 (牛にひかせる耕具) で耕しに行く」

(恩和巴图 (编著) 1988: 307)

(3-38 再掲) *neigen řornii buteeř bailgaagui tuald kučelbiiyaa!*

[neigen řoren-ii butee-ř bailgaa-gu]-ii tuald kučelbii-yaa
society principle-GA to.construct-SIM to.build-FUT-GA for to.effort-VOL

「社会主義建設のために頑張ろう」恩和巴图 (编著) (1988: 359)

4.2.4. 連位接続

連位接続する非主節の述部は、主節の述部が表出するような時制などを表さない点で主節に依存していると言える。この点で、連位接続は等位接続と異なる。一方、非主節が主節の項などとして依存するわけではないという点で、従位接続とも異なる。こうした節などの要素の間の関係を示す節連結を、連位接続と呼ぶ。これは表 2-2, 2-3 で示した動詞接辞が付された動詞形式が述部となる節がその典型である。これらの動詞接辞は一般に副動詞接辞と呼ばれるもので、Janhunen (2012) がモンゴル語における副動詞接辞をその機能から *cojunct* と *disjunct* という 2 つに分類している。

ダグール語の動詞接辞のうち、同主語の節連結を表す *cojunct serialization* を担うものを表 4-6 に示す。表 2-3 (後ろに何も付かない動詞接辞) に含まれるものを多く含むが、異主語を許す *-yieš* はこれに含まない。

表 4-6: ダグール語における *cojunct*

	意味	グロス
-j	並列	-SIM
-jii	完成	-SIMII
-jie	並行	-SIMIII
-AAr	先行	-ANT
-AA	先行	-ANTII
-n	随伴	-ASS
-rsAAr	継続	-PROG

これらは先に見たように内核において補助動詞構造を成すのにも用いられるが、中核の接続も行う (4-87)。

(4-87) *kokiseltiiyaa mur jergčeĭ emeldee yebyaa.*

koki-sel-tii-yaa mur jergčeĭ emel-dee
 comrade-PL-COM-REFL shoulder to.line.up-CVB.SIM front-DIR
 yeb-yaa.
 to.advance-VOL

「同志たちと共に肩を並べて前進しよう」(恩和巴图 (编著) 1988: 359)

これに対し *disjunct serialization* とは異主語の節連結を成しうるもので、次の表 4-7 のようなものが含まれる。ここには表 2-2 (所属人称を付すことができる動詞接辞) から未来 *-gu* を除き、表 2-3 の譲歩 *-yieš* を加えたものが属する。

表 4-7: ダグール語における disjunct

	意味	グロス
-gAAAn, -gAAAnie -gAAAntie	未来命令	-FUT.IMP -FUT.IMP.2SG -FUT.IMP.2PL
-AAs	仮定	-COND
-tel	限界	-TERM
-guOOtOOr	随伴	-SUC
-m, -mkii -mklii, -mlii	立刻	-IMD
-yieš	譲歩	-CONC

Janhunen (2012) によるとモンゴル語の disjunct に含まれるものは異主語を表しうるもので、再帰接辞を付すことで同主語も表せるものが含まれる。ダグール語においても表 4-7 に示したものは譲歩 -yieš を除けば所属人称を付すことができ、これによって同主語・異主語を表し分けることができる。

条件 -AAs は所属人称を付すことのできる動詞形式を成すものであるが、節レベルの接続においてはコピュラを用い *aa-gaas* {COP + COND} あるいはその縮約形 *=aas* が用いられる。-AAs を用いるとテンスなどの操作子を用いることができないが、接続詞的に *aa-gaas* あるいは *=aas* を用いれば述部は -gu / -sen により相対時制を表すことが可能となる (4-88)。

(4-88) a. *en gaġir naġir bol-gu=aas čankendaa huar warbei.*

en gaġir naġir bol-gu=aas čankendaa huar
this place summer to.become-FUT=COND always rain
war-bei
to.enter-NPST

「夏になれば、いつも雨が降る」(山田 2015b)

b. *edee nakem eertkenčier boste aasaa saa aas aa.*

edee nakem eertken-čier bos-te=aas-aa saa aa-sen
now a.little early-DEG to.get.up-PERF=COND-REFL good to.be-PERF

「早めに起きていれば良かったな」(山田 2015b)

-gAAAnie, -tgaič, -sAAr は主節においても、また非主節においても用いることができる (4-89, 2-5 再掲)。-gAAAnie は非主節において用いられるとき、二人称単数の意味はなく主節

との同主語を表す (-gAAAn に再帰接辞が付されたものとする見方がある (Tsumagari 2003)。cf. 2.2.1.)。

(4-89) a. *bii duaraa ĵar-gaanie ačersenbi.*

bii duaraa ĵar-gaanie ačer-sen=bi
1SG freely to.use-IMP.FUT.2SG to.bring-PERF=1SG

「私は好きに使おうと持ってきたんだ」(恩和巴图等 (编) 1988: 325)

b. *ertken namei origaanie!*

ertken namei ori-gaanie
early 1SG.ACC to.call-IMP.FUT.2SG

「早めに私を呼んでください」(恩和巴图等 (编) 1988: 223)

(2-5 再掲) *bas ter usgue hasoorsaartaa yee?*

bas ter usgu-ee hasoo-rsaar=taa=yee
also that word-REFL to.ask-PROG=2PL=Q

「まだそのことを聞いているのか」(恩和巴图 (编著) 1988: 372)

終章 ダグール語の述部

本論文は、ダグール語のとくに述部の諸相に注目して文法現象の記述を行った。ダグール語の述語の形式を実例から広く観察することで次のようなことを明らかにした。

① 典型的に節の述語を成す動詞という語類の、形態とその機能

本論文では動詞を動詞語幹と動詞接辞から成る語類と定義し、2.2. では多様な動詞接辞について、機能面というよりも接辞に後続しうる要素により分類を試みた。第四章で見たように、この分類は主節・非主節といった節のタイプと連動するものである。他方、従来の分類のうち形動詞形については、名詞節を成すものとして述語複合体に関する議論において認める必要がある。ダグール語において生産的な形動詞形は未来 *-gu* によるものと完了 *-sen* によるものの2種類がある。

2.4. では動詞に関わる要素として動詞前辞について概観した。その機能はおおよそモンゴル語のそれに似るものであるが、代動詞 (*hii* 「する」と移動動詞) を伴うことで動詞化する機能がある点などを明らかにした。

② 動詞とその他の要素によって構成される、述部の構造

3.2.~3.4. では補助動詞構造やコピュラ、人魚構文など、ダグール語の述部を担う諸要素について整理した。これらは多重に現れ、述語複合体を成す。人魚構文とは動詞が *-gu*, *-sen* といった接辞を取り、名詞修飾をする形で動詞+名詞類の複合体を成すものである。

3.4. では述語複合体によってなされる否定表現について概観した。とくにダグール語の動詞は非過去時制において2種類の否定表現があり、否定のスコープなどにより使い分けられていることを明らかにした。

3.5. では存在と所有の表現について扱った。これらは動詞述語と名詞類述語にまたがり3つの表現方法があるもので、それぞれ焦点となる部分により使い分けられている。

③ 文あるいは節という統語的な単位を考える土台となる、述部の機能

4.1. では文を完結させる、主節とは何か検討した。述語人称の存在は文あるいは主節を規定するのに重要な役割を果たすが、より正確には述語人称の前後に現れる終助詞の体系、とくに述語人称よりも後ろに現れる対人的モダリティを表出する終助詞が文の切れ目をマークするのに役立っている。

4.2. では文を完結させない、非主節について検討した。そこではRRGの枠組みにより節などの要素の独立性の低さから、主節と段階的な差を有する非主節の述部の形式についてまとめた。

以上のように本論文では述部という統語論上の単位を中心にダグール語の文法記述を試みたもので、従来の個別の語類の形態とその機能からまとめられた文法記述とは異なる性質を持つ。こうした手法をとったことによって、例えば語順などの類似に見られるアルタイ型の言語を研究する際にも、3.4. 節で触れたような述語複合体（補助動詞構造、人魚構文、否定、存在文、終助詞などから成る）をモデルとした対照研究につなげていける。

今後の課題はまず第一にダグール語の述部以外の記述についても、統一的な観点からすすめていく必要があることである。とくに動詞が支配する項や副詞句などについてより広範なる検討、整理を行うことでダグール語の文法記述を完成させなければならない。

第二に、本論文によって解決できなかった問題、たとえば動詞前辞が成す意味機能や、動詞述語が人魚構文的な名詞類述語に埋め込まれることで生じる意味の変化、終助詞や節連結のより詳細な意味記述など、主として意味の面でのさらなる検討が残されている。

第三に、本論文で論じた事項はモンゴル語族を含む周辺の諸言語にも適用可能なのか、一般化可能であるのかについて研究することで研究を発展させていくことである。例えば複数の否定表現や存在表現の使い分けや、終助詞や述語人称の承接、非主節の述部がどのような様相を見せるか、などは他の言語との比較・対照研究が欠かせない。

参考文献

※モンゴル文字文献はラテン文字転写して掲載

ardaĭab. sečenkguu-a. (2004) <<monkgul un niguča tobčiyan>> deki dagur ukes kukehuta: ubur monkgul un arad un keblel un horiy-a [阿尔达扎布·斯琴高娃『《蒙古秘史》中的达斡尔语词汇』呼和浩特内蒙古人民出版社].

Anderson, Gregory D.S. (2006) *Auxiliary Verb Constructions*. Oxford University press.

朝克 (1990)「日本語とダグール語の感動詞について」『日本モンゴル学会紀要』No.20 (1989) 35-40. 東京: 日本モンゴル学会.

第二次少数民族语文科学讨论会秘书处 (1958)『达斡尔语言情况和文字问题』.

丁石庆 (主编) (2009)『摸旗达斡尔族语言使用现状与发展趋势』新时期中国少数民族语言使用情状研究丛书. 北京: 商务印书馆出版.

Dixon. R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory*. Volume 2 Grammatical Topics. London: Oxford University press. (電子版)

恩和巴图 (1983)『达汉小辞典』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

_____等 (编) (1984)『达斡尔语词汇』蒙古语族语言方言研究丛书 005. 呼和浩特市: 内蒙古人民出版社.

_____等 (编) (1985)『达斡尔语话语材料』蒙古语族语言方言研究丛书 006. 呼和浩特市: 内蒙古人民出版社.

_____ (1987a)「达斡尔语记音符号」『达斡尔族研究 第二辑』呼和浩特: 内蒙古日报社印刷厂.

_____ (1987b)「关于达斡尔语与达斡尔文字问题」『达斡尔族研究 第二辑』呼和浩特: 内蒙古日报社印刷厂.

_____ (编著) (1988)『达斡尔语和蒙古语』蒙古语族语言方言研究丛书 004. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

_____・莫尔丁・敖拉额尔很巴雅尔 (编) (1988)『达斡尔语读本』呼和浩特: 内蒙古教育出版社.

Fillmore, Charles J. (1970) The grammar of hitting and breaking (Reprinted in 2003, in *Forms and meaning in language*). Stanford: CSLI Publications.

嘎日迪 (2006)『中古蒙古语研究』中国蒙古学文库. 沈阳: 辽宁民族出版社.

橋本邦彦 (2010)「モンゴル語の存在文と所有文の否定について」『一般言語学論叢』13 号. 1-25.

胡和 (编) (1988)『达斡尔语汉语对照词汇』黑龙江省民族研究所・黑龙江省达斡尔族学会. [DAGUR-*NI*AKN *DUA*ILLML *USGSUL*]

石塚政行 (2015)「述語・項」斎藤純男・田口義久・西村義樹『明解言語学辞典』115-116. 東京: 三省堂.

- Janhunen, Juha A. (ed.) (2012) *Mongolian*. London: John Benjamins Publishing Company.
- ジンガン (2010)『モンゴル語のモダリティ: コーパスに基づく記述的研究』東京外国語大学博士論文.
- 开英 (編) (1985)『达斡尔哈萨克汉语对象词典』乌鲁木齐: 新疆人民出版社.
- 角道正佳 (1987)「ダグール語南屯方言の特徴」『大阪外国語大學學報』74-1・2. 1-18. 大阪外国語大学.
- 風間伸次郎 (1992)「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人 (編)『北の言語: 類型と歴史』241-260. 東京: 三省堂.
- _____ (2014)「日本語の類型について—「アルタイ型言語」の解明を目指して—」『北方言語研究』4. 157-171.
- _____・山田洋平 (2014)「ダグール語」東京外国語大学 語学研究所『語学研究所論集』19. 341-356.
- Khabtagaeva, Bayarma (2012) The Dagur Elements in Solon Evenki. in *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 65 (3). 335-346.
- 栗林均 (1989)「ダグール語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』597-603. 東京: 三省堂.
- 满都尔图 (主编) (2007)『达斡尔族百科词典』呼伦贝尔: 内蒙古文化出版社.
- Martin, Samuel E. (1961) *DAGUR MONGOLIAN GRAMMAR, TEXTS, AND LEXICON* Volume Four Uralic and Altaic Series, Indiana university publications.
- 蒙和 (1987)「达斡尔历史语言文学研究概况 (代序)」『达斡尔族研究 第一辑』1-13. 呼和浩特: 内蒙古日报社印刷厂.
- 孟志东 (编) (2007a)『中国达斡尔语韵文体文学作品选集(上)』呼伦贝尔: 内蒙古文化出版社.
- _____ (2007b)『中国达斡尔语韵文体文学作品选集(下)』呼伦贝尔: 内蒙古文化出版社.
- 水野正規 (1992)「モンゴル語の所属小辞」『日本モンゴル学会紀要』No.22 (1991). 42-56. 東京: 日本モンゴル学会.
- namcarai. haserdeni. (1983) *dagur kele monggul kelen u haričagulul. kukehuta: ubur monggul un arad un keblel un horiy-a* (拿木四来・哈斯额尔敦『达斡尔语与蒙古语比较』内蒙古出版社).
- 娜仁其木格・毅松・德红 (2013)『走出森林草原——达斡尔族人口城市化研究』呼和浩特: 内蒙古教育出版社.
- 大堀壽夫 (2014)「從属節の階層を再考する—南モデルの概念的基盤—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編)『日本語複文構文の研究』645-672. 東京: ひつじ書房.
- _____ (2015)「節連結」斎藤純男・田口義久・西村義樹 (編)『明解言語学辞典』135-137. 東京: 三省堂.
- 大竹昌巳 (2013a)「ダグール語音韻史の再構成 (1) —語頭の*čの摩擦音化について—」古代文字資料館『KOTONOHA』第124号. 1-13.

- _____ (2013b) 「ダグール語音韻史の再構成 (2) —母音間の *k の軟音化について—」 古代文字資料館『KOTONOHA』第126号. 1-13.
- _____ (2013c) 「ダグール語音韻史の再構成 (3) —軟口蓋音の諸相から見たダグール語の方言分岐—」 古代文字資料館『KOTONOHA』第128号. 1-17.
- 小沢重男 (1986) 『増補 モンゴル語四週間』 東京: 大学書林.
- 小澤重男 (1997) 『元朝秘史 (下)』 東京: 岩波書店.
- Поппе, Н. Н. (1930) *Дагурское наречие*. Ленинград: Издательство АН СССР.
- Poppe, Nikolaus. (1934-5) Über die Sprache der Daguren. in *Asia Major* 10. 1-32, 183-220.
- _____ (1964) Die dagurische Sprache. in *Mongolistik*. 137-142. Köln: Leiden.
- 斯欽格日樂 (2015) 「モンゴル語の補助動詞《Gar-》の機能について」『日本モンゴル学会紀要45』9-23.
- 塩谷茂樹 (1990) 「ダグール語ハイラル方言の口語資料 —テキストと注釈—」『日本モンゴル学会紀要』 No.21. 47-95.
- Тодаева, Б. Х. (1960 [1986]) *Дагурский язык*. Москва: Наука. ((1960) 'Дагурский язык'. *Монгольские языки и диалекты Китая*. Москва: Издательство восточной литературы.)
- 津曲敏郎 (1985) 「ダグール語ハイラル方言の音韻体系」『北方文化研究』17. 227-240. 北海道大学文学部附属北方文化研究施設.
- _____ (1986) 「ダグール語ハイラル方言基礎語彙」『モンゴル研究』No.17. 2-38 日本モンゴル学会.
- Tsumagari, Toshiro (2003) Dagur. in Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*. 129-153. London: Routledge.
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』第一号. 53-75.
- Тумурдэй, Г. & Б. Д. Цыбенков. (2014) *Краткий дагурско-русский словарь*. Улан-Удэ: Издательство БНЦ СО РАН.
- 植田尚樹 (2019) 『モンゴル語の母音 —実験音声学と借用語音韻論からのアプローチ』京都: 大学学術出版会.
- Van Valin, Jr, Robert D. (2005) *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge University Press.
- 烏珠尔, 欧南 (1999) 『达斡尔语标音读本』黑龙江省达斡尔族学会和齐齐哈尔市达斡尔族学会.
- _____ (2003) 『达斡尔语概论』哈尔滨出版社.
- 锡莉. K.D.・K.D. 布日古德 (2014) 『达斡尔语 366 句会话句』朝克 (主編). 北京: 社会科学文献出版社.
- 山田洋平 (2011) 「ハイラル・ダグール語の文法記述」東京外国語大学 平成 22 年度修士論文.

- _____ (2015a) 「チチハル・ダグール語の再帰所属接辞：安子匠村出身の調査協力者の発話に現れた形式-mAA に関する報告」 한국알타이학회 『알타이학보』 25. 71-84.
- _____ (2015b) 「ダグール語の (連用修飾的) 複文」 東京外国語大学 語学研究所『語学研究所論集』 20. 182-194.
- _____ (2016) 「ダグール語」 東京外国語大学 語学研究所『語学研究所論集』 21. 237-248.
- _____ (2017a) 「ダグール語の名詞述語」 『日本モンゴル学会紀要』 第 47 号. 63-77.
- _____ (2017b) 「ダグール語の終助詞」 北方言語ネットワーク編, 北海道大学大学院文学研究科『北方言語研究』 7. 83-98.
- _____ (2017c) 「ダグール語」 東京外国語大学 語学研究所『語学研究所論集』 22. 171-176.
- _____ (2018) 「ダグール語」 李林静・山越康裕・児倉徳和『中国北方危機言語のドキュメンテーション』 161-204. 成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書. 東京: 三元社.
- Yamada, Yohei (2016) “Breaking-verbalization” of Mongolian preverbs: The grammar of hitting and breaking in Khalkha Mongolian. in *Altai Hakpo* 26. 103-118.
- _____ (in preparation. a) Dagur, in Martine Robbeets (eds.) *Oxford Guide to the Transeurasian Languages*. Oxford University Press.
- _____ (in preparation. b) Preverbal and Postverbal Negation of Dagur. *Mongolica Pragensia*. Volume 10. Prague: Charles University Faculty of Arts, Department of South and Central Asia Seminar of Mongolian and Tibetan Studies.
- 山越康裕 (2005) 『シネヘン・ブリヤート語の語形成』 北海道大学平成 16 年度博士論文.
- _____ (2006) 「シネヘン・ブリヤート語」 中山俊秀・江畑冬生 (編)『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』 271-298. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Yu, Wonsoo. Kwon Jae-il. Choi Moon-Jeong. Shin Yong-kwon. Borjigin Bayarmend. Luvsandorj Bord (2008) *A Study of the Tacheng Dialect of the Dagur Language*. Altaic languages series 2. Seoul: Seoul National University Press.
- 仲素純 (編) (1982) 『达斡尔语简志』 中国少数民族语言简志丛书. 北京: 民族出版社.
- _____ (2007) 「达斡尔语的元音和谐」 《达斡尔资料集》编委会, 全国少数民族古籍整理研究室 (編)『达斡尔资料集』 第七集. 592-602. 北京: 民族出版社. [初出 (1980)『民族语文』]
- 『元朝秘史』の出典: 「東北アジア研究センター 言語資料検索システム」
<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/> (2019/11/29 確認)
- 中華人民共和国人口統計の出典: 国务院人口普查办公室・国家统计局人口和就业统计局 (編)『中国 2010 年人口普查资料』<http://stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm> (2019/11/29 確認)

記号・略号一覧

-: 接辞境界

=: 接語境界

+: 複合語内部の語境界

1, 2, 3: 1st, 2nd, 3rd person

ABL: ablative 奪格

ACC: accusative 対格

AI: ablative-instrumental 奪具格

ANT: anterior 先行

ASS: associative 連合

COM: comitative 共同格

CONC: concessive 譲歩

COND: conditional 条件

DAT: dative 与位格

DEG: degree 程度格

E: epenthesis 挿入音

EMP: emphasis 強調

EXCL: exclusive 除外

EXIS: exist 存在

FUT: future 未来

GA: genitive-accusative 属対格

GEN: genitive 属格

IMD: immediate 即時

IMP: imperative 命令

IMPF: imperfective 不完了

INCL: inclusive (1 人称複数) 包括形

IND: indicative 終止形 (日本語)

INS: instrumental 具格

INT: interjection 間投詞

NEG: negative 否定

NPST: non-past 非過去

PERF: perfect 完了

PERM: permission 許可

PL: plural 複数

PN: proper name 固有名詞

PROG: progressive 継続

PROH: prohibitive 禁止

PROP: proprietive 所有

PST: past 過去

PTCP: participle 分詞

Q: question 疑問

RDP: reduplication 重複

REFL: reflexive 再帰

SFP: sentence-final particle 終助詞

SG: singular 単数

SIM: simultaneous 同時

SUC: successive 随伴

TERM: terminative 限界

VOL: volitional 意志